

小林市文化財調査報告書 第6集

ひがし に わら
東二原地下式横穴墓群
しも ひら
下の平地下式横穴墓群

平成5年3月

小林市教育委員会

小林市文化財調査報告書 第6集

ひがし に わら
東二原地下式横穴墓群
しも ひら
下の平地下式横穴墓群

平成5年3月

小林市教育委員会

序

この報告書は、平成元年度二原地区県営ほ場整備事業に伴い、西諸県農林振興局の委託を受け、宮崎県文化課の協力のもとに行った東二原地下式横穴墓群の発掘調査及び昭和59年12月発見された下の平地式横穴墓群の調査記録です。

東二原地下式横穴墓群は、平成2年1月から同年3月まで調査され、その結果地下式横穴墓16基、円墳1基が確認され、また、剣、刀、鉄鏃、刀子、骨鏃、貝輪、鏡、朱玉などの副葬品が出土しました。また、下の平地式横穴墓群からも剣、鉄鏃、刀子などが発見されました。

小林市教育委員会では、これらの貴重な資料をもとに市史解明の糸口にしたいと考えております。

なお、調査に当たって、ご指導とご協力をいただきました宮崎県教育委員会文化課、西諸県農林振興局、二原土地改良区等関係各位に対し、深甚の謝意を表しますとともに、発掘調査に従事くださいました皆様に対しても厚くお礼申し上げます。

平成5年3月

小林市教育委員会

教育長 山口 寅一郎

例 言

1. 本書は、平成2年1月に小林市教育委員会が実施した東二原地下式横穴墓群の発掘調査と昭和60年2月に同じく小林市教育委員会が行った下の平地地下式横穴墓群の発掘調査の報告書である。
2. 発掘調査は小林市教育委員会が主体となり東二原地下式横穴墓群が平成2年1月5日から平成2年2月9日までの間行われた。下の平地地下式横穴墓群の発掘調査は昭和60年2月19日から2月21日までの間行われた。
3. 調査組織

調査主体 小林市教育委員会

教 育 長 山口寅一郎 (平成元年)

社会教育課長 川畑 正一 (平成元年度)

社会教育係長 黒木 英夫 (平成元年度)

社会教育係主事 上別府 優 (平成元年度)

調 査 員 永友 良典 (宮崎県教育委員会文化課主事・下の平地地下式横穴墓群
担当・昭和60年)

長友 郁子 (宮崎県教育委員会文化課主事・東二原地下式横穴墓群
1次調査担当・平成2年)

面高 哲郎 (宮崎県教育委員会文化課主査・東二原地下式横穴墓群
2次調査担当・平成2年)

特 別 調 査 員 松下 孝幸 (長崎大学助教授)

分 部 哲秋 (長崎大学講師)

佐伯 和信 (長崎大学助手)

本文目次

第I章 はじめに	1
第1節 発掘調査に至る経緯	1
第II章 東二原地下式横穴墓群の調査	3
第1節 発掘調査の概要	3
第2節 地下式横穴墓の分布の状況	3
第3節 地下式横穴墓	6
第4節 円墳	48
第5節 まとめ	50
宮崎県小林市東二原地下式横穴墓群出土鏡の材質についてのコメント	52
第III章 下の平地地下式横穴墓群の調査	70
第1節 はじめに	70
第2節 調査に至る経緯	70
第3節 調査の結果	73
第4節 まとめ	74
付篇 宮崎県小林市東二原地下式横穴墓群出土の古墳時代人骨	1～46

插图目次

第1图	遗迹位置图	2
第2图	東二原地下式横穴墓群周边地形图	4
第3图	遗迹分布图	5
第4图	1号地下式横穴墓实测图	7
第5图	2号地下式横穴墓实测图	9
第6图	2号地下式横穴墓玄室出土遗物实测图	10
第7图	3号地下式横穴墓实测图	11
第8图	4号地下式横穴墓实测图	12
第9图	5号地下式横穴墓实测图	14
第10图	5号地下式横穴墓玄室出土遗物实测图	15
第11图	6号地下式横穴墓实测图	16
第12图	6号·7号地下式横穴墓玄室出土遗物实测图	18
第13图	7号地下式横穴墓实测图	21
第14图	8号地下式横穴墓实测图	22
第15图	8号地下式横穴墓玄室出土遗物实测图	23
第16图	8号地下式横穴墓玄室出土骨鏃实测图(1)	24
第17图	8号地下式横穴墓玄室出土骨鏃实测图(2)	25
第18图	8号地下式横穴墓玄室出土骨鏃实测图(3)	26
第19图	8号地下式横穴墓玄室出土貝輪实测图	27
第20图	9号地下式横穴墓实测图	30
第21图	10号地下式横穴墓实测图	31
第22图	10号地下式横穴墓玄室出土遗物实测图	33
第23图	10号地下式横穴墓竖坑出土遗物	34
第24图	11号地下式横穴墓实测图	36
第25图	11号地下式横穴墓玄室出土遗物实测图	38
第26图	12号地下式横穴墓实测图	40
第27图	13号地下式横穴墓实测图	41
第28图	14号地下式横穴墓实测图	42
第29图	15号地下式横穴墓实测图	44
第30图	16号地下式横穴墓实测图	46
第31图	15号·16号地下式横穴墓玄室出土遗物实测图	47

第32図 遺構外出土土器実測図	48
第33図 門墳および土層実測図	49

表 目 次

表1 東二原地下式横穴墓群玄室内出土遺物一覧表	53
表2 東二原地下式横穴墓群玄室内出土鉄鍬分類表	53
表3 東二原地下式横穴墓一覧表	54

写真図版目次

写真図版1 遺跡遠景（北西より）、2号地下式横穴墓、2号地下式横穴墓竪出土状況、 3号・4号・5号地下式横穴墓	55
写真図版2 6号地下式横穴墓、6号地下式横穴墓人骨出土状況、7号・8号地下式横 穴墓、8号地下式横穴墓骨鏃出土状況、9号地下式横穴墓	56
写真図版3 11号地下式横穴墓、11号地下式横穴墓人骨出土状況、13号・14号地下式横 穴墓、古墳近景（北より）、第2トレンチ土層（北東より）	57
写真図版4 2号地下式横穴墓出土遺物	58
写真図版5 5号地下式横穴墓出土遺物	59
写真図版6 6号地下式横穴墓出土遺物	60
写真図版7 6号・7号地下式横穴墓出土遺物	61
写真図版8 8号地下式横穴墓出土遺物	62
写真図版9 8号地下式横穴墓出土骨鏃・貝輪	63
写真図版10 10号地下式横穴墓出土遺物(1)	64
写真図版11 10号地下式横穴墓出土遺物(2)	65
写真図版12 11号地下式横穴墓出土遺物(1)	66
写真図版13 11号地下式横穴墓出土遺物(2)	67
写真図版14 11号・15号地下式横穴墓出土遺物	68
写真図版15 15号・16号地下式横穴墓出土遺物	69

ひがしにわら
東二原地下式横穴墓群

第I章 はじめに

第1節 発掘調査に至る経緯

小林市の北西に位置する二原台地は、南面する台地である。二原台地は、名称の由来が西諸県郡地方で二番目に広い台地の意味という伝承もある。当地地上の遺跡は、堂山遺跡、二原遺跡等の弥生時代遺物散布地等のほか台地南端付近では地下式横穴墓が知られて^{注1}いる。

東二原地下式横穴墓群は、二原台地の東縁中ほどの張り出し部に位置する。昭和59年12月4日にごぼう作付のためトレンチャーで深耕中地下式横穴墓が発見され、翌年2月、市教育委員会で発掘調査を実施している。地下式横穴墓は1基単独で存在する例はないため、東二原においても10数基は存在すると考えられていた。

二原台地においては、宮崎県西諸県農林振興局が昭和57年から平成3年度まで二原地区は場整備事業を実施してきたが、当初、地下式横穴墓が所在する部分は場整備事業地区外であった。その後、地元の要望により地区内に組み込まれ昭和63年度工事を実施予定であることが判明した。そのため、県文化課では、東二原地下式横穴墓群の保存のため協議を申し入れ、市教育委員会、県西諸県農林振興局、二原地区土地改良区の4者で文化財の保存について協議を行った。協議の結果、地区除外は困難で工事は実施されることになった。当地は、ほぼ平坦であるため工事の掘削はそれ程深くはないが、地下式横穴墓は1m程下に玄室(空河)が構築されるという構造上遺構への影響は避けられないため、市教育委員会が調査主体となり地下式横穴墓推定範囲全面を工事着手前に発掘調査を行うことになった。また、調査時期については、昭和63年度は諸般の事情から発掘調査を受託するのは困難であったので、工事を1年延期し平成元年度に実施することになった。

発掘調査は、まず、平成元年12月13日から15日まで地下レーダーによる遺構探査を行い、10数カ所の空洞(地下式横穴墓の玄室部)部分やその他遺構等を確認した。その際、三角点に乗っている高まり部分の上層の観察からこの部分は盛土で古墳である可能性が出てきた。地下式横穴墓群の発掘調査は、県文化課主事長友都子の担当で平成2年1月8日から2月21日まで、円墳周辺の追加調査は県文化課主査面高哲郎の担当で3月27日から29日までの間実施した。

なお、発掘調査により東二原地下式横穴墓は、円墳1基と地下式横穴墓16基から構成され、遺構の遺存状況も良好で遺物も鏡が出土するなど貴重な地下式横穴墓群であることが判明した。市教育委員会で遺跡の現状保存について西諸県農林振興局・土地改良区へ申し入れたところ、理解が得られ地下式横穴墓群一帯約5,000㎡は地区除外にし現状で保存されることになった。現在、史跡公園として整備中である。

注1 小林市「小林市史」1965(昭和40年)



1. 東二原地下式横穴墓群 2. 新田場地下式横穴墓群 3. 三ツ山城跡
 4. 下ノ平地下式横穴墓群 5. 水滝遺跡

第1図 遺跡位置図

第Ⅱ章 調査の結果

第1節 発掘調査の概要

東二原地下式横穴墓群では、調査前に電磁波を利用したレーダーにより探査を行った。その結果地下式横穴墓があると考えられる反応のあった地点のみを人力で剥ぎ、堅坑の検出を行った。そのため地下式横穴墓の番号は遺構検出ができた順番につけられている。さらに調査終了実際に電磁波レーダーにおいて反応の無かった場所も正確を期すため重機により表土剥ぎを行い遺構検出と遺物の採集にあたった。その結果、調査区の南端部分にあらかじめ電磁波レーダーにより検出された地下式横穴墓15基と周溝を持つ円墳1基が確認された。しかしほかの地下式横穴墓群でよく確認される土器だまりについては確認されなかった。小林市において円墳が確認されたのは最初の例となる。また、地下式横穴墓群の中に円墳が所在することもその群構成を考える上で注目される。

調査の結果、15基の地下式横穴墓から直刀2点、剣6点、鉄鏃120点、骨鏃20点、鏡1点、人骨が22体出土した。特に鏡と骨鏃の出土は珍しく注目される。地下式横穴墓のタイプは全て羨門部閉塞の両袖造りであった。15基のうち6基が石閉塞で、アカホヤやロームのブロックで閉塞されたものも見られた。

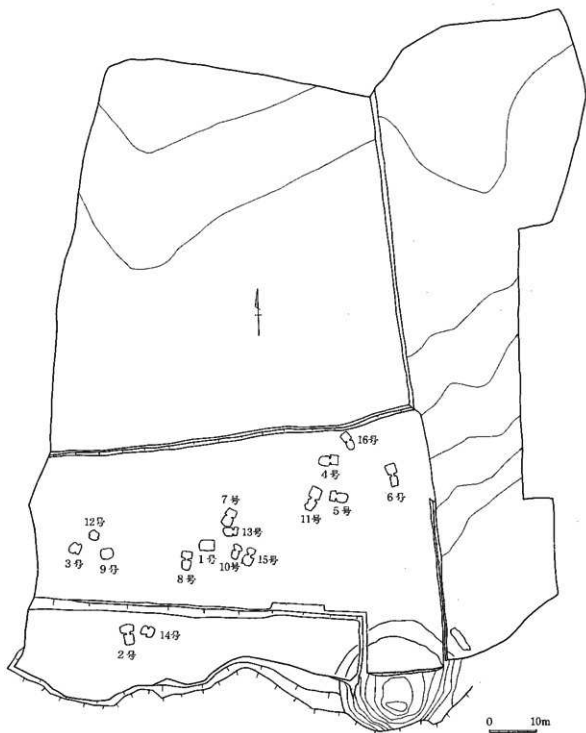
玄室内からの須恵器の出土は無いので細かな時期設定はできないがおおまかに5世紀後半から6世紀前半に営まれた遺跡であると考えられる。

第2節 地下式横穴墓の分布の状況

東二原地下式横穴墓群では地下式横穴墓の分布は大きく4つの集団に分けられる。2号・14号、3号・9号・12号、1号・7号・8号・10号・13号・15号、4号・5号・6号・11号・16号に分けられる。このうち、2号・14号、3号・9号・12号、5号・11号の地下式横穴墓はそれぞれ玄室の向きを意識して作られていると考えられるが、墳丘の共用の可能性も考えられるが削平を受けていることから確認できなかった。また、この遺跡の大きな特徴として遺跡の南西にほかの地下式横穴墓と離れて周溝を持つ円墳が所在することである。この円墳には遺構検出時に周溝が確認されたので1次調査終了後周溝部分について2次調査が行われた。その結果1次調査では確認できなかった陸橋部分を検出した。円墳の周溝から地下式横穴墓群までは半径約30mの間隔を持つ。円墳の南端は崖のため崩壊しているが築造当時は台地の縁辺であったと思われる。円墳の主体部は不明である。



第2图 東二原地下式横穴基群周辺地形図



第3圖 遺構分布圖

第3節 地下式横穴墓

1号(第4図)

遺構

1号は遺跡東端に設置してある三角点より北西に約50mの地点に所在する。

昭和59年12月、耕作中に玄室天井部が陥没して発見された地下式横穴で、昭和60年2月に調査された。発見から調査までの2ヵ月間は陥没箇所をビニールシートで覆って保存されていた。

主軸は東西方向を示しており、玄室が東側、竪坑が西側に造られている。竪坑は確認面で長さ約2m5cm、羨門部側幅約2m10cm、反対側幅約1m80cmの規模を測り方形を呈する。また、床面で長さ約70cm、羨門部側幅約85cm、反対側幅約55cmの規模を測り台形状を呈する。羨門の反対側の壁面の左右角に階段状の掘り込みがある。左角の掘り込みは2個見られる。下段の掘り込みは竪坑床面から約70cmの高さに幅15cm、奥行23cmの規模で、上段の掘り込みは約120cmの高さに幅18cm、奥行14cmの規模で掘り込まれている。右角の掘り込みは1個見られる。竪坑床面から約120cmの高さに幅20cm、奥行13cmの規模で掘られている。その下の約50cmの高さの所には幅20cm程の溝状の掘り込みが見られる。竪坑はボラ層まで掘り込んである。

閉塞方法は羨門石閉塞である。上段に羨門石はなく竪坑埋土が充填しており下段には長軸40～60cmの細長い川原石が用いられていた。下位の川原石は長軸を地下式横穴の主軸方向に向けて塞いでいるが最上段の川原石は主軸とは直角方向に塞いでいる。羨道部は幅約65cm、長さ約50cm、高さ約60cmを測る。羨門から約30cmの所から「八」の字に広がりながら玄室につながる。

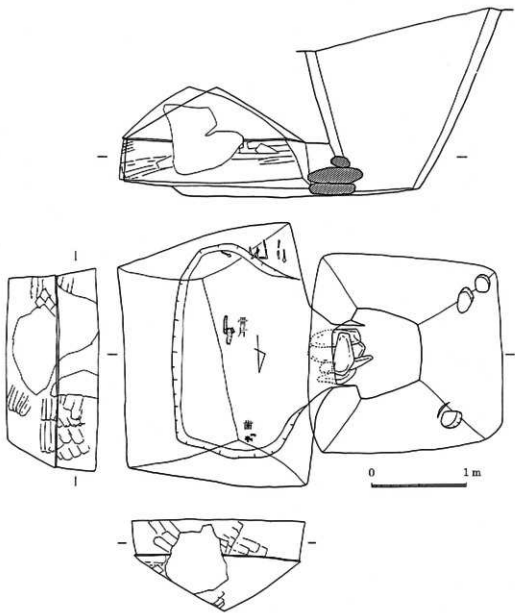
玄室は両軸を持ち平入りタイプで天井部はやや寄せ棟に近い切り妻造りを呈する。玄室の規模は奥行約2m、奥壁側幅2m15cm、羨門側幅2m75cmの台形状のプランを呈する。壁の高さは約40cmで壁と天井部との境界部分には幅3～6cmの棚状施設が四壁とも巡る。玄室中央の床面に幅2m25cm、奥行約1m10cm、深さ約10cmを測る楕円形状の掘り込みが見られる。この掘り込みはそのまま羨道に続く。天井はアカホヤ火山灰層に掘り込んである。また、壁面には欠落が見られるがノミ痕が残る。

人骨の出土状況

人骨の保存状態は悪い。掘り込み状の死床内から歯数点と四肢骨片がわずかに検出されている。歯は頭骨の位置と思われる死床の北隅に固まった状態で、四肢骨片は死床中央部で2本程検出されている。いずれも原位置をたもつと思われる。

遺物

副葬品には圭頭状の鉄鍬4本と茎刀子2本が見られる。いずれも足部の位置と思われる玄室の南西隅に集中している。鉄鍬3本と刀子2本は死床の上段で検出されたが鉄鍬1本が死床内で検出された。死床上で検出された鉄鍬は鍬部を北に向けて並列しており原位置と思われる。死床内の鉄鍬は上段から落込んだものと思われる。副葬品はいずれも玄室の南西隅に置かれていたと思われる。



第4图 1号地下式横穴墓实测图

2号

遺構（第5図）

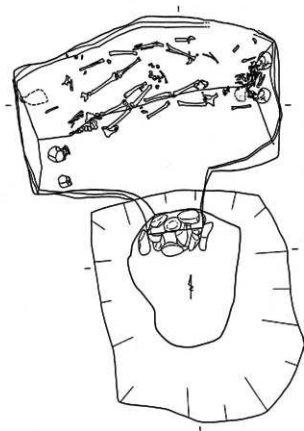
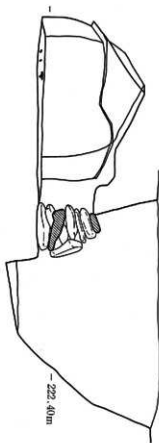
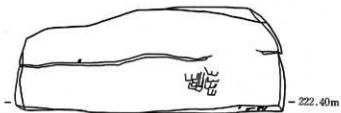
調査区の南端の崖近くに14号と隣合せて位置している。平入り、両袖造りの比較的大型の形の整った地下式横穴墓である。主軸はN1°Eを示す。図で示すとおり堅坑埋土の土層断面により少なくとも1回の追葬が確認された。主軸は南北方向を示しており、玄室は南側に堅坑は北側に作られている。堅坑は羨門部の反対側が羨門部側よりもやや狭く丸みを帯びておりいびつなU字形を呈する。堅坑の床面での大きさは長軸142cm、短軸120cmである。閉塞は石によってなされており長軸が20cm以上ある細長い河原石を用いている。羨門部は幅60cm、長さ50cm、高さ60cmを測る。玄室は両袖を持ち平入りタイプで天井部はやや穹棟に近い変形した切り妻造りを呈する。規模は奥行き174cm、幅280cm、棟から床面までの高さ114cmを測る長方形プランである。天井部には棟と又首の線が明瞭である。壁と天井部との境界部分には幅3～6cmの棚状施設が回っている。玄室内の壁面には一面に朱が塗られていた。床面は小林軽石層まで掘込まれているが、床面には川砂が敷かれており、その上に人骨が置かれていた。遺物は玄室右側奥の壁際に集中していたが、小型の鏡と刀子は奥壁際左寄りの3号人骨の左大腿骨の側に置かれていた。刀子（第6図12）の銚部分は3号人骨の上の棚状施設と天井部との境界に突き刺さっており、刀身部は折れて落下したものが追葬時に鏡の横に置かれたものと思われる。

人骨の出土状況

人骨は5体出土した。1号・2号人骨は頭を右壁際に羨門部に向けて置き、頭蓋骨の周りに多くの遺物が見られた。1号人骨は頭蓋骨と下肢骨が残っており、上半身の骨はほとんど残っていない。2号人骨は頭蓋骨と骨盤の一部、下肢骨の遺存状況が良好であった。3号・4号・5号人骨は頭を1号・2号人骨と反対の左壁際に置いていた。3号人骨は骨盤の一部と下肢骨の残りが良く、頭蓋骨などの上半身の骨はほとんど残されていなかった。特に頭蓋骨はわずかな骨片と骨の痕跡が残されているだけであった。4号人骨はこの5体の中で最も遺存状態が良い人骨である。頭蓋骨、脊椎、肋骨、骨盤、下肢骨が残されていた。4号人骨は頭を左壁際やや羨門部より置き、足を2号人骨と3号人骨の間に置いている。1号人骨は4号人骨を置くために下肢骨がかたづけられた可能性が考えられる。5号人骨は頭蓋骨の頭頂部のみが左側に残されていた。人骨についての詳細は付篇を参照されたい。

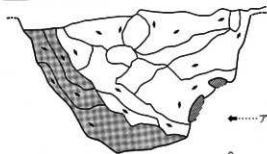
遺物（第6図）

玄室の右奥に遺物が集中して置かれていた。また、小型の珠文鏡が玄室左手奥の壁ぎわから、その上の棚状施設と天井部分の境界に刀子（13）の先端部分が突き刺された状態で出土した。13の身の部分は、珠文鏡の右横に置かれていたが、腐食により折れて落下した時の原位置を保っていない。したがって追葬が行われた時に刀子の身の部分は珠文鏡の横に置かれたものと思われる。



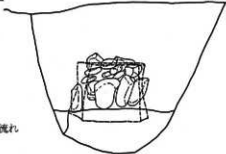
221.534m

221.534m

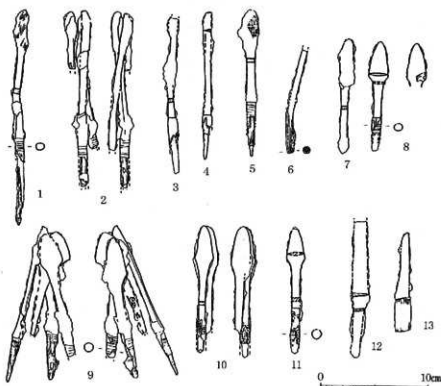


←……アカホヤの流れ

0 1 m

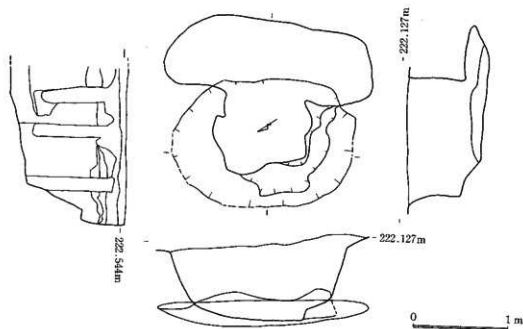


第5図 2号地下式横穴墓実測図



第6図 2号地下式横穴墓玄室内出土遺物

1は片刃鐵タイプの長頭鐵で台形鬺を有する。鐵身に木質が付着しており、樹皮卷が見られる。2は長頭鐵が3本と別個体の矢柄の一部が鏽着している。長頭鐵は片刃鐵タイプが2本と三角形鐵タイプが1本である。三角形鐵タイプは頭部の中程から折れており下部に朱が付着している。茎部の依存している2本には樹皮卷が見られる。3は片刃鐵タイプの長頭鐵で台形鬺を有する。先端部が欠損している。4は片刃鐵タイプの長頭鐵で逆刺を有する。5は長三角形鐵タイプの長頭鐵である。鐵身の一部に骨の一部が付着しており、樹皮卷が茎部に見られる。6は長頭鐵であるが鐵身に欠損している。茎部は方形を呈する。7は長三角形鐵タイプの長頭鐵であるが鐵身と頭部上部が錆で滲れている。8は斜行頭部を有する長三角形の三角鐵である。鐵身の一部に別個体の一部の木質が付着している。9は片刃タイプの長頭鐵が1本と三角形鐵が3本鏽着している。三角形鐵は、三角形タイプのもの1本と長三角形タイプのもの2本である。いずれも鐵身を重ね合わせるようにして鏽着している。10は長三角形タイプの三角鐵が2本鐵身に重なりあって鏽着している。片方は茎部が折れて失われている。11も10同様に長三角形タイプの三角鐵である。茎部に樹皮卷が見られる。12は平造り、角背の刀子で刀身先端を欠き、目釘孔は見られない。13は小型の刀子で刀身先端は前記のとおり天井に突き刺さっていたが、鏡の横に置かれていた刀身と接合した。把木のため目釘孔は不明である。



第7図 3号地下式横穴墓実測図

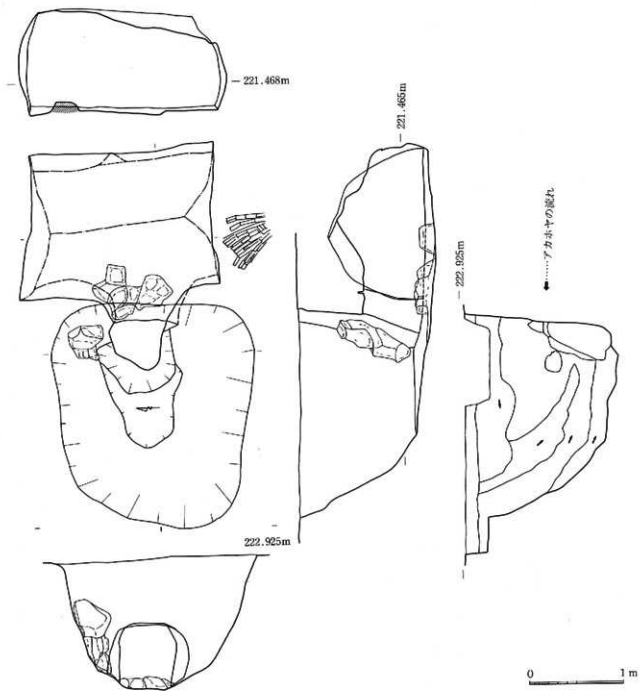
鏡

小型の珠文鏡である。直径5.1cmを測り、中心部分に朱文が2重に周りその外側に鋸歯文が1重に回る。紐には木ないし葛の皮のようなものが付着している。紐には木ないし葛が通されていた可能性が考えられる。

3号

遺構（第7図）

3号は羨道部を持たず玄室も小規模で不定形な地下式横穴墓である。玄室は平入りでドーム状の天井部を持ち奥行き76cm、幅220cm、高さ23cmを測る。主軸はN55°Eを示しており9号、12号と主軸がそれぞれ約90°振れて玄室同士が向き合ったような状態で作られている。竪坑床面では長軸97cm、短軸86cmの方形を呈するが遺構検出面での平面形は長軸194cm、短軸130cmの楕円形を呈する。遺構検出面から竪坑床面までの深さは80cmと浅くアカホヤ層を玄室の天井部に行っているが玄室規模が小さいためトレンチャーによって玄室の天井部が切られており発掘時に天井部が陥没した。閉塞は板閉塞であったと考えられる。遺物、人骨共に出土していないが、玄室の規模から単体埋葬であったと考えられる。



第8図 4号地下式横穴墓実測図

4号

遺構（第8図）

平入りでやや寄棟風の切妻造りの地下式横穴墓である。主軸はN89°Wを示す。アカホヤ下の暗褐色ローム層をほぼ方形に切りだしたブロックが竪坑の羨門部左側に張り付いた状態のものと羨道部から玄室入口付近にかけて見られたことから閉塞はアカホヤ下の暗褐色ローム層をほぼ方形に切りだしたブロックでなされていたと考えられる。玄室は奥行き152cm、幅196cm、棟までの高さ103cmを測る。規模としてはこの地下式横穴墓群の中では中程度のものである。天井部は切妻造りを呈するが、棟方向の壁は直立しておらず天井部と側壁部の境界が不明瞭で断面形がおむすび形を呈する部分を有する。玄室内部には工具痕が明瞭に残されている。羨門は幅56cm、高さ71cm、羨道は長さ37cmを測るが床面は平坦ではなく中心に向けてくぼんでいる。羨門の立面形はきれいな方形ではなく、丸みを帯びている。竪坑は羨門部と反対側が先細りのU字形を呈するタイプで床面での長軸が122cm、短軸が79cmを測る。遺構検出面からの深さは124cmであった。鉄器と朱玉が各1点ずつ左壁際中央部から出土したが、鉄器は調査中に紛失した。

5号

遺構（第9図）

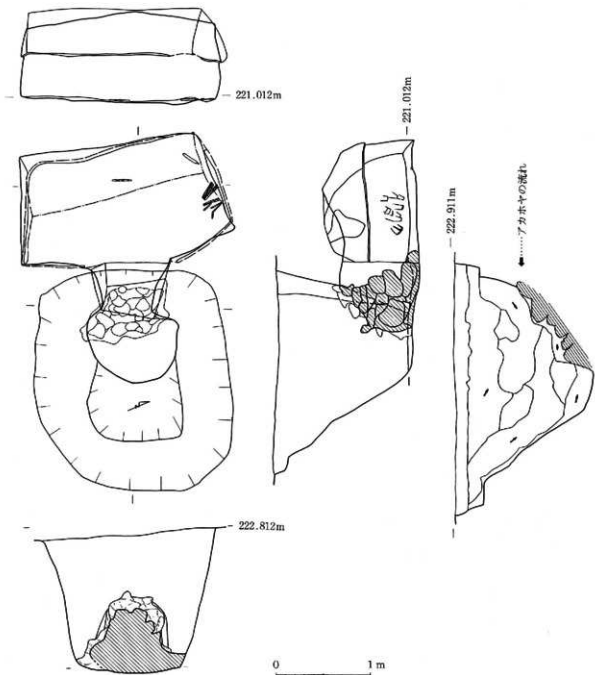
平入り切妻造りの地下式横穴墓である。閉塞はアカホヤのブロックを詰めて行われていた。幅約4cmの棚状施設が右奥壁角を除いて全周しているが、遺物は棚状施設に置かれたものは無かった。天井部は切妻造りであるが棟に向かう面が直線的ではなく丸みを帯びており、4号同様天井部が先の尖ったおむすび形を呈する部分を有する。玄室は奥行き124cm、幅220cm、棟までの高さ100cmを測る。羨門は床面での幅87cm、最も高いところまでの高さ80cmを測り、立面形は天井部が丸い逆U字形を呈する。羨道の長さは56cmである。主軸はN67°Wを示す。遺物の出土状態として特徴的なものは玄室右奥壁角の天井部との境界部分に小型の剣（第10図1）が刺してあったのが銚部分を残して床面に落下した状態で出土したものである。ほかの遺物（第10図2～7）は全て右壁際中央部において先端部を右壁に向けて並べられていた。竪坑の床面の平面形は長軸133cm、短軸84cm、遺構検出面からの深さ142cmを測る隅丸方形であった。竪坑床面から玄室に向かって床面が下降している。玄室の壁には工具痕が明瞭に残されている。

人骨の出土状況

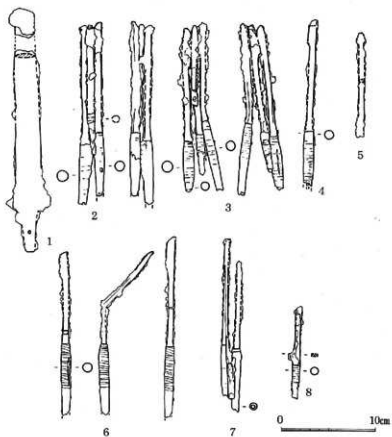
玄室の中央部やや奥から大腿骨が1点出土したのみである。人骨についての詳細は付篇を参照されたい。

遺物（第10図）

遺物は玄室右側面の壁ぎわに集中して置かれていた。このうち1の剣は玄室正面右角に突き刺

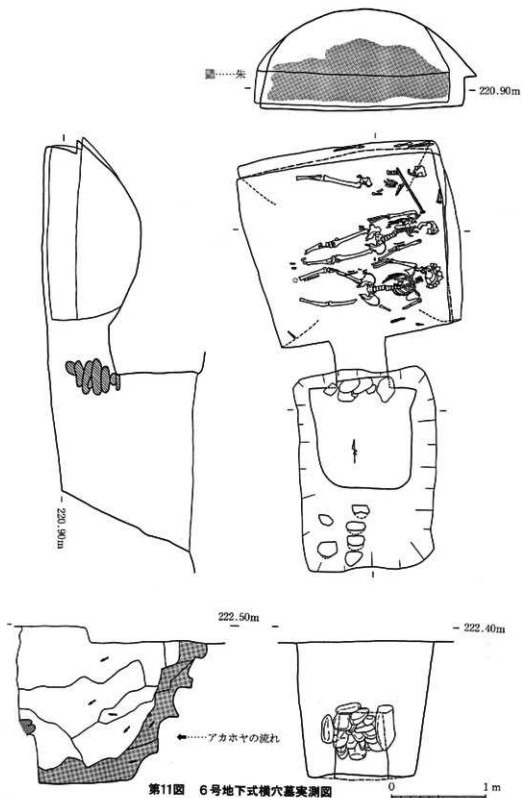


第9図 5号地下式横穴墓実測図



第10図 5号地下式横穴墓出土遺物図

してあったものが腐食して折れ、刀身が床面に落下した状態で出土した。したがって銚は土が多数に鑄着しており、形状が不明である。刀身はあまり厚くなく錆を有しない。茎尻から1.7cmの所に目釘孔を1個有している。2は片刃タイプの長頭鐵2点と三角形鐵タイプ1点の3本が鐵身部で鑄着している。三角形鐵タイプのもののほうが片刃鐵タイプのものよりも頭部が短い。3本とも頭部に矢柄が残存しておりわずかに樹皮卷の痕跡が見られる。全体的に錆化が著しい。3は片刃鐵タイプの長頭鐵が4本鑄着している。全体的に錆化が著しく、鐵身部の逆刺の有無は不明であり、頭部の下半分が失われているものや折れ曲がっているものがある。茎部が残存している3本についてはいずれも矢柄が残っており樹皮卷が確認される。4は片刃鐵タイプの長頭鐵である。



第11図 6号地下式横穴墓実測図

鎌身部先端に別個体の一部と思われる木質が付着している。欠柄は錆で黒く変色しているが幅1mm程度の樹皮巻と考えられる痕跡が顕著に見られる。また、欠柄下端部には樹皮巻の下端部も残存している。5は三角形鎌タイプの長頭鎌である。頭部に対して鎌身部が非常に小さい。頭部の下端部と茎部は錆化のため欠損している。一部を除き全体的に錆化が著しく頭部上部には水平方向の割れが見られる。6は片刃鎌タイプの長頭鎌である。錆化が著しく頭部の中程から約30°折れ曲がっている。茎部には欠柄が残っており樹皮巻が見られる。また、別個体の欠柄の一部が錆着している。7は片刃鎌タイプのもので鎌身部が錆のため失われておりタイプが不明のものが1本づつ錆着している。さらに、欠柄部分に別の鉄製の欠柄部分が錆着している。錆着している欠柄は茎部は全く残存しておらず、竹製の欠柄部分のみが残っている。8はタイプ不明の長頭鎌である。頭部には別個体が触れていた痕跡が見られ、欠柄には樹皮巻が明かに見られる。

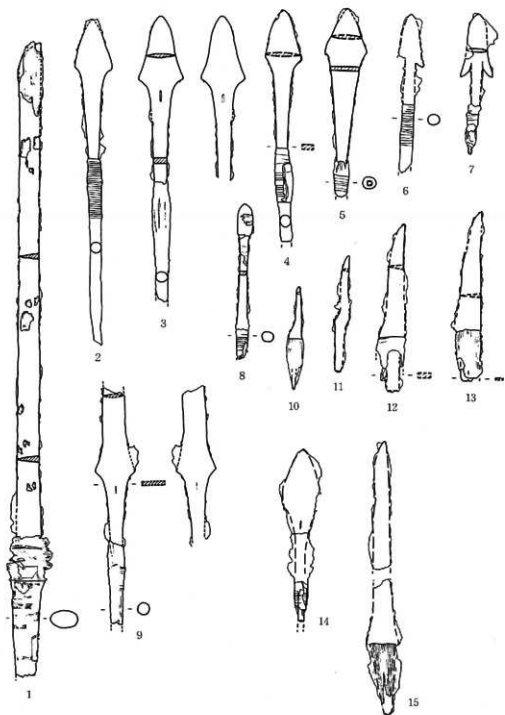
6号

遺構（第12図）

平入りで両袖を有し天井部はドーム状を呈する。主軸N2.5°Eを示す。正面奥壁と右壁に幅14cmから16cmの棚状施設が巡る。天井部はきれいなドーム状を呈し、正面奥壁と天井部の半ばまで粗く朱を施している。床面には川砂を敷いている。人骨は3体出土しているが、竪坑の上層断面で追葬が1回確認された。羨道部は幅56cm、高さ71cm、長さ52cmを測る。竪坑の床面での平面形は長軸116cm、短軸62cm、遺構検出面からの深さ138cmを測る隅丸方形である。羨門の反対側の壁面に6個の足掛け穴を有する。竪坑から玄室に向かってわずかに下降する。閉塞は長軸が30cm～40cmの細長い河原石を長軸が羨道と平行なるように詰め込んでなされていた。正面奥壁の棚状施設の右寄り部分に欠柄を多く残した鉄鎌（第12図2～9）が置かれていた。右奥棚状施設は崩壊しており、（第12図1）の剣が刀身部と把部が折れた状態で床面に落下して1号人骨の脊椎に刺さっていた。その隣に刀子（第12図12・13）が鉞を描えて羨道に向けて置かれていた。第12図8の鉄鎌は3号人骨の右大腿骨側から出土した。第12図10の刀子と第12図6・7の鉄鎌は羨道の右側壁際から出土した。第12図10の刀子は左羨道寄り角から出土した。

人骨の出土状況

人骨は3体出土した奥壁側から1号・2号・3号とする。1号が最も遺存状況が悪く2号よりも3号人骨の方が残りが良い。竪坑の土層断面から追葬が少なくとも1回確認されているので2号・3号人骨は1号人骨よりも後に葬られた可能性が高い。3体とも頭位を右にしている。1号は頭蓋骨、脊椎、肋骨、寛骨の一部と左大腿骨、左頸骨、左膝蓋骨の痕跡が見られた。2号は頭蓋骨・肋骨の一部と手足の指の骨が失われている以外は良好な状態で残されている。胸骨が残されていた。3号人骨は2号よりも残りが良いが頭蓋骨の表面が剥落している。右大腿骨の下に鉄鎌（第12図8）が置かれていた。人骨についての詳細は付属を参照されたい。



第12图 6号·7号地下式横穴墓玄室内出土遗物

遺物（第12図）

遺物は2・3・4・5・9が玄室正面の棚状施設に置かれており、1・12・13は玄室右側の棚状施設に置かれていたものが、棚状施設が何かの原因で崩壊した折りに床面に落下したものである。このとき1の刀は柄の途中から折れ、銚が1号人骨の脊椎に食い込んでしまったようである。8は玄室床面中央の2号人骨脇に置かれていた。6・7・10は羨門右側の壁ぎわに、11の刀子は羨門左側の壁ぎわに置かれていた。1は平造り、角背の刀で糸巻痕の残る柄を持つ。刀身には所々鞘と思われる木質が残存しており、鞘口付近の柄には漆が認められる。2は鎌身部の刃部角が鋭角な変形圭頭鎌である。大型で欠柄の残存状況も良い。樹皮巻も良好に観察できるが、鉄鎌部分そのものは錆化が激しく頸部上半から鎌身部にかけて水平方向の割れが生じている。また、頸部の途中で錆のためやや折れ曲がっている。3も同様に刃部角が鋭角な変形圭頭鎌である。頸部の両面に長さ9mm、幅1mmにわたってタガネで付けたと考えられる刻印が施されている。4は変形圭頭鎌である。頸部がほかの変形圭頭鎌に比べて幅広で扁平な印象を受ける。全体的に錆化が激しく、ほぼ全面小さな瘤錆に覆われている。矢柄は、副葬されたときに下になっていたと考えられる側が潰れて扁平になっているが、樹皮巻が観察される。5は数少ない典型的な圭頭鎌である。これも一部を除いて全面を瘤錆で覆われており、刃部の左下端部を欠損している。樹皮巻が矢柄部分に見られる。6は脇袂三角形鎌に分類できる。錆のため片方の逆刺を欠損している。錆化が著しいが、矢柄には錆びは激しくなく樹皮巻が良好な状態で観察できる。鎌身部に比べて頸部が幅広で扁平なので矢柄もそれにもとない太くなっている。7も6同様脇袂三角形鎌に分類される。刃部は比較的錆が少ないが、一部欠けている。頸部の錆はひどく、矢柄の残存状態も悪い。しかし残存部の一部に樹皮巻が見られる。8は長三角形鎌タイプの長頭鎌である。鎌身から関部への移行は緩やかで両丸造を呈する。鎌身部から頸部にかけて別個体のものと思われる木質が鉄鎌に対して横方向に付着している。全体を細かい錆が覆っているが、矢柄部分には錆は浮いておらず樹皮巻が良好に観察される。9は鎌身部が異常に長く延びてはいるが変形圭頭鎌に分類できると思われる。鎌身部は上部が欠損しており、頸部には両面に薄く刻印が施されている。矢柄は比較的遺存状況が良く一部に樹皮巻が観察される。10は小型で平造り、角背の刀子である。刃部は使用により目減りしており内湾する。把木が残っているので目釘孔は不明であるが、茎尻に近い部分が露出しており、茎は円形であることが観察できる。11は小型で平造り、角背の刀子である。遺存状況は極めて悪く、刀身先端部分を除いてほぼ全面瘤錆などで覆われており関部分から錆のため折れ曲がっている。目釘孔は見られない。12は中型で平造り、角背の刀子である。把部に鹿角装を施しているが柄尻は腐食のため欠損している。茎尻は平であるが、肉眼では見える範囲に目釘孔は見あたらない。しかし、軟X線装置を通して見た場合茎尻付近に目釘孔らしきものがぼんやりと見える。13は中型で平造り、角背の刀子である。把部に鹿角装を施しているが柄尻は腐食のため欠損している。茎尻は平であるが、目釘孔は鹿角装に隠されて不明である。錆

が著しく全面に小さな錆跡や剥離が覆っている。刃部の先端に近い一部が欠損している。

7号

遺構（第13図）

平入り両袖切妻造りの地下式横穴墓である。主軸はN31.5°Eを示す。石閉塞であり閉塞石の一部が玄室内に流れ込んだ状態で検出された。玄室の奥行き151cm、幅211cm、棟までの高さは93cmである。竪坑は羨門部反対側の床面の平面形が丸みを持ち、竪坑の床面の長軸109cm、短軸70cmを測るややすづまりで先細りのU字形を呈する。遺構検出面からの深さは137cmを測る。玄室内には閉塞石と共に玄室の埴土が流入しており、羨門部と羨門部の天井部が崩壊しているので石が流入したおりに崩壊したものと考えられる。天井左側部分が崩壊しており実測図には推定線を記入している。竪坑の羨門部と反対側の壁面に足掛け穴が2個見られる。棚状施設は持たない。ほかの地下式横穴墓の竪坑に比べて玄室が小さい。左壁際中央部から第12図15の刀子が折れて出土した。第12図14の鉄鎌は左手前角壁際から出土した。人骨は出土していない。

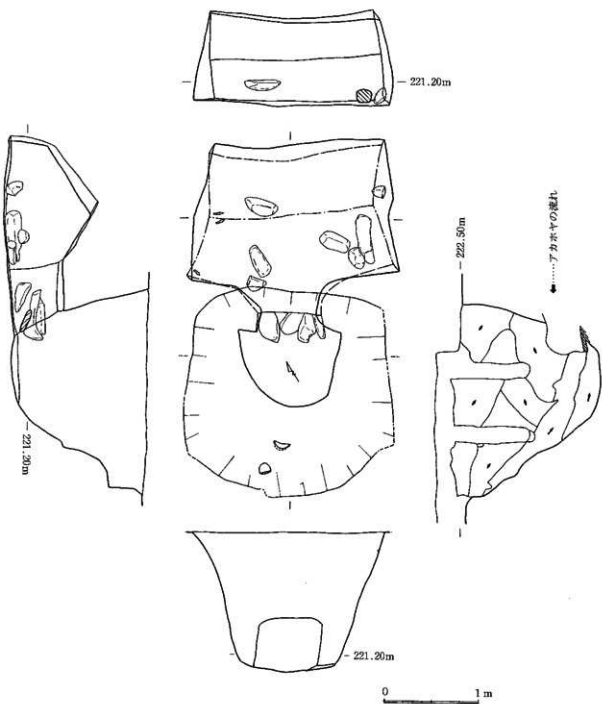
遺物（第12図）

14は玄室左羨門寄りの駄ぎわに置かれており、15は二つに折れた状態で把部分が羨門寄り、刀身部分が奥壁寄りの玄室左駄ぎわ中央で出土した。14は変形主頭鎌で出土時に床面に触れていた側は錆化が著しいので片面のみにしか刻印が確認されなかった。刻印は長さ6mm、幅1mmである。鎌身端部が約2cmにわたって欠損しており、鎌身部中央にも欠損のため穴が開いている。錆化が著しいので関部は不明であるが、茎部に残存する矢柄は良好な状態で樹皮巻が観察される。茎は方形である。15は平造り、角背の大型の刀子である。錆化が著しく刀身の2/3程度のところで折れている。把部にはわずかであるが木質が遺存しているが、把尻は腐食のため欠損しており茎尻が観察される。茎尻は平で先端に向かって薄くなっており、末端から2.2cmのところに目釘穴が見られる。

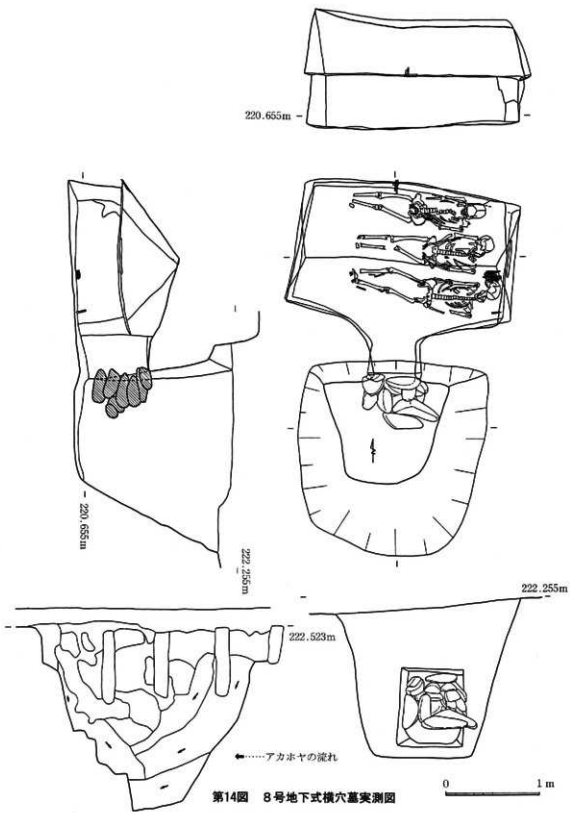
8号

遺構（第14図）

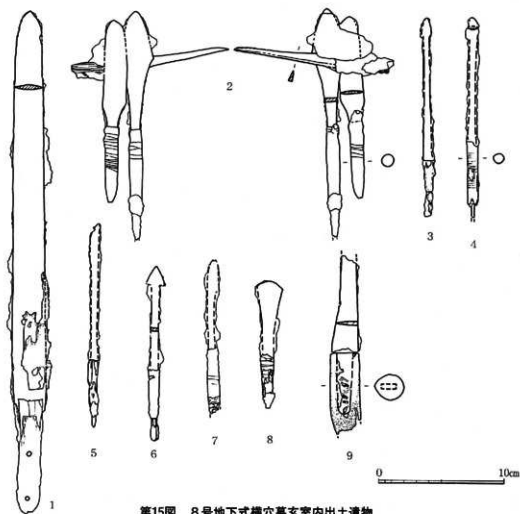
平入りで両袖を有し切妻造りの地下式横穴墓である。石閉塞で主軸はN1°Eを示す。人骨は3体出土した。羨門は床面での幅68cm、高さ81cm、羨道の長さ46cmを測る。羨門の立面形はきれいな長方形を呈する羨門の玄室入口付近の床面の角が丸くなっている。玄室の奥行き167cm、幅221cm、棟までの高さ114cmを測る。天井部はしっかりした切妻造りで7～10cm程度の棚状施設が四方にまわっているが、羨道部側壁の棚状施設は羨道に向けて幅が狭くなっており羨道部で消滅する。棚状施設は正面右隅部分が約40cmにわたって崩壊している。玄室内部は朱が全面に塗られて



第13図 7号地下式横穴墓実測図

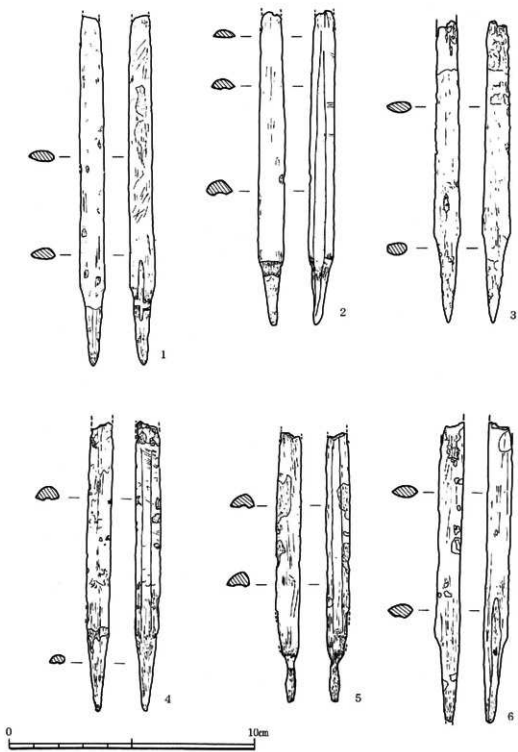


第14図 8号地下式横穴墓実測図

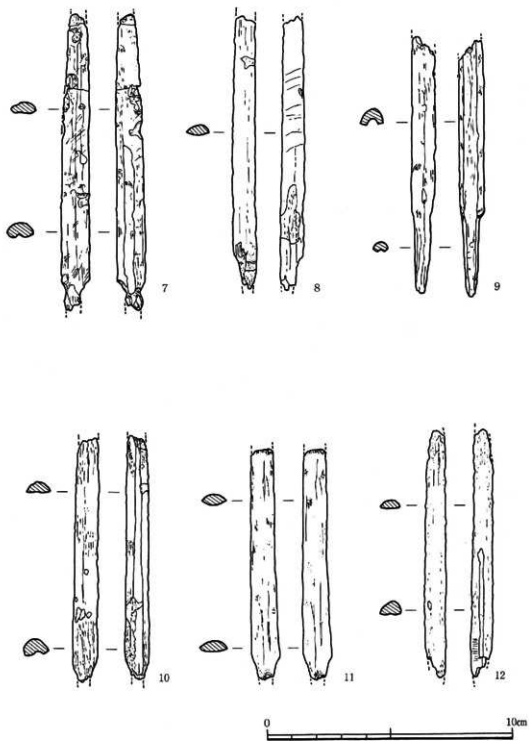


第15図 8号地下式横穴墓玄室内出土遺物

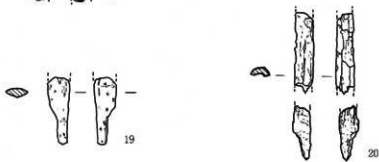
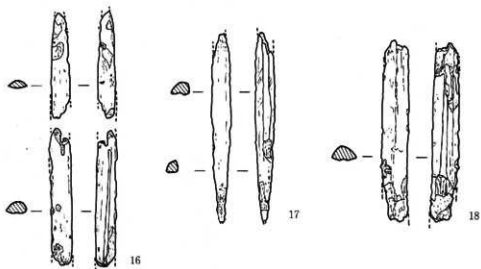
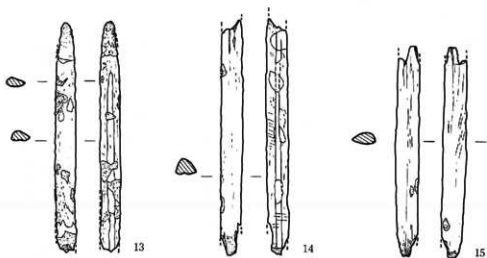
おり工具痕が鮮やかに残されている。天井に釘で引っかいたような線が多く刻まれている。玄室の床面は小林軽石層まで掘込まれていることが壁面の朱が剥落した箇所を確認されたが、床面には川砂が全面に敷かれていた。閉塞石はほかの石閉塞の地下式横穴墓と同じく長軸が40cm~50cmの細長い河原石で、羨道に長軸を入れる形で閉塞されていたが、羨門の床面直上には石は置かれておらず土が約18cm盛られておりその上に閉塞石が詰められていた。竪坑に面した所には同じ様な細長い河原石を立てた状態で羨門部に入れられた石に立てかけてあり、羨門部からはみ出した石の上部にも同じ様な石が乗せられており石の下端部を保護するかのように2個の石が横にねかせた状態で置かれていた。竪坑は床面での長軸133cm、短軸109cm、遺構検出面からの深さ161cmを測り、羨門部と反対側の左半分はやや先細りの隅丸方形を呈し右半分はより先細りのU字形を呈する。遺物(第15図)は2の刀子と鉄鏃2点が正面の棚状施設と天井部との境界に図で示すと



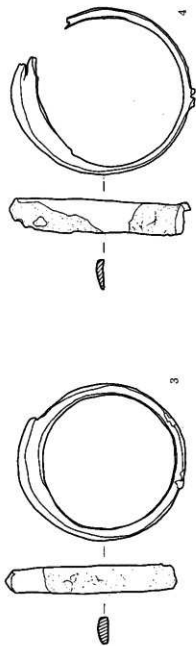
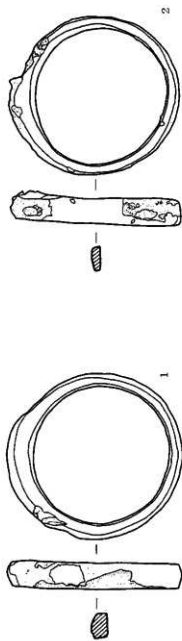
第16图 8号地下式横穴墓出土骨簪实测图(1)



第17图 8号地下式横穴墓出土骨鏃实测图(2)



第18圖 8号地下式横穴墓出土骨鍬実測圖(3)



第19圖 8号地下式横穴墓出土具輪美測圖

おりに突き刺してあった。1の直刀は右側壁の棚状施設の中央に置かれていた。3～7の鉄鏃は第16図～第18図の骨鏃と共に右壁際の床面に置かれていた。鉄鏃と骨鏃は混ざった状態であった。第15図9の刀子は玄室右隅の床面に把部を上に向けた状態で置かれていた。3体出土した人骨のうち一番奥側の1号人骨（女性）の左手手首寄りに4個のイモガイ製の貝輪（第19図1～4）がはめられていた。朱が玄室入口右で潰れた状態で多く検出された。

人骨の出土状況

人骨は3体出土している。玄室奥側から1号、2号、3号とする。3体とも頭を玄室右壁際に置き、特に3号人骨の頭は駈からわずか3cmしか離れていない。また、1号人骨も奥壁にほとんど接するような状態で出土している。人骨の保存状態は3体とも非常に良くほぼ同じ状態なので人骨の面からは3体同時埋葬の可能性が考えられる。1号人骨の右大腿骨中央の上部に第15図2の刀子と鉄鏃2点が刺されていた。第15図3～7の鉄鏃と第16図～第18図の骨鏃は3号人骨の頭蓋骨のすぐ右側に、第15図9の刀子は3号人骨の頭蓋骨の左横に置かれていた。第15図1の直刀は2号人骨と3号人骨の頭蓋骨の間の棚状施設に置かれていた。1号人骨の左手手首寄りに貝輪が4個はめられていたが、右尺骨と桡骨は痕跡しか見られなかった。人骨についての詳細は付篇を参照されたい。

遺物

鉄製品（第15図）

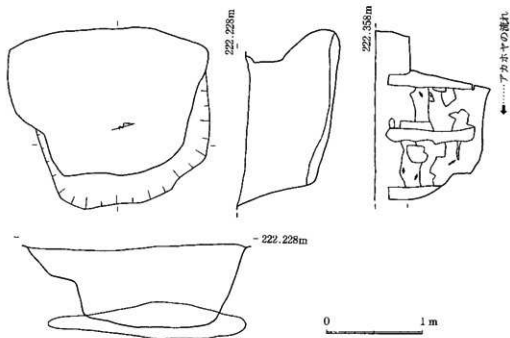
1は玄室右側の棚状施設に銚を渡門方向に向けて置かれていた。中型の剣で比較的薄く銚鏃を有しない。剣身部分に別個体の一部の木質が付着しているが、この剣の鞘であったと考えられる木質も所々に付着している。柄部は比較的良好に木質が残っており、茎を覆い隠している。柄部には柄尻から1cmのところと4.2cmのところの2カ所に目釘孔が見られる。鞘口の柄の形態からこの剣には鞘口袋具が取り付けられていた可能性が考えられる。また、肉眼で観察したところ、鞘と柄の材料となった木質は同一の種類である可能性が考えられる。2は玄室正面の棚状施設と天井部分の境界に突き刺してあったものである。2本の刀子が天井部に沿って突き刺してあり、その下に刀子が刃部を天井側に向けて棚状施設の奥の天井部分に押し込んであった。3点とも密着しているので取り上げるためには棚状施設と天井部分をえぐり取るしか方法がなかった。鉄鏃は柳葉鏃と変形半頭鏃で柳葉鏃の方は刺状鬚を有している。どちらの鉄鏃も薄手で、特に変形半頭鏃のほうはほかの地下式横穴墓から出土している同じタイプのものに比べて小型である。また、頭部にどちらも大きな銚ができていて、矢柄部分には鏃で覆われているものの樹皮巻痕が見られる。刀子は中型の比較的良くみられる平造り、角背のものである。刃部は研ぎ込みによるものか把口から中央部にかけて内湾しており、中央部から銚にかけて外反する。把口から把部にかけて多量の土と共に鉄鏃を銚着している。把部には木質が残っているが、上が銚着しているので詳

細は不明である。3・4・5・6・7・8は玄室右側の壁ぎわの床面に16本の骨鏃と共に置かれていた。3は長三角形鏃タイプの長頭鏃である。鏃身部が非常に小さく、台形鬩を有する。わずかに矢柄が残存している。全体的に銹化が激しく鏃身部の形態や頸部の断面形などは不明である。4も3同様長三角形鏃タイプの長頭鏃に分類できると思われるが鏃身鬩部が無鬩に近くっており、頸部が扁平である。矢柄には薄く錆が巻いており樹皮巻が見られる。茎の先端部は2mm角と非常に細い。5は片刃鏃タイプの長頭鏃である。全体的に銹化が著しい。刃部の先端部近くが錆のため欠損している。頸部がやや扁平である。わずかに矢柄が残存しているが、樹皮巻などは見られない。6は三角形鏃タイプの長頭鏃である。全体的に銹化が著しいが、片方の角鬩が顕著である。矢柄は4・5に比べて遺存状況は良いが上に錆が巻いているので樹皮巻などは観察できない。7は長三角形鏃タイプの長頭鏃である。全体的に銹化が著しく、頸部上部で曲がっている。頸部は鏃身部に比べて厚みがあり、残存している矢柄には錆が黒く巻いているが樹皮巻痕が見られる。8は小型の主頭鏃である。全体的に銹化が著しく、刻印の有無は不明である。使用によるものかは不明であるが刃部が片減りしている。茎部に矢柄が残っており、樹皮巻が見られる。茎尻は瘤錆ができていたので詳細は不明である。9は玄室右側の角近くに刃部を上にして壁に立てかけられていた。刀子はやや大型の比較的良くみられる平造り、角背のものであるが、把部に鹿角装が施されており刃部の先端部分が欠損している。刃部は中央部にかけて外反しているが、中央部から先端部分にかけてはほぼまっすぐである。茎にも鹿角装にも目釘孔は見られない。

骨鏃（第16図～第18図）

3号人骨の頭蓋骨の右側に鏃先を頭蓋骨に向けて第15図3～7の長頭鏃と共に置かれていた。出土状況とその形態から骨鏃と認定した。出土時の精査の際の不幸から先端部を欠くものが多くなってしまったが、全体的な依存状況は良好である。大きさは残存状態の良いもので長さ14.2cm、幅1cmを測る。先端部の形状は不明であるが筥被は片側だけ削り出すものと両側とも削り出すものがある。刃部になると考えられる部分は薄く削られて成形されているが、現在では鋭さは全く失われている。断面形は楕円形を呈するものと片側に骨髄の痕を有するものがある。骨鏃の中には削痕や削り痕が認められるものがあり、いずれも何らかの方法で削られた後研かれていると考えられる。2や4、5などのように茎部に何かで締めたような浅いくぼみが見られるものもある。依存状態が悪いものも含まれており接合できないものもあるが、本数は20本と考えられる。

骨鏃の出土は全国的に例が少なく九州では宮崎県で4例、鹿児島県で1例報告されているだけである。宮崎県における骨鏃の出土例は都城市牧ノ原地下式横穴墓群、野尻町人萩地下式横穴墓群、国富町市の瀬地下式横穴墓群に続くものである。



第20図 9号地下式横穴墓実測図

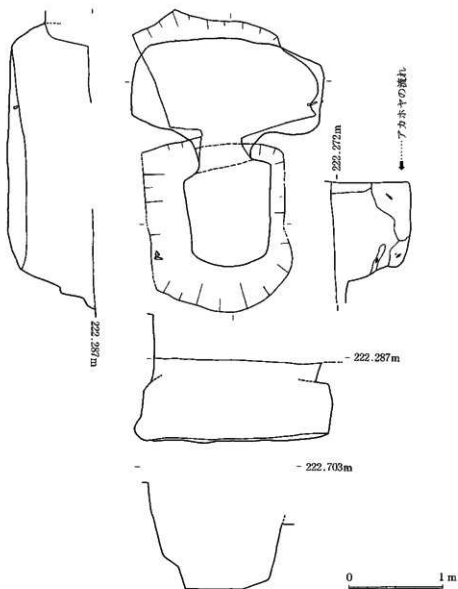
貝輪（第19図1～4）

4点とも1号人骨（女性・熟年）の左手に装着された状態で出土した。1から順番に手首から肩に向かって装着されていた。イモガイ製と考えられる。イモガイの上部を横に切し面取りを施している。貝そのものの表面は研磨により失われており、貝輪自体の色はアイボリーを呈する。1と4は一部破損している。4点とも表面には黄褐色ないし赤褐色の付着物が見られる。宮崎県に於ける貝輪の出土はこれで25例を数える。

9号

遺構（第20図）

3号と同じタイプの羨道部を持たない小型の地下式横穴墓である。平入りで両袖を有し天井部はドーム状を呈する。主軸はN75°Eを示す。玄室は奥行き103cm、幅21cm、天井までの高さ58cmを測る。天井部がトレンチャーにより切られており玄室精査中に崩壊した。玄室の平面形はいびつな長方形を呈する。閉塞は板閉塞であったと考えられる。竪坑は長軸148cm、短軸45cm、遺構検出面からの深さ75cmを測り、玄室に対し大型で横長の長方形を呈する。羨門部はほかのきちんとしたタイプの地下式横穴墓の羨門部と異なり横長で高さが低く形も方形ではなく横長の楕円形状を呈する。人骨、遺物の出土は無い。



第21図 10号地下式横穴墓実測図

10号

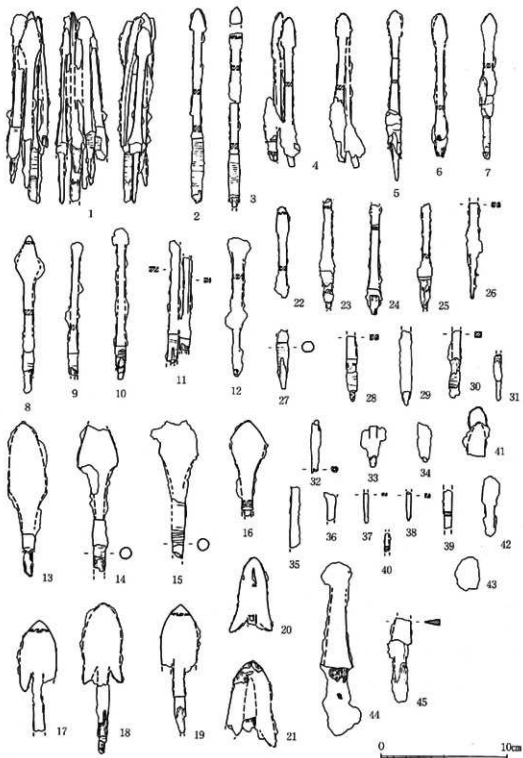
遺構（第21図）

両袖平入りの地下式横穴墓である。主軸はN18.5°Eを示す。閉塞は板閉塞であったと考えられる。閉塞は破れており玄室内に堅坑埴土が充満していた。玄室規模は奥行き99cm、幅199cmと小型であるが3号や9号などのタイプではなく4号や5号に近いタイプである。堅坑と玄室の床

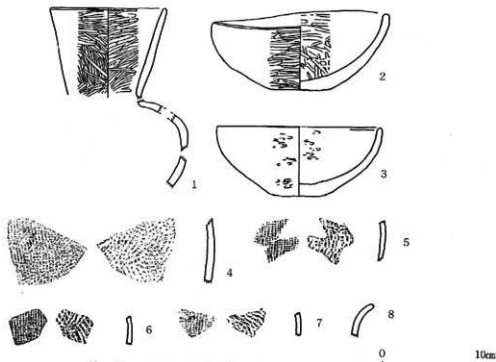
面には傾斜が見られず平坦な状態であるが遺構検出面から床面までの深さが76cmと浅いためトンチャーにより天井部が切られており玄室精査中に天井部が崩壊した。そのため天井部の形態は不明である。しかし、当時のメモから羨門の立面形は、羨門天井よりも床面の方が広い台形状を呈することが分かる。玄室精査の際天井部を残しながら行ったため羨門部が狭くなかつ遺物が羨道近くから多量に出土したため遺物を取り上げながら掘り進めるという方法を取らざるおえなかった。壙坑の長軸105cm、短軸77cm、遺構検出面からの深さ76cmを測り、平面形は隅丸方形を呈する。この地下式横穴墓は遺構検出面で壙坑上部から土器片（第23図）が出土している。遺物は玄室羨道近くから玄室奥にかけて鉄鏃が多く出土している。玄室右側壁中央付近には刀子（第22図44）の銚部分が床面から13cmの所に突き刺されており、刀身部は直下の床面に落した状態で出土した。玄室規模が小さく天井も低いいため単体埋葬の可能性が考えられる。人骨は山上していない。

遺物（第22図）

1は長頭鏃が7本錆着したものである。44を除いてすべて玄室の埋土中から出土したが、多くは玄室の入り口部分から出土した。長三角形鏃タイプのものが3本と三角形鏃タイプ1本、変形主頭鏃タイプのものが1本、片刃鏃タイプのものが1本、鏃身部欠損のためタイプが不明なものが1本である。いずれの鉄鏃も錆化が激しく、茎部は扁平である。長三角形鏃タイプの3本は台形関であり、茎部の錆化の激しい1本を除いて角関が顕著である。片刃鏃タイプのものは茎部が欠損している。2は三角形鏃タイプの長頭鏃である。角関が顕著で頭部の関は台形関を呈している。全体的に錆化が激しく頭部の一部が欠損している。矢柄部分には樹皮巻が見られる。茎の断面形は方形である。3は長三角形鏃タイプの長頭鏃であるが、鏃身関部が撫関になっている。頭部は扁平で刺状関を有する。矢柄部分には樹皮巻が見られる。茎の断面形は方形である。4は三角形鏃タイプの長頭鏃が2本錆着したものである。どちらも錆化が激しいが角関が見られる。頭部は扁平で、どちらも途中から痲錆のため折れ曲がっている。5・6共に長三角形鏃タイプの長頭鏃である。どちらも頭部が扁平で約6cmと短めである。鏃身関部は5・6共に撫関である。欠柄の遺存状況は悪く5の一部にわずかに樹皮巻がみられる。7・8共に変形主頭鏃タイプの長頭鏃である。7は鏃身部が非常に小さく頭部も約3.5cmと短く扁平である。8は鏃身部が大きく頭部は扁平であるが、錆化が激しく鏃身部から頭部にかけて大きな痲錆ができておりそれによって頭部の下部でうねりが生じている。矢柄の遺存状況は悪く一部にわずかに樹皮巻がみられる。9は鏃身部欠損のためタイプ不明の長頭鏃である。頭部は8.5cmと長く台形関を有する。錆化が激しく矢柄の残存状況も悪い。10は三角形鏃タイプの長頭鏃である。鏃身部が小さく、頭部は扁平である。矢柄部分には樹皮巻が見られる。11は鏃身部欠損のためタイプ不明の長頭鏃が2本錆着したものである。どちらの鉄鏃も頭部が扁平で錆化が著しい。矢柄の残存状況は良くないが一部



第22图 10号地下式横穴墓玄室内出土遗物



第23図 10号地下式横穴墓竪坑出土土器実測図

に樹皮巻痕が見られる。12は鐵身部が欠損しているが、頭部の形態から変形主頭鐵タイプの長頭鐵と思われる。このタイプに特長な幅広の頭部を呈している。頭部の下端部に別個体の一部と思われる木質が付着している。矢柄はほとんど残存しておらず、茎部の下端部が錆のため曲がっている。13は三角形鐵である。錆化が著しく全体に土が付着している。鐵身部は大型で頭部は幅広である。鐵身部の中央部の一部が錆のため欠損している。矢柄部分の遺存状況も良好ではない。14・15はやや大型の三角形鐵である。どちらも錆化が著しく鐵身部の先端を欠損しており、14は頭部上部にも錆のため穴が開いている。いずれも頭部は幅広で関は有さない。また、矢柄の遺存状況は比較的良好で下部に樹皮巻が認められる。15は片面に多量の土が錆着しており詳細が不明である。16は比較的小型の三角形鐵である。全体的に錆化がひどく刃部下端部が欠損している。某部の上部で切損しており矢柄は残っていない。全体的に薄手である。17・18・19は大型の扇状三角形鐵である。17・18は逆刺の部分の外側の線が外反せず内湾しており、逆刺としての機能を十分に発揮したかどうかは疑問である。3点とも薄手で矢柄はほとんど残っていない。頭部は17・18はしっかりとして太いが19は薄く扁平である。いずれも全体的に錆化が激しい。20・21は無茎鐵である。20は短い頭部をもち欠柄で鐵身部を挟んで使用するタイプと考えられる。21は鐵身部の形態は20に良く似ているが、矢柄を鐵身部内に差し込んで使用するタイプと考えられる。2点とも逆刺は深い。21は片方の逆刺の先端が欠損している。21の鐵身部先端には別個体のものと見られる樹皮の様なものが付着している。どちらの鉄鐵も錆化が著しいが、20は鐵身部中央に

矢柄が付着して残っているし、21は鐵身部内に矢柄が残存している。22は長三角形鐵タイプの長頸鐵である。鐵身関部はなだらかな推関で、錆のため頸部下半と茎部は失われている。鐵身部は薄手で頸部は扁平である。23・24・25・26・35は頸部の形態から長頸鐵の頸部と考えられる。いずれも錆化が激しく矢柄の残存状態も良好ではない。27～34は鉄鐵の茎部である。いずれも矢柄が残存しており、樹皮巻が見られるものも多い。36は鉄鐵の鐵身部近くの頸部片である。37・38・40は鉄鐵の某灰付近である。周りにはわずかに矢柄が付着している。39は鉄鐵の頸部片である。41は長三角形鐵タイプの鐵身部が2個体錆着したものである。42も41同様に長三角形鐵タイプの長頸鐵の鐵身部と頸部上半部分である。43は錆化が激しく詳細は不明であるが鐵身部片である。44は平造り、角背の刀子である。出土時には鐵部分が玄室右側の壁に刺さっており、刀身部分は腐食のため折れ床面に落下した状態であった。全体的に錆化が激しく精口の痕跡のみが見られる。45も平造り、角背の刀子であるが、刀身部分のほとんどを欠損している。把部に木質を残しており、茎と接する所に茎に対して横方向に繊維の流れが見られる。全体的に錆化が激しい。

土器（第23図）

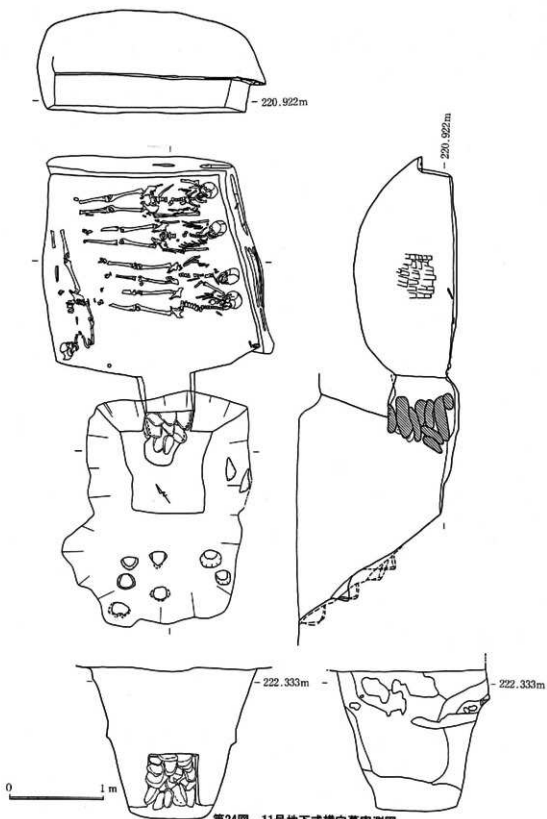
第23図の土器は1～3までは10号堅坑上部から、4～8までは10号堅坑上部の耕作土中から出土したものである。4～8までの土器に関しては耕作土中からの出土であるが原位置を大きく失うものではないと考えられるため10号堅坑出土土器に準じて取り扱うものである。1は丹塗りの長頸壺である。口縁部は横方向のヘラミガキ、頸部は斜め方向のヘラミガキ、胴部は横方向のヘラミガキを施している。丹は全体的に厚く塗られているが、頸部の一部で風化のため丹が剥がれた所がある。2は土師器の椀である。ほぼ完形で調整は内、外面共に全面に丁寧な研ぎを施している。外面は全体的に横方向のヘラミガキ、内面は口縁部とその近くが横方向のヘラミガキで底部とその近くが方向の定まらないヘラミガキである。3は丹塗りの椀である。全体的に風化が激しく調整が内、外面共に不鮮明であるが横方向のヘラミガキが施されている。4～7は須恵器の胴部片である。いずれも内面は同心円叩きである。4の外面は網目の叩きが施されている。5～7の外面は平行叩きの後ナデを施している。8は土師器の壺の口縁部であるが、弥生時代終わり頃の土器の可能性も考えられる。

11号

遺構（第24図）

平入り両袖ドーム状の天井部を有する大型の地下式横穴墓である。主軸はN36.5°Eを示す。人骨は5体出土している。

玄室は奥行き212cm、幅212cm、天井の最も高いところまでの高さ110cmを測る。正方形に近い平面形を呈するが、正面奥壁の幅180cm、羨道側手前壁の幅221cmとやや台形に近い正方形と言える。



第24图 11号地下式横穴墓実測图

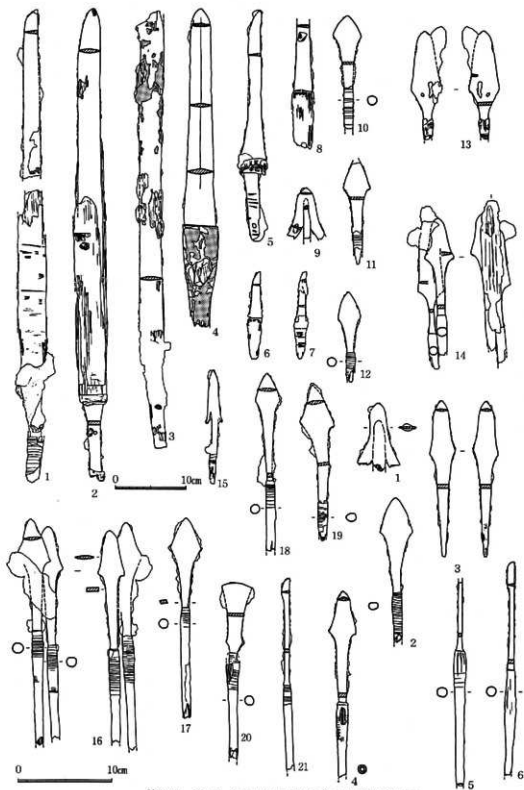
正面奥壁と右側壁に幅8cm～17cmの棚状施設を持つ。棚状施設は全体的に幅が一定しておらず造りとしては比較的雑な印象を与える。棚状施設を有する正面奥壁と正面天井部の下部、右側壁に朱が塗られており羨道左壁際にはソフトボール状の巨大な朱玉が置かれていた。棚状施設の朱の塗り方はとても丁寧であるが、天井部の塗り方は雑である。床面には川砂が敷かれており、小林軽石層まで埋込まれているのが朱が剥落した箇所を確認された。羨門部はしっかりとした長方形で幅58cm、高さ72cm、長さ64cmを測る。閉塞は石閉塞ではかの石閉塞の地下式横穴墓と同じに長径30～45cm程度の河原石を使っている。堅坑はの床面での長軸は88cm、短軸は77cmを測り、平面形は方形を呈する。羨門部と反対側の堅坑壁面の傾斜は130°と緩く7個の足掛け穴を持つ。遺構検出面からの深さは151cmである。遺物は鉄鏃13、刀子3、剣3、直刀1、朱玉1が出土している。正面奥の棚状施設中央付近に第25図14の鉄鏃が2鏃着した状態で置かれ、その右隣に第25図4の剣が抜身の状態で置かれていた。右側棚状施設には奥側に第25図2の剣、中央部の内側には第25図1の直刀が銚を羨道側に向けて、外側には第25図16の鉄鏃が鏃先を奥側に向けて置かれていた。右側棚状施設の羨道寄りには第25図5の刀子が置かれていた。また、玄室右手前角には第25図17・20の鉄鏃が2立ってかけてあった。その羨道部よりには第25図13の鉄鏃が置かれていた。玄室左壁際羨道部寄りの所に第25図7の刀子が置かれていた。

人骨の出土状況

人骨は5体出土した。5体内4体は頭位を玄室右側に置き、残りの1体は頭位を羨門部側に置く。頭位を右にする4体の奥から1号・2号・3号・4号とし、頭位を羨道寄りに置く人骨を5号人骨とする。人骨の保存状態は5体ともほぼ同じ程度であるが5号人骨が最も残りが悪い。5号人骨の胸付近に第25図7の刀子が置かれていた。1号・2号人骨は両腕を自然に延ばした状態で置かれているが、3号・4号人骨の右腕の骨は約90°の角度で曲げられている。特に4号人骨の右腕は右隣の3号人骨の上に置かれていたと思われる出土位置を示している。特に5号人骨の左半身の骨の遺存状態が悪い。5号人骨は頭を壁際に置き足元に約50cmの空間がある。人骨についての詳細は付篇を参照されたい。

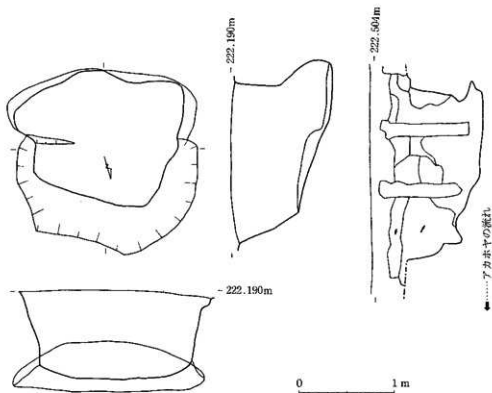
遺物（第25図）

1は玄室左側の棚状施設に3や第26図16などと共に置かれていた。刀身部の中ほどで折れているが全長約65cmと大振りの方である。刀身部の柄よりの部分には鞘の木質が良く残っている。2は1同様玄室左側の棚状施設の奥側に置かれていた。全長約66cmの剣である。剣身部には鞘の木質部が良く残っており鞘口には鞘口装具が取り付けられていた痕跡が見られる。木質に平織りの布痕が付着している。茎中央に目釘穴が1個開いている。茎尻にも鞘と同じ木質が付着しているので柄も木製であったと考えられる。剣身部の錆化は激しく、瘤跡や剝離が全面に見られる。3は1の奥に置かれていた。鏃を有さない比較的薄手の剣である。剣身部にはさやの木質が残っ



第25圖 11号・15号地下式横穴墓出土遺物実測図

ており、特に銚部分に多く残存している。鞘が良好に残っている部分には漆膜がみられ、鞘の残存部分の先端から約2.5cmのところ直径約2mmの穴が両側に開いている。用途については不明である。柄尻はまっすぐでそこから約2cmのところ目釘穴が1個開いている。4は玄室正面の棚状施設の右端に置かれていた。きわめて遺存状態が良好で錆も良く観察できる資料である。剣身部には木質は付着していないが、柄は柄尻を除いて遺存状態が良好で表面に漆膜が見られる。目釘穴は柄が残っているので確認できない。5は全長約25cmの大型の刀子である。出土位置は玄室右側の棚状施設の一番狭門よりのところであった。刀身は平造り、角背で使用によるものか刀身中央部から把口にかけて刃部が内湾する。把口部分にわずかに木質が付着している。茎には扁平な紐状のものを粗く巻いた痕がみられる。茎尻から1.5cmのところ目釘穴が1個見られる。6は小型の平造り、角背の刀子である。把部に鹿角装を施している。7は6と同様に小型で平造り、角背の刀子である。全体的に錆化が激しく、刀身部に一部木質が見られるほかは把部に樹皮の様なものを巻いてあるのが見られるだけである。7の出土位置は玄室左側壁近くの狭門部よりの所であった。8は2の下から出土したので2の鞘の中央部分に8の銚部分が錆着して折れている。やや大型の平造り、角背の刀子である。把部に木質を良く残しており、目釘穴は不明である。9は短い頭部をもち矢柄で鎌身部を挟んで使用するタイプと考えられる無茎鎌である。鎌身部中央に矢柄が付着して残っている。逆刺の部分には別個体の矢柄の一部が付着している。片方の逆刺の先端部分が欠損している。出土位置は8の隣である。10は小型の三角形鎌である。出土位置は9の隣である。頭部が約3.5cmと短く、扁平である。鎌身部は長く長三角形状を呈する。矢柄が残存しており、樹皮巻が良好な状態で見られる。11は小型の圭頭鎌である。10と同じ場所出土している。全体的に錆化が激しく全面に瘤錆と剥離が及んでいる。矢柄が残存しているが表面を錆が覆っているため微かに樹皮巻痕が見られるだけである。13は小型の三角形鎌である。出土位置は玄室左側壁ぎわの中央付近である。全体的に錆化が激しいため鎌身部先端が欠損しており、頭部に水平方向の割れが生じている。矢柄が少量残存しており樹皮巻痕が見られる。13は大型の三角形鎌である。鎌身部に透かしを有しているが錆化が著しく透かしの全体形など詳細は不明である。茎部に矢柄が遺存しており、樹皮巻が下端部に見られる。出土場所は玄室右側の狭門側角付近の床面である。14は玄室正面の棚状施設の中央付近に置かれていた。刃部の長い三角形鎌が2本と種類が不明の別個体が錆着している。まん中の鉄鎌は特に刃部が長く、頭部が細い。外側の鉄鎌は斜行頭部の屈曲が激しい。欠柄は残っているが、錆が巻いており観察は不可能である。15は扇状三角形鎌である。刃部が約5.5cmと長く、逆刺は約1cmある。頭部は扁平であるが全体的に錆化が激しい。頭部中央付近で錆のため曲がっている。茎部に矢柄の竹質が残っている。出土場所は2の付近である。16は大型の三角形鎌が2本錆着したものである。全体に錆が巻いているが、矢柄の遺存状態が極めて良く樹皮巻が最後まで観察できる。どちらの鉄鎌も頭部は約6.5cmと長く、幅広である。頭部には有ささない。出土位置は3の隣である。17も大型の三角形鎌である。



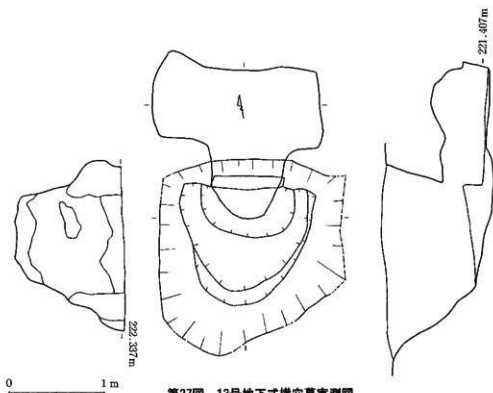
第26図 12号地下式横穴墓実測図

が、錆化が酷く、鎌身部中央に穴が開いており頸部中央で捺れている。頸部は幅広で無閃である。矢柄の遺存状態が極めて良く樹皮巻が最後まで観察できる。出土場所は玄室右側の羨門側角付近の床面で、壁に立てかけられた状態であった。18も大型の三角形鎌であるが、錆化が酷く、頸部中央に穴が開いており、下部には別個体の一部の木質が付着している。矢柄の遺存状態が比較的良く樹皮巻が観察される。出土位置は3の隣である。19は大型の三角形鎌であるが、錆化が酷く、頸部上部に穴が開いている。頸部は扁平で閃は無く、矢柄部分に樹皮巻が見られる。刃部は先端部に向かって直線的に伸びている。出土位置は1の玄室側隣である。20は大型の圭頭鎌である。鎌身部先端の錆化は激しいが矢柄の遺存状態は良好である。鎌身閃部に山形閃を有する。矢柄に樹皮巻が認められる。出土場所は玄室右側の羨門側角付近の床面で、壁に立てかけられた状態であった。21は大型の片刃鎌タイプの長頭鎌である。頸部が約9cmと長く、矢柄の遺存状態は良好である。鎌身頸部に台形閃を有する。出土位置は3の隣である。

12号

遺構 (26図)

平入りドーム造り両袖を有するが小型で羨道部を持たない不定形なタイプの地下式横穴墓であ



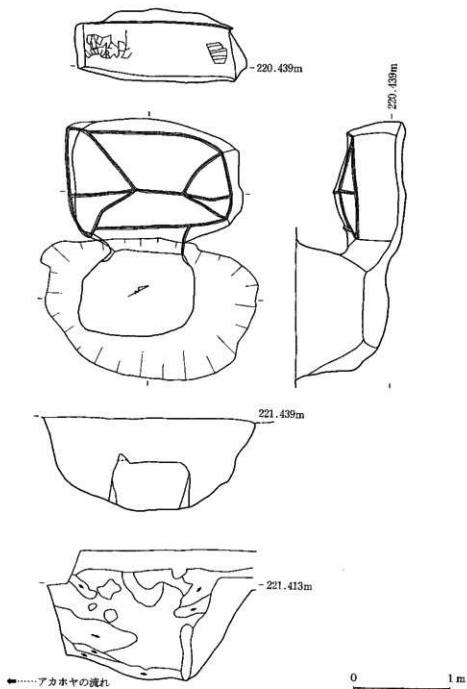
第27図 13号地下式横穴墓実測図

る。主軸はS16°Wを示す。玄室の奥行き66cm、幅178cmであるが、3号・9号同様にトレンチャーによって天井部を切られており玄室内精査直後に天井部が崩壊したので天井部までの高さは不明である。閉塞は板閉塞であったと考えられる。閉塞は破れており玄室内に堅坑の埋土が充満していた。人骨、遺物共に出土していない。堅坑の端から玄室にかけて約15°の角度で下がっている。羨門部の形態は入り口が低く横に長い楕円形状を呈する。堅坑床面の長軸は142cm、短軸は73cm、遺構検出面からの49cmを測る。この地下式横穴墓が東二原地下式横穴墓群の中で最も規模の小さなものである。その規模から単体埋葬の可能性が大きいと考えられる。

13号

遺構（第27図）

両袖平入りの地下式横穴墓である。主軸はN11°Eを示す。玄室の奥行き77cm、幅153cm板閉塞である。玄室の奥行き77cm、幅153cm、天井部までの高さが61cmを測る。天井部は玄室内精査中に崩壊したので詳細は不明であるが遺存部の状況からドーム状を呈する可能性が高い。羨門部も天井部が崩壊したときに崩壊してしまったので形態は不明であるが、羨道と玄室の境界線付近で一段玄室の方が高くなっている。天井部も壁との境界部分で外側に向かって張り出している部分が見られる。天井部の作り方は粗く、うねっている。堅坑の床面は長軸180cm、短軸107cm、遺構検出面からの深さ94cmを測る先細りのU字形を呈する。全体的にトレンチャーにより切られてい



第28図 14号地下式横穴墓実測図

るがU字形の頂点が竪坑の中心よりも13cm左にずれている。玄室の左隅が幅48cmに渡って15cm外側に張り出している。羨道部の天井部は崩壊したが羨門部の幅は残った部分から77cmを測る。人骨、遺物共に出土は無い。玄室規模から単体埋葬の可能性が大きいと考えられる。

14号

遺構（第28図）

2号の東隣に2号の玄室に主軸を向けるように作られた地下式横穴墓である。主軸はN60.5°Wを示す。両袖を有し平入りで天井部は崩れたドーム状を呈するが幅2cm程度の線刻で切妻屋根を表現している。しかし妻の線が屋根根の中央付近まで来ているので寄棟に近いものとなっている。壁と天井部との境界線も線刻される。羨道部右側の天井と壁の境界線も線刻される。玄室規模は奥行き130cm、幅184cmを測る。羨門部は幅広で高さが低くほかの定型的な地下式横穴墓の羨門部よりも扁平である。また羨門部の床面よりも天井部の方が幅が狭く立面形は台形を呈する。玄室の平面形は左半分が比較的きちんと方形に作られているが右半分は奥壁がやや手前に迫り出し右壁際では隅丸状を呈する。さらに右壁はうねっている。羨門は床面での幅84cm、高さ51cm、羨道の長さ33cmを測る。羨門は左上部が一部崩壊している。高さに対して幅が広いので横長の方形の立面形を呈する。さらに竪坑から玄室に向けて下に傾斜している。竪坑は遺構検出面からの深さ86cmと浅く短軸90cm、長軸119cmを測り横長の隅丸方形状を呈する。全体的に古い要素を持たせながら造りそのものは雑である。遺物、人骨の出土は無い。

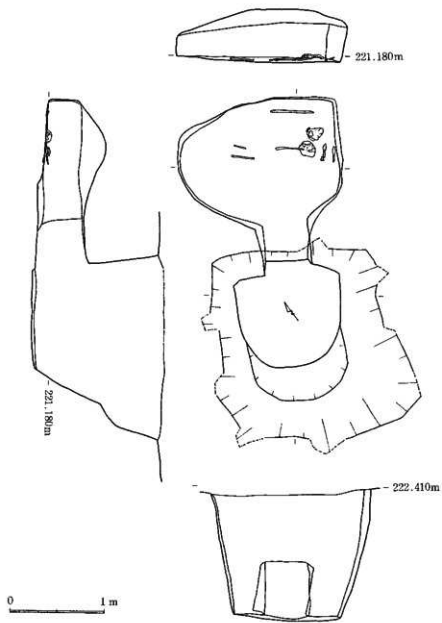
15号

遺構（第29図）

両袖を有し妻入りの地下式横穴墓である。天井部はドーム状を呈する。玄室規模は奥行き132cm、幅174cmを測る。玄室は両袖造りであるが右側の張り出しはわずかに40cm程度しかなくほかの地下式横穴墓と様相を違にする。玄室の平面形は左側が丸く右側が方形の砲弾型を呈する。閉塞は板閉塞である。主軸はN36°Eを示す。羨門部の幅53cm、高さ57cm、羨道の長さ40cmである。竪坑の床面の長軸114cm、短軸112cmを測り、平面形は羨門部の反対側を曲線部とするU字形を呈する。人骨は2体、保存状態の悪いものが出土している。遺物は第31図1の直刀が玄室奥壁右寄りに置かれており、第25図1～6の鉄鎌は鎌の先端部分を玄室奥に向けて右壁際中央に置かれていた。

人骨の出土状況

人骨は2体保存状態の悪いものが出土している。性別や年齢は不明である。1号人骨・2号人骨ともに頭位は右で1号人骨は頭蓋骨の痕跡と歯が6点出土したのみである。2号人骨は頭蓋骨の痕跡と上腕骨、尺骨と左右の頭骨の一部が残されていた。人骨についての詳細は付篇を参照されたい。



第29图 15号地下式横穴墓实测图

遺物 (第31図)

1は埋土中から出土した矢柄を鐵身部内に差し込んで使用するタイプと考えられる無茎鐵である。2は大型の三角形鐵であるが、錆化が酷く鐵身部から頭部にかけて水平方向の割れが見られる。頭部は幅広で矢柄には樹皮巻がみられるが、矢柄も錆のためか扁平になっている。出土位置は玄室右側の頭骨と壁の間の床面である。3は刃部の非常に長い三角形鐵である。全体的に錆化が激しく矢柄もほとんど遺存していない。全体的に水平方向の割れが見られる。茎部は方形である。出土位置は2と壁の間の床面である。4は三角形鐵で全体的に錆化が激しく、コブサビで彫れている。矢柄に樹皮巻が見られるが、一部破損中の鐵基部が見えている。5は鐵身部が欠損している長頭鐵である。台形鬨を有し筥被から下部へ約4cmの間が錆で膨らんでおり、樹皮巻の跡が微かに見られる。6は片刃タイプの長頭鐵である。約2mmの逆刺を有する。台形鬨を有する矢柄部が約11cm残存しており、そのうち約8cmに薄い錆に覆われた樹皮巻の跡が見られる。

16号

遺構 (第30図)

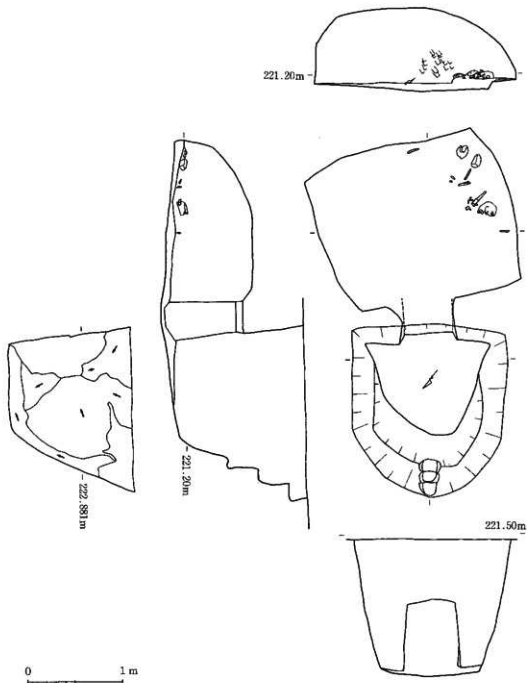
平入りで両袖を有し天井部がドーム状を呈する地下式横穴墓である。玄室規模は奥行170cm、幅204cmを測る。閉塞は板閉塞である。玄室の平面形は正方形に近く天井部は羨道より部分と左側が平坦ではあるが比較的きれいなドーム状を呈する。床面はほぼ平坦であるが玄室奥壁際がわずかに上に傾斜している。堅坑から玄室にかけては羨道部が最も低くなっている。堅坑は羨門部の反対側を曲線部とする先細りのU字形を呈する。羨門部の反対側に足掛け穴を3個有する。堅坑床面の長軸131cm、短軸94cm、遺構検出面からの深さ134cmを測る。羨門部の幅60cm、高さ81cm、羨道部の長さ41cmで羨門はきれいな長方形を呈する。人骨は頭蓋骨のみ2体分出土した。遺物は鉄鐵2点、刀子2点出土している。第31図3・4の鉄鐵、1の刀子は玄室右側壁近くから出土した。2の刀子は玄室奥壁際中央付近から出土している。

人骨の出土状況

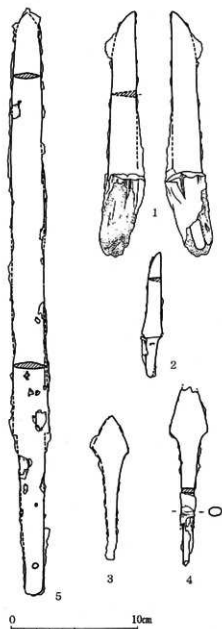
頭蓋骨が2体分出土している。頭位は玄室右側にしており、頭蓋骨は床面に触れている下半部が失われている。人骨についての詳細は付篇を参照されたい。

遺物 (31図)

1は大型の平造り、角背の刀子である。把部には鹿角装が良好な状態で遺存している。錆のため刃部先端部分が曲がっている。全体的に錆化が激しく全面に大小の瘤錆が見られる。茎の下部が露出しているが目釘穴は見られない。出土位置は玄室右側壁近くの頭骨の横の床面である。2は小型の平造り、角背の刀子である。全体的に錆化が激しく木質は把部にわずかに残っているだけである。錆のため把部がわずかに曲がっている。目釘穴は見られない。出土位置は玄室右側壁近くである。3は小型の三角形鐵である。全体的に錆化が激しく頭部に水平方向の割れがあり、



第30图 16号地下式横穴墓实测图

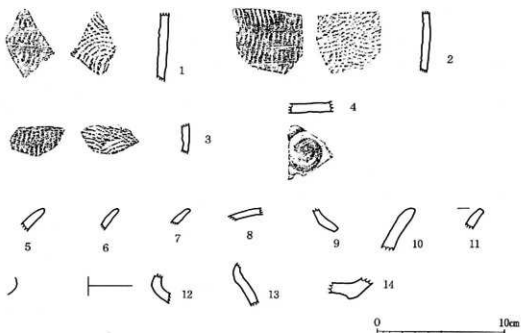


第31図 15号-16号地下式横穴墓玄室内出土遺物

剥離している。矢柄も残存していない。出土位置は玄室右側壁近くの頭骨の羨門よりの床面である。4は先端部が欠損しているが、中型の三角形鐵である。全体的に錆化が激しく鐵部部の中心が剥離している。頸部末端部に別個体の一部と思われる木質が付着している。矢柄の残存状況も悪い。出土位置は玄室正面壁ぎわ中央付近である。

土器 (第32図)

第32図の土器は東二原地下式横穴墓群で遺構外から出土したものである。1~4までは須恵器片で1~3までは外面が平行叩きの後ナデを施しており、内面は同心円叩きの胴部片である。器形は破片が小さいため不明である。4は内面にロクロの後を有する底部片である。器形は不明であるが平瓶の可能性も考えられる。5は丹塗りの壺の口縁部である。10号竪坑から出土した丹塗土器と同じに丹が厚く塗られている。口唇部、内、外面共に丁寧に研かれている。6・7は土師器の口縁部である。8・9は高坏片である。8は土師器の高坏の坏部の破片である。9は丹塗りの土師器の高坏の脚部である。10~14は時期不明の土器片である。10・11は口縁部片、12・13は頸部片である。いずれも破片が小さく風化が激しいものもあり、時期判定が不可能である。



第32図 遺構外出土土器実測図

第4節 円墳

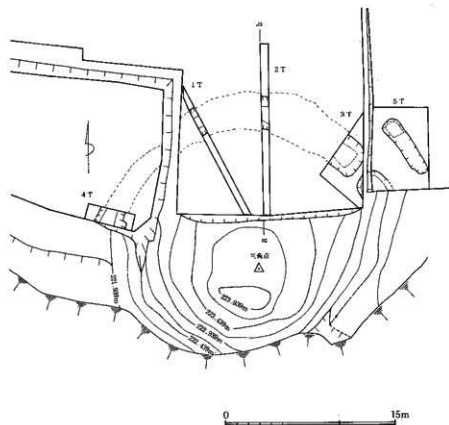
東二原地下式横穴墓群の円墳は、地元では「塚」との伝承があったが、平成元年12月の地下レーダーによる遺構探査の際その所在が確認され、その後の調査で円墳であることを確認したものである。この円墳は、市内に存在する唯一の高塚古墳となった。

円墳は、東二原地下式横穴墓群の立地する台地張り出し部の南縁部に位置し、南への緩斜面に立地している。古墳の規模は径約22mである。古墳の頂部は平坦であるが、緩斜面に立地している関係から計測される高さは南縁部で2m、北部で1.25mである。

2次調査は、1次調査で古墳の周溝が半円状に幅3mほどで確認されていたので、周溝の形状等の確認を主な調査の観点としてトレンチ法で実施した。その結果、周溝の幅は3m、断面形はレンズ状で確認された深さは55cmである。また、周溝は、検出時は半円状であったが、東端部分で幅は狭いながら陸橋部をもっている。土層の観察は、第2トレンチ西壁で行っている。これによると、古墳の基底部に当たる部分では自然層である黒色土が見られ、周溝外で黒色土はみられない。この黒色土の欠如は、墳丘を作る際に生じたものと推定される。周溝内の埋土については最下部にアカホヤ粒を含む黒色土で以後黒色系の土が自然堆積し、最上部には788年の火山灰である高原スコリアを含む黒色土が観察された。土層観察から周溝は、奈良時代にはほぼ埋まったものと推定される。

主体部については、今回の調査では確認されていない。

- I層……黒褐色土
 II層……高原スコリアを含む黒色土、やや褐色味あり
 III層……高原スコリアを含む黒色土
 IV層……粒子の極めて細かい黒色土
 V層……IV層に類似するが、黒味が強い
 VI層……黒色土
 VII層……やや褐色味のある黒色土
 VIII層……アカホヤ
 A層……2cm以内のアカホヤブロックを含む黒色土
 B層……攪乱を受けている黒色系の土で、部分的に色調・しまり等に違いが見られる。
 C層……アカホヤ粒を含む黒色で、含有量の違いにより色調に違いが見られる
 D層……耕作による攪乱



第33図 円坑及び土層実測図

第5節 まとめ

1. 地下式横穴墓について

東二原地下式横穴墓群に於ける地下式横穴墓の形態は全て羨門部閉塞で両袖を有する。それ以外の要素で形態分類をする。

第Ⅰ類－羨道を持つもの。天井部の造りや玄室の平面形によりさらに小分類される。

- A 切妻造りで玄室の平面形が長方形ないし方形を呈するもの（2号・4号・5号・7号・8号・14号）
- B 天井部がドーム状を呈し玄室の平面形が長方形ないし方形を呈するもの（6号・10号・11号・13号・16号）
- C 切妻造りで玄室の平面形が砲弾形を呈するもの（15号）

第Ⅱ類－羨道を持たないもの（3号・9号・12号）

2. 群構成について

東二原地下式横穴墓群において16基の分布は以下の4個の群に分けられる。

- a群－3号・9号・12号
- b群－2号・14号・
- c群－1号・7号・8号・10号・15号
- d群－4号・5号・6号・11号・16号

a群は第Ⅱ類で構成されている。さらに玄室主軸方向を見ると3基とも求心的な配置となっている。b群の14号玄室は2号玄室に向けて造られている。b群は第Ⅰ類Aで構成されている。d群の5号と11号も玄室の主軸が求心的な方向を示している。

3. 副葬品について

副葬品は16基中約62%にあたる10基で見られ、全て第Ⅰ類からの出土である。鉄鍔の出土本数は1本から54本までであるが、10号を除けば1本から18本までと人骨の出土数に比例して比較的まとまりのある数字となる。10号はその玄室規模から単体埋葬の可能性が高いので1体あたりの鉄鍔数は52本と考えられ、きわめて特異な例であると考えられる。

副葬された状態であるが、多くの場合刀剣類は鞘に納めて副葬されるが、11号から出土した小型の剣（第25図4）は出土状態から抜き身で副葬されたと考えられる。皮肉なことに抜き身で副葬されたことがその剣の遺存状態を鞘に納めて副葬されたものよりも良好に保っている。また、8号から出土した長頭鍔（第15図3～5）と骨鍔（第16図～第18図）は鍔先が3号人骨脇にあり、茎部は壁際になるように置かれている。その状態から鍔には矢柄がつけられておらず鍔身のみで副葬されていたと考えられる。これらの副葬状態の差は如何なる理由によるものかは現在のところ不明である。今後の資料の増加を待ちたい。

鉄鍔の入り方から見た時間差は三角形鍔（立切地下式横穴墓群等で変形圭頭鍔と呼ばれていた

もの)のみしか見られない7号・16号が古いと考えられるが、遺構の平面形からは、第Ⅰ類A(2号・4号・5号・7号・8号・14号)が古い様相を持つと考えられる。このことから、東二原地下式横穴墓群では7号が最も古い様相を持っていると考えられるが、7号は追葬が見られないことから、同じような平面形を持ち、追葬の確認されている2号との前後関係は不明である。

4. 時期について

東二原地下式横穴墓群においては玄室内から須恵器が出土していないことから時期について細かな位置づけを行うことはできない。しかし副葬品や地下式横穴墓の形態であえて時期差を設定するならば5世紀後半から6世紀前半にかけて使われたと考えられる。

註) 骨鏝について榎川埋蔵文化財センター主査中山晋氏から多大なる御教示をいただいた。記して謝したい。

参考文献

- (1) 石川恒太郎「増補 地下式古墳の研究」1979
- (2) えびの市教育委員会「小木原遺跡群敷地区(A・B地区)『えびの市埋蔵文化財調査報告書第6集』1990
- (3) 国富町教育委員会「市の瀬地下式横穴墓群」『国富町文化財調査資料第4集』1986
- (4) 小林市教育委員会「東二原地下式横穴墓群」『小林市文化財調査報告書第2集』1990
- (5) 杉山秀宏「古墳時代の鉄鏝について」『榎原考古学研究所論集 第八』1988
- (6) 高原町教育委員会「立切地下式横穴墓群」『高原町文化財調査報告書第1集』1991
- (7) 宮崎県教育委員会「Ⅲ 大萩地下式横穴36号発掘調査」『宮崎県文化財調査報告書第22集』1980

宮崎県小林市東二原地下式横穴墓群出土鏡の材質についてのコメント

奈良国立文化財研究所

埋蔵文化財センター研究指導部

主任研究官 村上 隆

鉛を含む青銅（銅-錫合金）製である。錫の含有はおそらく15%以上とかなり高く、鉛も5%以上は含まれるもの、と推定される。また、微量の砒素、銀、鉄なども含まれている。鏡面部は、厚く緑青錆に覆われているが、錆層の下には、光沢をもった鏡面がよく遺存しており、研磨面における錆の生成機構を考察する上で、貴重な資料である。なお、分析は、蛍光X線分析法による非破壊定性分析による。

号	鉄 鍬	骨 鍬	刀 子	劍	直 刀	鏡	貝 輪	朱 玉	人 骨
1	4		3						1
2	17		2			1			5
3									
4								有	
5	13			1					1
6	8		4		1				3
7	1		1						
8	8	20	2	1			4	有	3
9									
10	52		2					有	
11	15		3	3	1			有	5
12									
13									
14									
15	6			1					2
16	2		2						2
計	126	20	19	6	2	1	4		22

表1 東二原地下式横穴墓玄室内出土遺物一覽表

鍬型式	号数	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	計
柳 葉 鍬									1			1				1		3
腸 袂 柳 葉 鍬												1						1
圭 頭 鍬	4						1		1			1						7
三 角 形 鍬			8				4		1		4	10				2	2	31
腸 袂 三 角 形 鍬							2				3							5
無 茎 鍬											2	1				1		4
長 頸 鍬			9			13	1		5		27	2				2		59
不 明							1											1
計		4	17			13	9		8		36	16				6	2	111

表2 東二原地下式横穴墓出土鉄鍬分類表

表3 第二原地下式構穴蓋一覽表

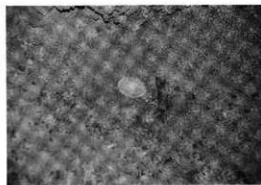
号数	アラン	点穴規模 幅×高さ×長さ	材質	蓋 寸法	蓋形アラン 長さ×幅×高さ	形似構 長さ×幅×高さ	覆り幅 幅×高さ	側門アラン	沈没長さ cm	原土遺物	人骨	備考
1	平入り、円筒 切妻	200×215 275×114	石	台形	有	85×70×194 55	70×54	長方形	36	鎌4、刀字2	骨片	
2	平入り、円筒 切妻	174×280×114	石	長方形	有	142×130×162	60×60	長方形	60	鎌1、刀字2、鉄鏝17	5体	土器、灰瓦
3	平入り、円筒 ドーム	76×220×23	灰	不定形	無	97×86×50		—	56	—	—	
4	平入り、円筒 切妻	152×196×103	ロームの ブロック	長方形	有	122×79×124	56×71	円筒形	37	北玉	—	
5	平入り、円筒 切妻	124×216×100	アカキヤ ブロック	長方形	有	133×84×142	87×80	逆U字形	85	鉄鏝13、銅1	1体	
6	平入り、円筒 ドーム	196×205×102	石	正方形	有	116×82×138	56×71	長方形	52	鉄鏝8、刀字4、灰刀1	3体	遺器有
7	平入り、円筒 切妻	151×211×93	石	長方形	無	109×70×137	66×56	横長方形 (楕長)	27	鉄鏝1、刀字1	—	
8	平入り、円筒 切妻	167×221×114	石	長方形	有	133×106×161	68×81	長方形	46	鉄鏝8、青銅20、刀字2 銅1、灰燵4、赤土	3体	
9	平入り、円筒 ドーム	100×211×—	灰	不定形	無	148×45×75		楕円形		—	—	天井部崩壊
10	平入り、円筒 天井不明	93×199×—	灰	長方形	無	105×77×76		台形	41(穴埋部) 21(台埋部)	鉄鏝32、刀字2、赤土	—	天井部崩壊
11	平入り、円筒 ドーム	212×212×110	石	正方形	有	98×77×131	58×72	長方形	64	鉄鏝15、刀字3、銅3 灰刀1、赤土	5体	
12	平入り、円筒 ドーム	66×178×—	灰	不定形	無	142×73×40		—	—	—	—	天井部崩壊
13	平入り、円筒 天井不明	77×153×61	灰	長方形	無	180×107×94	77×	—	45	—	—	天井部一部崩壊
14	平入り、円筒 切妻	130×184×76	灰	長方形	有	119×80×86 (楕長)	84×51	長方形 (楕長)	33	—	—	天井部崩壊
15	平入り、円筒 アーチ	132×174×64	灰	楕円形	無	114×112×138	53×48	長方形	40	鉄鏝6、銅1	2体	天井部崩壊
16	平入り、円筒 アーチ	170×204×90	灰	正方形	無	131×91×134	60×81	長方形	41	鉄鏝2、刀字2	2体	



遺跡遠景（北西より）



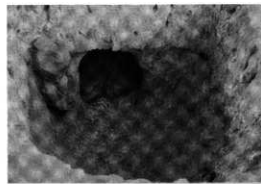
2号



2号鏡出土状況



3号



4号



5号



6号



6号



7号



8号



8号骨鏝出土状況



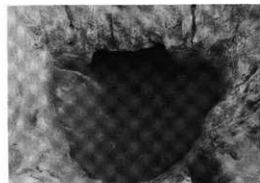
9号



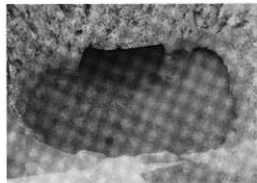
11号



11号



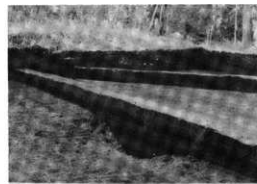
13号



14号

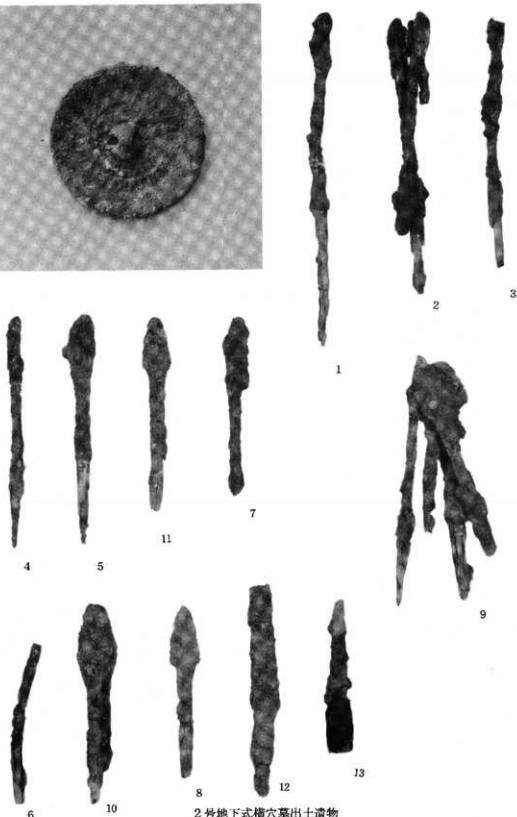
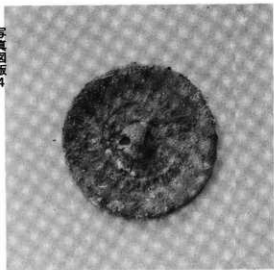


古墳近景（北より）

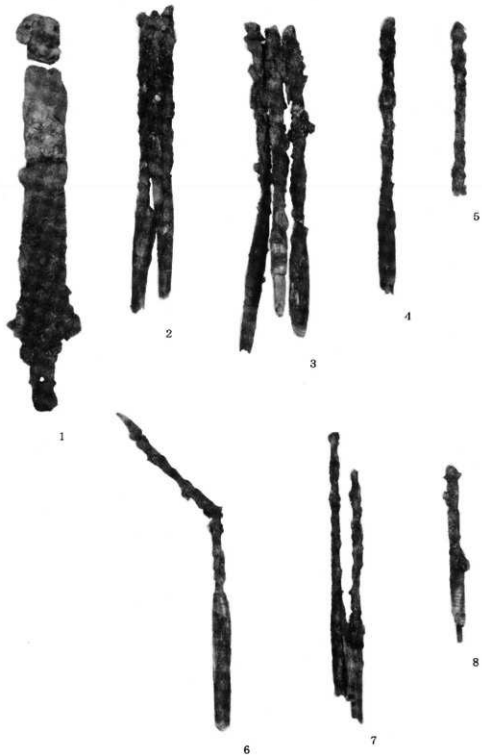


第2トレンチ土層（北東より）

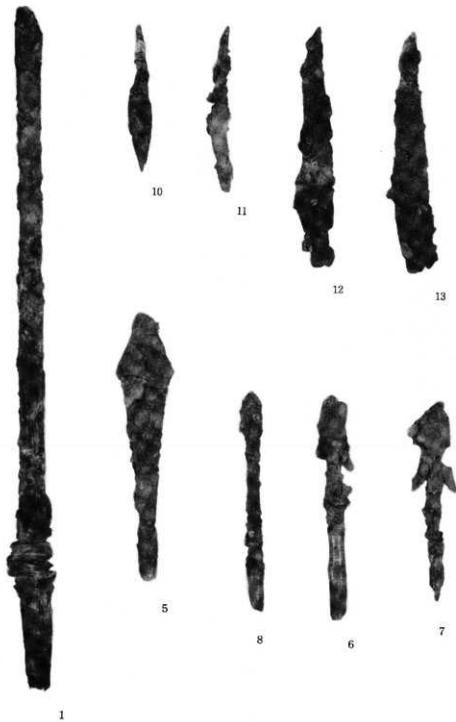
写真図版4



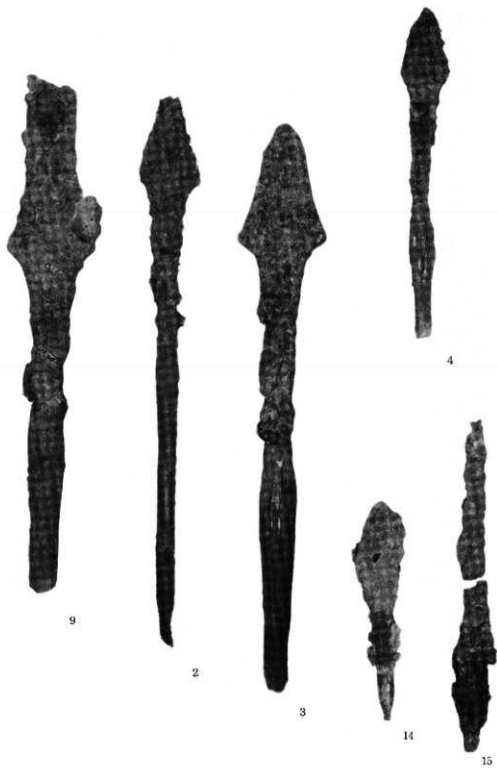
2号地下式横穴墓出土遺物



5号地下式横穴墓出土遺物



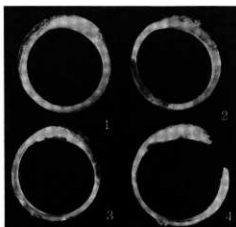
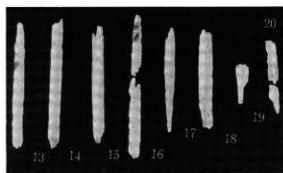
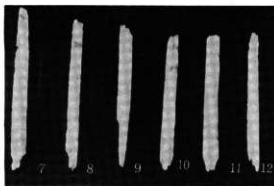
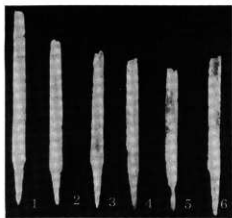
6号地下式横穴墓出土遺物



6・7号地下式横穴墓出土遺物



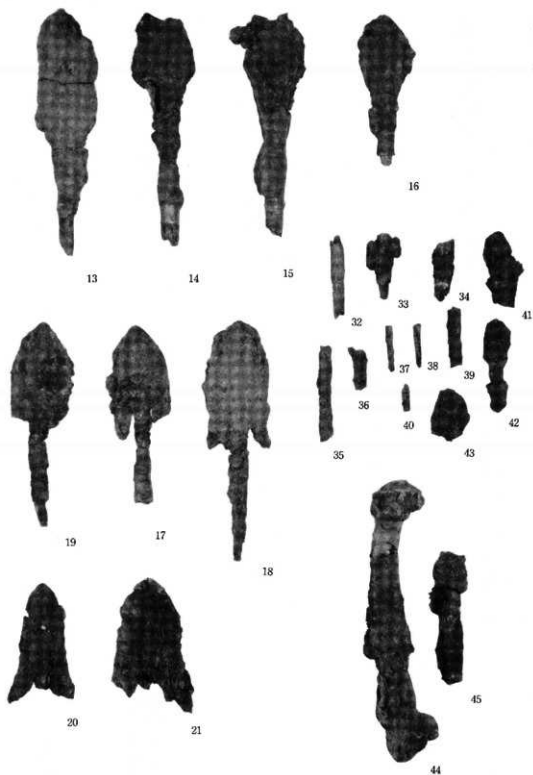
8号地下式横穴墓出土遺物



8号地下式横穴墓出土骨鐵・貝輪



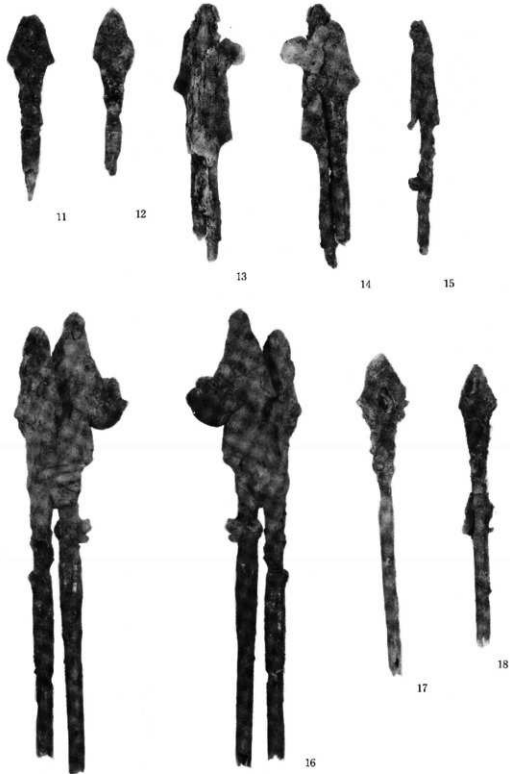
10号地下式横穴墓出土遺物(1)



10号地下式横穴墓出土遺物(2)



11号地下式横穴墓出土遺物(1)



11号地下式横穴墓出土遺物(2)



11・15号地下式横穴墓出土遺物



15·16号地下式横穴墓出土遺物

^{しも}
下の^{ひら}平地下式横穴墓群

本文目次

1. はじめに	70
2. 調査に至る経緯	70
3. 調査の結果	73
(1) 遺構	73
(2) 人骨	73
(3) 遺物	73
4. まとめ	74

挿図目次

第1図 下の平2号地下式横穴位置図	70
第2図 下の平2号地下式横穴実測図	71
第3図 下の平2号地下式横穴出土遺物実測図	72

図版目次

図版1 遺跡遠景	76
竪穴部閉塞石の状態	76
図版2 玄室内の状態(束柱)	77
版刻のある鉄鎌	77
図版3 出土遺物	78

例言

1. 本報告は昭和60年2月の小林市教育委員会が実施した下の平2号地下式横穴の発掘調査報告である。
2. 発掘調査は、県文化課主事永友良典が担当した。
3. 人骨の調査については、長崎大学医学部解剖学第二教室、松下孝幸・分部哲秋の各氏に依頼しておこなった。
4. 本報告の執筆・編集には永友があたった。

1. はじめに（第1図）

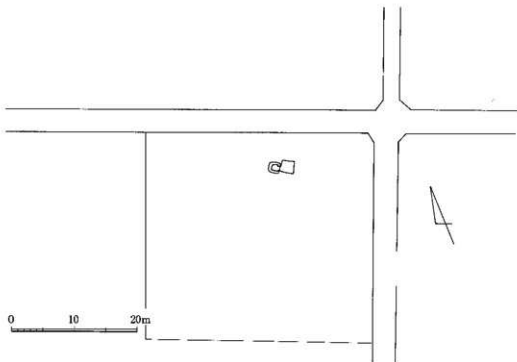
下の平地式横穴墓は小林市と野尻町の境を流れる岩瀬川（大淀川の支流）の右岸にひろがる台地上に位置し、国道268号線の北沿いにあたる。所在地は小林市大字水流追字下ノ平179の3番地である。

下の平地式横穴では昭和56年に地下式横穴^(注)1基（1号）が耕作中に発見され発掘調査がおこなわれている。1号地下式横穴は今回調査の2号地下式横穴の西方約10mで発見されている。

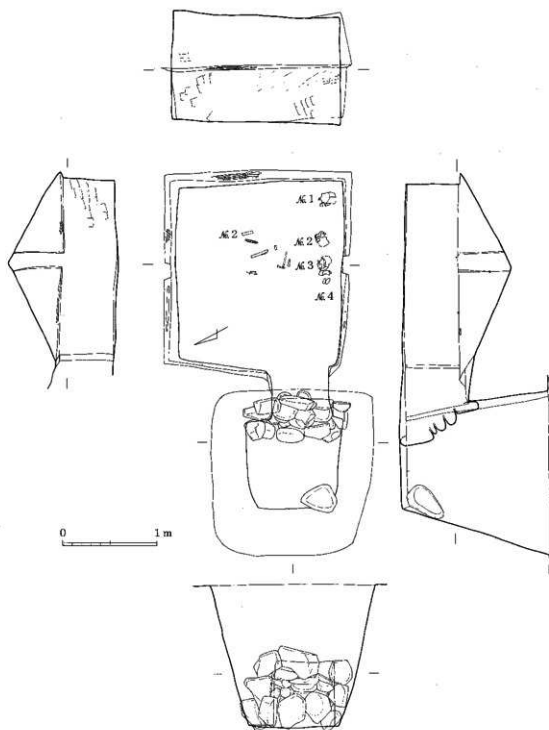
(注) 宮崎県教育委員会「下の平地式横穴発掘調査」『宮崎県文化財調査報告書』第24集 1981

2. 調査に至る経緯

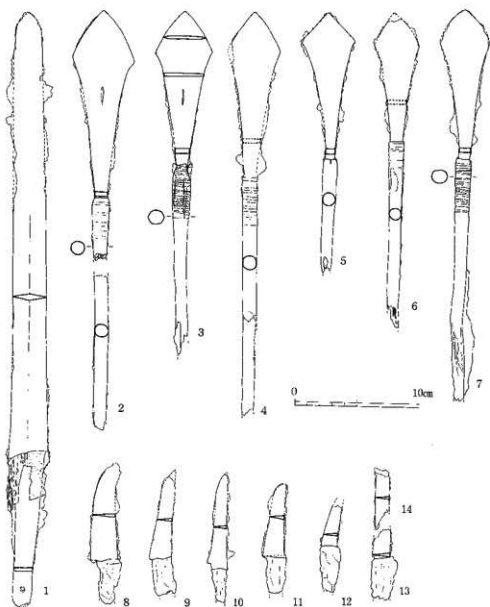
今回発見された2号地下式横穴も1号地下式横穴と同様、土地所有者の伊木操氏がゴボウ用のトレンチャーによる耕作中に地表が陥没し発見した。小林市教育委員会では早速、県文化課と連絡を取り、昭和60年2月19日から2月21日までの3日間発掘調査を実施した。調査は小林市教育委員会が調査主体となり、県文化課主事永友良典が担当した。



第1図 下の平2号地下式横穴位置図



第2図 下の平2号地下式横穴実測図



第3図 下の平2号地下式横穴出土遺物実測図

3. 調査の結果

(1) 遺構 (第2図)

2号地下式横穴は、主軸をN-57°-Eに持つ羨門閉塞で平入り型の全長340mの地下式横穴である。左片袖と見られるが右壁にも10cmほどの袖部の掘り込みが見られる。左壁の袖部は94cmを測る。

羨門部は長さ約50cmと短く、幅は竪坑側と玄室側で65cm、中央部で60cmを測る。高さは中央部で72cmある。

玄室のプランは正方形でその規模は奥壁幅172cm、左壁幅181cm、右壁幅194cm、羨門部側の幅166cmを測る。天井は切妻状に構築されており天井の高さは左壁側で115cm、奥壁側で53cmを測る。

玄室の壁の四方には幅5～10cmの棚状の施設が設けられている。副葬品はすべて棚状施設上に置かれていた。副葬品には鉄鏃6本、刀子6本、鉄剣1本が見られる。また、左右の壁の中央部には棚状施設より上部に15～20cm幅の束柱のレリーフが切込まれている。奥壁を中心に調整痕が部分的に見られる。人骨は4体分検出された。

竪坑は方形に近い台形状を呈する。床面で羨門側が110cm、手前側が80cm、長さ97cmを測る。確認面までの深さは150cmである。閉塞には20枚程の川原石を用い隙間には小振りの石を詰めるなど堅牢に積み重ねている。竪坑右隅には川原石1個が立てかけられた状態で検出された。

(2) 人骨 (第2図)

人骨は4体分検出されたが遺存状態は悪く、頭蓋骨の一部と四肢骨数点のみであった。主軸に直交する形で頭部を南西方向に位置した状態で4体が並んだ状態で検出である。頭蓋骨は4体分あるがいずれも後頭部を欠く。四肢骨は東端の一つが疑2人骨のもので残りは疑2～疑4のものが混在している。

(3) 遺物 (第3図)

副葬品は鉄剣・鉄鏃・刀子の鉄器のみである。すべて玄室内の棚状施設上に置かれてあり器種ごとに3ヵ所に置かれていた。配置の状況は、奥壁棚状施設に鉄鏃6本、左壁棚状施設の束柱奥に刀子5本、手前に鉄剣1本、右壁棚状施設手前に刀子1本である。

a. 鉄剣 (第3図1)

1は全長48.1cmの鉄剣。刃長36.4cm、刃幅は根よりで3.3cm、鋒よりで2.4cm、刃部の厚さは中央部で0.5cm測る。根部付近に把の木質が残る。茎は根部から少し屈曲し1ヵ所で目釘穴が確認できる。茎幅は根よりで2.5cm、把頭より1.5cmを測る。

b. 刀子（第3図8～14）

8は右壁棚状施設手前、9～13は左壁棚状施設の束柱奥から検出された。すべて茎刀子で基部には木質が遺存する。

8は現存長11.3cm、刃長7.5cm、刃間部幅2.2cm、刃部の厚さ0.2cmを測る。鋒の先端は錆で本来の形状が不明である。

9は現存長9.6cm、刃長6.6cm、刃間部幅1.8cm、刃部の厚さ0.25cmを測る。鋒の先端を欠く。

10は現存長10.3cm、刃長7.5cm、刃間部幅1.5cm、刃部の厚さ0.2cmを測る。鋒の先端をわずかに欠く。

11は現存長8.8cm、刃長5.7cm、刃間部幅1.8cm、刃部の厚さ0.35cmを測る。

12は現存長7.0cm、刃間部幅1.2cm、刃部の厚さ0.2cmを測る。鋒の先端をかなり欠く。

13は現存長5.6cm、刃間部幅1.4cm、刃部の厚さ0.3cmを測る。鋒の先端は14と思われる。14は現存長約4.5cm、刃間部幅1.2cm、刃部の厚さ0.3cmを測り13の刃長は7cmを超す。

c. 鉄鎌（第3図2～7）

鉄鎌はいずれも圭頭鎌である。かえりを持つタイプⅠ（2、3、4、5）と持たないタイプⅡ（6、7）に別れる。タイプⅠのうち5のみが鋒に丸みを持たない。

2は現存長20.2cm、身長15.1cm、身幅5.0cmを測る。タガネで刻まれた長さ1.3cm程の線刻がみられる。茎部には樹皮巻の矢柄が遺存している。矢柄の下部は欠損するが、長さ12.4cmの矢柄と同一と思われる。

3は現存長27.3cm、身長12.3cm、身幅4.5cmを測る。3にも2と同様の線刻が見られるが細味である。茎部には樹皮巻の矢柄が遺存している。

4は現存長32.3cm、身長8.0cm、身幅4.2cmを測る。茎部には樹皮巻の矢柄が遺存している。

5は現存長20.3cm、身長11.7cm、身幅4.3cmを測る。茎部には矢柄が遺存している。矢柄の先端には別の個体の矢柄片が付着する。

6は鋒の先端を欠く。現存長24.8cm、身長9.8cm、身幅3.8cmを測る。茎部には樹皮巻の矢柄が遺存している。

7は現存長31.3cm、身長12.0cm、身幅4.0cmを測る。茎部には樹皮巻の矢柄が遺存している。矢柄の先端には別の個体の矢柄片が付着する。

4. まとめ

下の平地下式横穴群で調査された2基の地下式横穴墓は、1号（昭和56年調査）が玄室と竪坑の主軸方向が異なり玄室天井が基本的な切り妻造りでないなど多少のちがいは見られるものの、羨門石閉塞で玄室は方形プランの片袖平入りのものである。束柱のレリーフや棚状施設をもうけ

ている、副葬品が鉄剣・鉄鏃・刀子の鉄器に限られる、竪坑の隅に川原石の踏み石を置く、左片袖タイプではあるが右袖をわずかに振り込むなど同タイプの地下式横穴と言える。

方形タイプの片袖平入りで棚状施設をもうけている地下式横穴墓は新田場地下式横穴群⁽¹⁾(小林市)、日守地下式横穴群⁽²⁾・旭台地下式横穴群⁽³⁾・立切地下式横穴群⁽⁴⁾(以上、高原町)、上ノ原地下式横穴群⁽⁵⁾(須木村)、九塚地下式横穴群⁽⁶⁾・切畑地下式横穴群⁽⁷⁾・大萩地下式横穴群⁽⁸⁾⁽⁹⁾(以上、野尻町)など加久藤盆地(えびの市)を除く小林盆地を中心とした西諸県地方に広く見られる。

東柱のレリーフが切込まれている地下式横穴墓は旭台9号地下式横穴⁽³⁾・大萩B-10号地下式横穴⁽⁹⁾・立切60号地下式横穴⁽⁴⁾などで見られるのみである。立切63号地下式横穴⁽⁴⁾は線刻によって東柱を表現している。

また、線刻の有る鉄鏃も、新田場7号地下式横穴⁽¹⁾・立切58・60号地下式横穴⁽⁴⁾などで見られる。

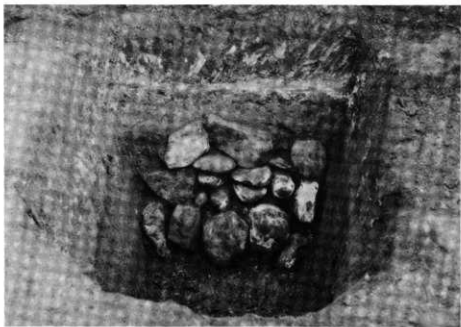
この様に、下の平1号地下式横穴は小林盆地を中心とした西諸県地方に典型的に見られる地下式横穴のタイプである。地下式横穴の年代としては2号地下式横穴と同時期の6世紀前半と思われる。

[注]

- (1) 宮崎県教育委員会「新田場地下式横穴墓群」『宮崎県文化財調査報告書』第34集 1991
- (2) 宮崎県教育委員会「日守地下式横穴発掘調査」『宮崎県文化財調査報告書』第22～24集
- (3) 宮崎県教育委員会「旭台地下式古墳群発掘調査」『宮崎県文化財調査報告書』第19集 1977
- (4) 高原町教育委員会「立切地下式横穴墓群」『高原町文化財調査報告書』第1集 1991
- (5) 宮崎県教育委員会「上ノ原地下式古墳発掘調査」『宮崎県文化財調査報告書』第23集 1981
- (6) 宮崎県教育委員会「九塚地下式横穴墓群」『宮崎県文化財調査報告書』第29集 1986
- (7) 宮崎県教育委員会「切畑地下式古墳発掘調査」『宮崎県文化財調査報告書』第20集 1978
- (8) 宮崎県教育委員会「大萩遺跡1」 1974
- (9) 宮崎県教育委員会「大萩地下式横穴墓群」『宮崎県文化財調査報告書』第27集 1984



遺跡遠景（北西から）



竪坑部閉塞石の状態



玄室内の状態（東柱）



線刻のある鉄器



出土遺物

宮崎県小林市東二原地下式横穴墓群出土の古墳時代人骨

松下孝幸・佐伯和信

宮崎県小林市東二原地下式横穴墓群出土の古墳時代人骨

松下孝幸^{*}・佐伯和信^{**}

キーワード：宮崎県、古墳時代人骨、地下式横穴墓、低・広顔

はじめに

宮崎県小林市大字真方に所在する東二原地下式横穴墓群の発掘調査が1990年に行なわれ、21体の古墳時代人骨が発掘された。

宮崎県から出土する古墳時代人骨の例数は他県に比較すれば多く、報告例も多いが、これまで小林市からは保存状態の良い古墳時代人骨の出土例はなかった。小林市では「下ノ平地地下式横穴墓」と「新田場地下式横穴墓」から人骨が検出されているが、これらの保存状態は著しく悪いものであった。

南九州地域の古墳人の男性頭蓋については松下は三タイプに分類し、山間部と平野部では頭蓋の形態に差があり、山間部の古墳人の顔面頭蓋には縄文人的な特徴が認められることを指摘している(松下、1990)。しかし、山間部の資料は必ずしも十分ではなく、小林市での様子も不明のままであった。

本例は顔面頭蓋の保存状態が比較的良く、人骨の人類学的観察や計測を行ない、その特徴を明らかにすることができたので、その結果を報告しておきたい。

資 料

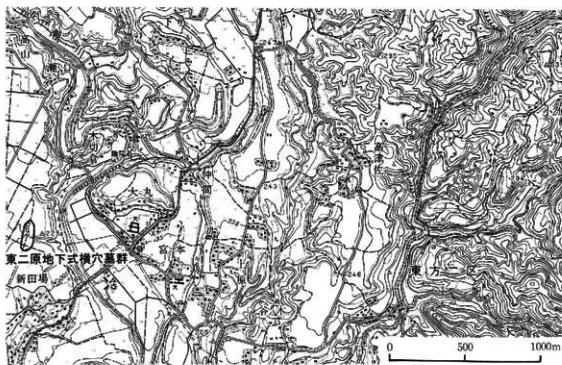
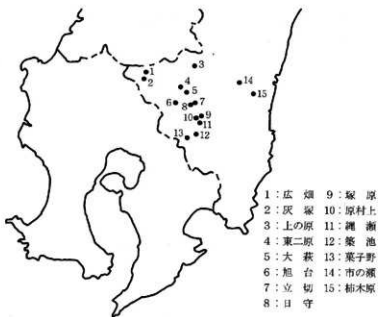
表1 資料数

成 人			幼 小 児	合 計
男 性	女 性	不 明		
13	5	2	1	21

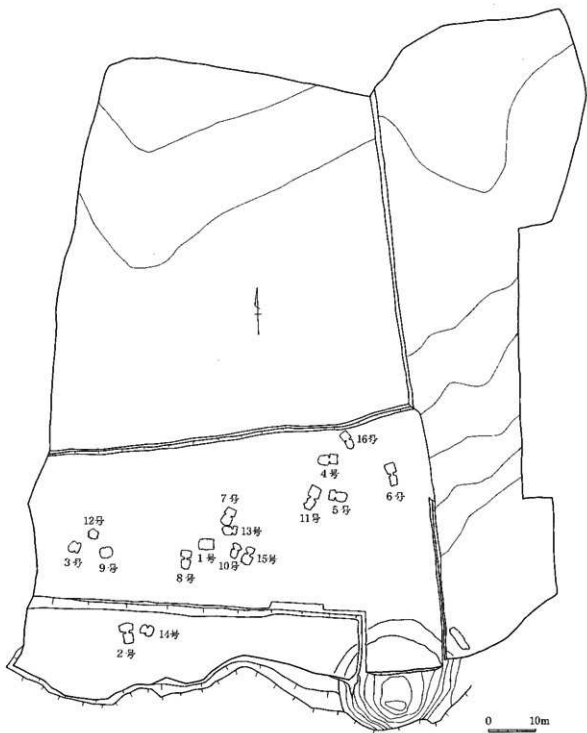
本遺跡から出土した古墳時代人骨は合計21体で、表1に示すとおり、この21体のうち成人骨は20体で、残りの1体は幼小児骨である。成人骨のうち、男性骨は13体、女性骨は5体で、その他に性別を明らかにできなかったものが2体あった。なお、各人骨の性別・年齢は表2のとおりである。

この21体の人骨は、考古学的所見より、古墳時代後期に属する人骨群である。

計測方法は、Martin-Saller (1957) によったが、一部はHowells (1973) の方法で計測し



第1図 遺跡の位置 (Fig.1. Location of the Higashiniwara Site, Kobayashi City, Miyazaki Prefecture)



第2図 遺構分布図

た。また、脛骨の横径はオリビエの方法で計測し、鼻根部については鈴木(1963)と松下(1983)らの方法で計測した。

表2 出土人骨一覧 (List of skeletons)

人骨番号	性別	年齢
2号墳1号人骨	男性	熟年
2 "	女性	壮年
3 "	女性	不明
4 "	女性	熟年
5 "	—	小児
5号墳人骨	不明	不明
6号墳1号人骨	男性	不明
2 "	男性	不明
3 "	男性	熟年
8号墳1号人骨	女性	熟年
2 "	男性	熟年
3 "	男性	熟年
11号墳1号人骨	男性	熟年
2 "	男性	壮年
3 "	男性	熟年
4 "	男性	熟年
5 "	男性	不明
15号墳1号人骨	不明	不明
2 "	女性	不明
16号墳1号人骨	男性	壮年
2 "	男性	壮年

所見および考察

各骨の計測値は文末に一括して掲げた。

1. 頭蓋

(1) 脳頭蓋

男性の脳頭蓋の計測値は、頭蓋最大長が187.80mm(5例)、バジオン・プレグマ高は134.75mm(4例)であるが、頭蓋最大幅は計測できない。従って、頭蓋長幅示数も算出できないが、片側を

2倍して算出した頭蓋最大幅は [139.33] mm (3例) となり、この推定値を用いて示数値を算出してみると、頭蓋長幅示数は [73.27] (3例)、頭蓋長高示数は69.87 (2例)、頭蓋幅高示数は [96.75] (2例) となり、頭型は dolicho-, chamae-, metriokran (長頭型、低頭型、中頭型) に属している。また、正中矢状弧長は384.00mm (2例) である。頭型の傾向を明かにできたのは3例であったが、3例中2例は長頭型で、残りの1例は中頭型であった。わずか3例のみであったが、本古墳人男性の頭型は長頭型へ傾いていた。

一方、女性の脳頭蓋の計測値は、頭蓋最大長が175.33mm (3例)、頭蓋最大幅は142.50mm (2例)、バジオン・プレグマ高は133mm (1例) である。頭蓋長幅示数は79.66 (2例)、頭蓋長高示数は76.44 (1例)、頭蓋幅高示数は93.66 (1例) となり、頭型は meso-, hypsi-, metriokran (中頭型、高頭型、中頭型) に属している。また、頭蓋水平周は535mm (1例)、横弧長は305.50mm (2例) である。女性の場合は頭型を明かにできたのは2例のみで、1例は短頭型、残りの1例は中頭型である。女性の場合は男性とは異なり、頭型は短頭へ傾いている。

次いで、宮崎県の他の古墳人群と比較してみた。表3は男性の脳頭蓋の比較表であるが、頭蓋最大長は表3ではもっとも長く、頭蓋最大幅は宮崎平野部Ⅱ古墳人よりは大きい、南九州山間部古墳人と宮崎平野部Ⅰ古墳人よりもわずかに小さい。バジオン・プレグマ高は宮崎平野部Ⅱ古墳人よりは大きい、宮崎平野部Ⅰ古墳人よりも小さく、南九州山間部古墳人と大差ない。頭蓋長幅示数は表3では最も小さな値となり、他の宮崎県の古墳人とは異なり長頭型である。また、頭蓋長高示数は表3では最小値、頭蓋幅高示数は南九州山間部古墳人と大差ない値である。

すなわち、男性頭蓋は長頭へ傾き、頭の高さはこれまでの南九州地域の古墳人と大差ない頭蓋である。

表3 脳頭蓋計測値 (男性、mm)

(Table 3. Comparison of male calvarial measurements and indices)

	東 二 原			南九州山間部			宮崎平野部Ⅰ			宮崎平野部Ⅱ		
	古 墳 人			古 墳 人			古 墳 人			古 墳 人		
	n	M	σ	n	M	σ	n	M	σ	n	M	
1.	頭蓋最大長	5	187.80	8.04	15	181.13	4.66	4	178.75	4.99	1	171
8.	頭蓋最大幅	3	[139.33]		24	141.33	4.97	5	142.00	4.85	1	[130]
17.	バジオン・プレグマ高	4	134.75	5.50	22	135.82	4.58	5	136.20	4.92	1	129
8/1	頭蓋長幅示数	3	[73.27]		9	77.17	2.76	4	80.88	5.27	1	[76.02]
17/1	頭蓋長高示数	2	69.87		12	75.02	3.10	4	76.47	4.63	1	75.44
17/8	頭蓋幅高示数	2	[96.75]		14	96.10	3.89	4	94.58	1.35	1	[99.23]
14&17/3	頭蓋モズルス	2	[155.33]		8	150.92	2.23	4	151.50	1.93	1	[143.33]
23.	頭蓋水平周	—	—		8	512.75	8.76	2	513.50		1	499
24.	横弧長	—	—		19	308.81	8.38	5	310.00	12.71	—	—
25.	正中矢状弧長	2	384.00		8	371.63	9.04	—	—		—	—

一方、女性の脳頭蓋の比較を表4で行なった。頭蓋最大長は立切古墳人と大萩古墳人よりは長く、旭台古墳人よりは短く、広畑古墳人と大差ない。頭蓋最大幅は広畑、立切古墳人よりは広いが、大萩、旭台古墳人とは大きな差はない。バジオン・ブレジマ高は立切、大萩古墳人よりは高いが、広畑、旭台古墳人と一致している。頭蓋幅高示数は旭台、広畑古墳人よりは大きく、立切古墳人の平均値に一致している。また、頭蓋長高示数は表4では最も大きく、頭蓋幅高示数は大萩古墳人よりは大きい、立切、広畑古墳人よりは小さい。すなわち、女性の脳頭蓋は、頭型は短頭傾いた中頭型に属し、頭の高さもやや高い頭蓋である。

表4 脳頭蓋計測値(女性、mm)

(Table4. Comparison of female calvarial measurements and indices)

	東二原 古墳人		立切 古墳人 (松下・他)		広畑 古墳人 (佐伯・他)		大萩 古墳人 (松下)		旭台 古墳人 (松下・他)	
	n	M	n	M	σ	n	M	σ	n	M
1.	頭蓋最大長	3 175.33	6 171.50	5.79	4 176.25	6.02	2 173.50	2 179.50	2 179.50	
8.	頭蓋最大幅	2 142.50	9 138.00	4.30	5 [135.20]	2.28	2 144.00	1 140	1 140	
17.	バジオン・ブレジマ高	1 133	8 129.50	4.11	4 133.00	5.23	3 129.33	2 133.00	2 133.00	
8/1	頭蓋長幅示数	2 79.66	4 79.14	4.07	4 [77.51]	1.82	—	1 (76.63)	—	
17/1	頭蓋長高示数	1 76.44	5 74.73	2.18	4 74.10	3.12	2 74.07	1 72.57	—	
17/8	頭蓋幅高示数	1 53.66	5 95.00	3.81	4 [97.76]	3.13	1 89.73	—	—	
1+8+17/3	頭蓋モジュール	1 149.67	4 148.00	1.79	4 [148.42]	4.03	—	—	—	
23.	頭蓋水平角	1 535	3 503.00	—	—	—	—	—	—	
24.	頭蓋長	2 305.50	6 304.83	7.87	—	—	1 321	1 304	—	
25.	正中矢状角長	—	2 353.00	—	2 378.50	—	3 355.50	1 360	—	

(2) 顔面頭蓋

男性の顔面頭蓋の計測値は、頬骨弓幅が [139.00]mm (8例)、中顔幅は100.33mm (3例)、顔高は116.43mm (7例)、上顔高は65.17mm (6例)で、顔示数は [84.02] (K) (7例)、117.65 (V) (3例)、上顔示数は [47.58] (K) (8例)、66.79 (V) (3例)となり、顔面には「低・広顔」傾向が認められる。

眼窩幅は42.50mm (右) (8例)、42.33 (左) (6例)、眼窩高は32.71mm (右) (7例)、33.20mm (左) (5例)で、眼窩示数は76.89 (右) (7例)、78.79 (左)となり、両側ともmesokonch(中眼窩)に属している。

鼻幅は26.89mm (9例)、鼻高は48.67mm (9例)で、鼻示数は55.34(9例)となり、chamaerthin (低鼻)に属している。

鼻根部の計測値は、前眼窩間幅が19.33mm (9例)、鼻根横径長は23.43mm (7例)、鼻根彎曲示数は82.33 (7例)となり、鼻根部は扁平である。両眼窩間幅は100.25mm (4例)で、眼窩間示数は20.22 (4例)となり、顔の幅に対して、眼窩間幅がやや広い。鼻骨最小幅は8.86mm (7例)で、前頭突起水平傾斜角は84度 (1例)を示し、前頭突起の向きは矢状方向である。鼻根角は136.00

度（2例）、鼻根陥凹示数は19.33（2例）である。

側面角は、全側面角が83.67度（6例）、鼻側面角が87.17度（6例）、齒槽側面角は72.67度（6例）で、齒槽性突顎の傾向は弱い。

一方、女性の顔面頭蓋の計測値は、頬骨弓幅が[136.67]mm（3例）、中顔幅は102.33mm（3例）、顔高は105.00mm（3例）、上顔高は61.67mm（3例）である。顔示数は[76.92]（K）（3例）、102.60（V）（3例）、上顔示数は[45.22]（K）（3例）、60.28（V）（3例）となり、顔面には著しい「低・広顔」傾向が認められる。

眼窩幅は42.00mm（右）（3例）、42.00mm（左）（3例）、眼窩高は33.67mm（右）（3例）、33.33mm（左）（3例）で、眼窩示数は80.21（右）（3例）、79.40（左）（3例）となり、両側ともmesokonch（中眼窩）に属している。

鼻幅は29.00mm（3例）、鼻高は49.33mm（3例）で、鼻示数は58.83（3例）となり、hyperchamaerhin（過低鼻）に属している。

鼻根部の計測値は、前眼窩間幅が22.33mm（3例）、鼻根横弧長は25.67mm（3例）、鼻根彎曲示数は87.07（3例）となり、鼻根部はやや扁平である。両眼窩幅は102.00mm（3例）で、眼窩間示数は21.88（3例）となり、顔の幅に対して、眼窩間幅がわずかに広い。鼻骨最小幅は12.67mm（3例）で、前頭突起水平傾斜角は79.50度（2例）を示し、前頭突起の向きは矢状方向である。鼻根角は148.50度（2例）、鼻根陥凹示数は11.70（2例）である。

側面角は、全側面角が81.33度（3例）、鼻側面角が85.00度（3例）、齒槽側面角は68.67度（3例）で、弱い齒槽性突顎の傾向が認められる。

次いで、南九州での比較を行なってみた。まず、男性であるが、表5に示しているように、頬骨弓幅は宮崎平野部Ⅱ古墳人よりは広いが、南九州山間部古墳人と宮崎平野部Ⅰ古墳人とは大差ない。中顔幅についてもこの両者と大差ない。顔高は宮崎平野部Ⅰ古墳人と宮崎平野部Ⅱ古墳人よりは低い、南九州山間部古墳人よりは高い。上顔高も宮崎平野部ⅠおよびⅡ古墳人よりは低く、南九州山間部古墳人と大差ない。顔示数は宮崎平野部ⅠおよびⅡ古墳人と南九州山間部古墳人との中間値を示し、上顔示数は南九州山間部古墳人よりは大きく、宮崎平野部Ⅰ古墳人の値に近い。

眼窩示数は宮崎平野部Ⅱ古墳人と南九州山間部古墳人よりも大きく、宮崎平野部Ⅰ古墳人に近い。また、鼻示数は宮崎平野部ⅠおよびⅡ古墳人よりは大きく、南九州山間部古墳人の値にほぼ一致しており、低鼻傾向が強い。

また、齒槽側面角は宮崎平野部Ⅱ古墳人よりは小さく、南九州山間部古墳人と宮崎平野部Ⅰ古墳人よりもやや大きく、齒槽性突顎の傾向は弱い。

表5 顔面頭蓋計測値(男性、mm、度)

(Table5. Comparison of male facial measurements and indices)													
		東二原			南九州山間部			宮崎半群部I			宮崎半群部II		
		古墳人			古墳人			古墳人			古墳人		
		n	M	σ	n	M	σ	n	M	σ	n	M	σ
40.	顔長	4	100.50	5.07	17	100.94	6.35	3	94.33		1	102	
45.	頬骨弓幅	8	[139.00]	2.39	10	139.80	5.01	1	138		1	[134]	
46.	中顔幅	3	100.33		19	101.90	4.70	1	98			—	
47.	顔高	7	116.43	5.53	22	114.18	4.70	2	120.50		1	124	
48.	上顔高	6	65.17	2.71	29	64.03	2.64	5	68.00	4.06	1	72	
47/45	顔示数(K)	7	[84.02]	3.74	8	81.32	3.41	1	89.13		1	[92.54]	
48/45	上顔示数(K)	8	[47.58]	2.34	8	45.32	1.98	1	47.83		1	[53.73]	
47/46	顔示数(V)	3	117.65		15	112.03	6.59	1	115.51			—	
48/46	上顔示数(V)	3	66.79		15	62.58	3.10	1	67.35			—	
40+45+47/3	顔面モズルス	4	[118.25]	2.60	6	115.56	3.25	1	114.67			—	
51.	眼窩幅(左)	6	42.33	1.86	25	43.04	1.51	4	42.00	1.83	1	45(右)	
52.	眼窩高(左)	5	33.20	1.64	33	32.61	1.48	4	33.25	1.71	1	33(右)	
52/51	眼窩示数(左)	5	78.79	4.74	25	75.35	2.92	4	79.15	1.21	1	73.33(右)	
54.	鼻幅	9	26.89	1.62	34	27.50	1.78	5	25.40	1.14	1	28	
54/55	鼻高	9	48.67	2.25	35	49.44	2.66	6	52.00	4.20	1	52	
	鼻示数	9	55.34	2.87	32	55.67	4.19	5	49.58	2.75	1	51.85	
72.	全側面角	6	83.67	3.01	27	83.46	4.33	3	83.33		1	82	
73.	鼻側面角	6	27.17	4.67	30	27.42	5.58	5	28.60	5.46	1	25	
74.	歯槽側面角	6	72.67	2.66	27	68.44	7.14	3	69.00		1	76	

一方、女性では表6に示しているように、頬骨弓幅と中顔幅は最も広く、顔高は大森、旭台古墳人よりは低く、立切、広畑古墳人と大差ない。上顔高は比較的用いた4群の古墳人とは大差なく、低顔傾向が認められる。顔示数は表6ではかなり小さい方に属し、コルマンの顔示数は表6では最小値を示し、ウィルヒョーの顔示数は立切古墳人と大差なく、コルマンの上顔示数も表6では最小値を示しており、ウィルヒョーの顔示数は比較資料と大差ない。すなわち、本女性の顔面には強い低・広顔傾向が認められる。

眼窩示数は旭台古墳人よりは小さく、その他の資料と大差なく、鼻示数は表6では最大値を示し、低鼻の傾向が著しく強い。歯槽側面角は旭台古墳人よりは大きく、立切、広畑、大森古墳人よりはわずかに小さい値で、弱い歯槽性突顎の傾向が認められる。

表6 顔面頭蓋計測値(女性、mm、度)

(Table 6. Comparison of female facial measurements and indices)

		東二原 古墳人		立 切 古墳人 (松下・他)		広 畑 古墳人 (佐伯・他)		大 塚 古墳人 (内藤)		旭 台 古墳人 (松下・他)			
		n	M	n	M	σ	n	M	σ	n	M	n	M
40.	顔 長	1	97	9	99.00	8.65	3	96.33		3	100.67	1	95
45.	頬骨弓幅	1	144	9	132.33	3.67	6	[131.00]	5.48		—		—
46.	中顔幅	3	102.33	12	98.33	4.75	6	[98.33]	8.39	2	87.50	2	101.00
47.	顔高	3	105.00	5	103.40	3.97	3	104.67		3	109.33	3	109.67
48.	上顔高	3	61.67	15	60.67	4.79	6	61.00	1.55	4	59.50	2	62.00
47/45	顔示数(K)	1	72.92	3	75.80		3	[78.53]			—		—
48/45	上顔示数(K)	1	41.67	8	45.61	3.08	6	[46.62]	1.89		—		—
47/46	顔示数(V)	3	102.60	5	102.50	4.23	3	[104.52]		1	105.83	2	107.44
48/46	上顔示数(V)	3	60.28	11	61.56	5.23	6	[62.26]	4.12	1	59.78	2	61.39
40+45+47/3	顔面モジュール	1	[114.00]	3	110.89		2	[111.00]			—		—
51.	眼窩幅(左)	3	42.00	15	41.67	1.45	3	41.33		3	41.00	3	40.33
52.	眼窩高(左)	3	33.33	15	32.80	1.42	4	33.00	1.41	3	31.67	2	33.00
52/51	眼窩示数(左)	3	79.40	14	78.91	3.51	3	80.07		2	77.30	2	84.61
54.	鼻幅	3	29.00	17	28.29	1.61	6	28.67	2.56	4	26.00	4	26.75
55.	鼻高	3	49.33	16	45.50	3.16	5	46.40	1.14	5	47.00	2	49.00
54/55	鼻示数	3	58.83	16	57.52	4.65	5	57.75	5.20	4	55.57	2	55.47
72.	全側面角	3	81.33	13	83.38	3.33	5	81.20	2.95	4	84.25	2	80.00
73.	鼻側面角	3	85.00	14	87.66	3.03	4	85.00	4.55	3	89.00	3	85.67
74.	歯槽側面角	3	68.67	13	71.82	6.87	4	70.25	7.50	3	73.33	2	63.00

2. 四肢骨

(1) 上腕骨

男性の計測値は、中央最大径が21.33mm(右)(6例)、22.00mm(左)(2例)、中央最小径は16.50mm(右)(6例)、16.50mm(左)(2例)で、骨体断面示数は77.36(右)(6例)、74.85(左)(2例)となり、左側骨体は扁平であるが、右側の扁平性は弱い。骨体最小周は58.00mm(左)(4例)、59.50mm(左)(2例)、中央周は62.67mm(右)(6例)、64.00mm(左)(2例)で、骨体はやや細い。

女性の計測値は、最大径が272mm(左)(1例)、骨体最小周は54mm(左)(1例)、中央周は58mm(左)(1例)で、長厚示数は19.85(左)(1例)である。また、中央最大径は20mm(左)(1例)、中央最小径15mm(左)(1例)で、骨体断面示数は75.00(左)(1例)となり、骨体の扁平性は弱い。

次いで、頭蓋と同じように他の古墳人と比較してみた。男性の中央周は広畑、旭台、大塚古墳人より小さく、立切古墳人の平均値に一致し、骨体最小周は旭台古墳人よりやや小さく、その他の資料とは人差ない(表7)。骨体断面示数は表7ではもっとも大きく、扁平性は他の古墳人よりは弱い。

表7 上腕骨計測値(男性、右、mm)

(Table 7. Measurements and indices of male right humeri)

		東二原		立 切			広 畑		大 萩		旭 台		
		古墳人		古墳人			古墳人		古墳人		古墳人		
		n	M	(松下・他)			(佐伯・他)		(松下)		(松下・他)		
5.	中央最大径	6	21.33	1.37	6	22.33	1.63	1	25	3	22.33	4	23.50
6.	中央最小径	6	16.50	1.54	6	16.00	1.26	1	15	3	16.67	4	17.50
7.	骨体最小径	4	54.00	1.83	7	59.00	3.16	1	58(左)	3	57.00	4	61.25
7(a).	中央 周	6	62.67	2.42	6	62.67	4.08	1	69	3	65.33	4	66.75
6/5	骨体断面示数	6	77.36	5.97	6	71.63	1.40	1	60.00	3	74.71	4	74.37

一方、女性の上腕骨最大長は旭台古墳人よりは長い、立切古墳人よりは短く、長さは短い(表8)。中央周は立切、広畑、大萩、旭台古墳人と大差なく、最小径は大萩古墳人より小さく、その他の資料とは大差ない。骨体断面示数は旭台古墳人に次いで大きく、骨体の扁平性は弱い。

表8 上腕骨計測値(女性、右、mm)

(Table 8. Measurements and indices of female right humeri)

		東二原		立 切			広 畑		大 萩		旭 台			
		古墳人		古墳人			古墳人		古墳人		古墳人			
		n	M	(松下・他)			(佐伯・他)		(松下)		(松下・他)			
1.	上腕骨最大長	1	272	(左)	1	281					1	263		
5.	中央最大径	1	20	(左)	9	20.00	1.73	1	21.50(左)	1	23	4	20.00	0.82
6.	中央最小径	1	15	(左)	9	14.67	1.80	1	15.90(左)	1	16	4	16.50	1.00
7.	骨体最小径	1	54	(左)	8	54.00	2.51			1	58	2	54.00	
7(a).	中央 周	1	58	(左)	8	57.83	3.34	1	61.50(左)	1	67	4	58.00	1.41
6/5	骨体断面示数	1	75.00	(左)	9	73.51	3.85	1	70.11(左)	1	65.22	4	77.47	3.08

(2) 大腿骨

男性の計測値は、最大長が415.00mm(右)(3例)、骨体中央周は80.33mm(右)(6例)、83.38mm(左)(8例)で、右側の骨体は細い。骨体中央矢状径は26.83mm(右)(6例)、28.63mm(左)(8例)、横径は23.83mm(右)(6例)、24.22mm(左)(9例)で、骨体中央断面示数は112.75(右)(6例)、118.19(左)(8例)となり、粗線や骨体両側面の後方への発達は良好である。また、上骨体断面示数は83.83(右)(5例)、85.96(左)(2例)となり、骨体上部の扁平性は弱い。

女性の計測値は、最大長が289.00mm(右)(2例)、骨体中央周は74.00mm(右)(4例)、73.00mm(左)(3例)で、骨体は細い。骨体中央矢状径は24.75mm(右)(4例)、24.00mm(左)(3例)、横径は22.50mm(右)(4例)、22.67mm(左)(3例)で、骨体中央断面示数は109.90(右)(4例)、105.95(左)(3例)となり、粗線や骨体両側面の後方への発達はやや良好な方である。また、上骨体断面示数は80.00(右)(1例)、75.58(左)(3例)となり、骨体上部は男性とは異なり扁平である。

次いで、他の資料と比較してみた。男性の最大長は表9の中では最も長く、立切、大萩古墳人より長い(表9)。骨体中央周は旭台古墳人よりかなり小さく、また、大萩、立切古墳人よりも小さく、広畑古墳人の平均値に近い。骨体中央断面示数は立切古墳人よりは小さいが、その他の古墳人よりは大きい。また、上骨体断面示数は表9では最も大きな値となり、骨体上部の扁平性は弱い。すなわち、男性大腿骨は長さはやや長く、骨体は細いが、粗線や骨体両側面の後方への発達は良好で、骨体上部の扁平性は弱い大腿骨である。

表9 大腿骨計測値(男性、右、mm)

(Table9. Comparison of measurements and indices of male right femora)

	室二原 古墳人			立切 古墳人 (松下・他)			広畑 古墳人 (佐伯・他)			大萩 古墳人 (松下)			旭台 古墳人 (松下・他)		
	n	M	σ	n	M	σ	n	M	σ	n	M	σ	n	M	σ
1. 最大長	2	289.00		2	299.90(左)		—			—			1	275(左)	
6. 骨体中央矢状径	4	24.75	2.06	13	23.92	1.81	4	25.75(左)	2.75	4	24.75	1.50	5	24.80	1.30
7. 骨体中央横径	4	22.50	1.29	13	22.31	1.33	4	25.25(左)	1.89	4	23.50	1.73	5	24.40	2.07
8. 骨体中央周	4	74.00	4.55	13	73.85	3.48	4	79.50(左)	6.14	4	77.00	4.03	5	78.20	4.32
9. 骨体上横径	3	27.33(左)		10	27.50	1.71	1	25			4	27.75	2.22	3	27.00
10. 骨体上矢状径	3	20.87(左)		10	20.30	2.00	1	20			4	21.75	1.26	3	21.47
6/7 骨体中央断面示数	4	109.50	4.02	13	101.58	8.30	4	100.02(左)	8.50	4	105.62		5	102.12	8.78
10/9 上骨体断面示数	3	75.58(左)		11	74.12	4.59	1	80.00			4	78.59		3	80.41

一方、女性の最大長は旭台古墳人よりは長いが、立切古墳人よりは短く、骨体中央周は広畑、旭台、大萩古墳人より小さく、立切古墳人の値に近い。骨体中央断面示数は表10では最も大きな値となり、粗線や骨体両側面の後方への発達はやや良好である。また、上骨体断面示数は広畑、大萩、旭台古墳人よりも小さく、立切古墳人に近く、骨体上部は扁平である。すなわち、女性大腿骨は長さが短く、骨体は細く、粗線や骨体両側面の後方への発達はやや良好で、骨体上部が扁平な大腿骨である。

表10 大腿骨計測値(女性、mm) (Table10. Measurements and indices of female femora)

	室二原 古墳人			立切 古墳人 (松下・他)			広畑 古墳人 (佐伯・他)			大萩 古墳人 (松下・他)			旭台 古墳人 (松下・他)		
	n	M	σ	n	M	σ	n	M	σ	n	M	σ	n	M	σ
1. 最大長	3	415.00		2	399.40		—			2	410.00		—		
6. 骨体中央矢状径	5	26.83	1.47	15	28.90	1.81	6	26.83(左)	1.60	5	27.67	1.82	4	28.25	2.75
7. 骨体中央横径	6	23.82	1.60	15	24.00	1.25	6	24.83(左)	1.83	6	25.33	1.22	4	27.00	1.16
8. 骨体中央周	6	80.32	3.32	15	81.92	3.56	5	80.80(左)	3.77	6	82.35	2.82	4	87.75	4.92
9. 骨体上横径	5	28.40	1.82	5	29.00	0.71	1	28 (左)			2	29.50		2	31.00
10. 骨体上矢状径	5	22.80	1.04	4	24.25	1.71	1	22 (左)			2	22.50		2	25.00
6/7 骨体中央断面示数	6	112.75	4.97	15	116.85	8.03	5	108.41(左)	5.90	6	109.40	8.07	4	104.88	12.31
10/9 上骨体断面示数	5	83.82	3.67	4	82.92	6.18	1	78.57(左)			2	73.70		2	80.24

③ 脛骨

男性の計測値は、骨体周が80.50mm(右)(4例)、78.00mm(左)(5例)、最小周は71.50mm(右)(4例)、75mm(左)(1例)で、骨体は細い。中央最大径は29.50mm(右)(4例)、28.60mm(左)(5例)、中央横径は21.00mm(右)(6例)、20.80mm(左)(5例)で、中央断面示数は73.85(右)(4例)、72.90(左)(5例)となり、骨体には扁平性は認められない。

女性の計測値は、脛骨最大長が309mm(右)(1例)、骨体周は68.75mm(右)(4例)、69.67mm(左)(3例)、最小周は63.00mm(右)(4例)、62.50mm(左)(4例)で、骨体は細い。中央最大径は24.25mm(右)(4例)、24.67mm(左)(3例)、中央横径は19.00mm(右)(4例)、19.33mm(左)(3例)で、中央断面示数は78.49(右)(4例)、78.56(左)(3例)と、かなり大きな示数値となり、骨体には扁平性はまったく認められない。

次いで、他の古墳人と比較してみた(表11)。男性の骨体周は旭台古墳人よりも小さいが、立切、広畑、大萩古墳人よりは大きい。最小周は入藪、旭台古墳人より小さく、立切、広畑古墳人と大差ない。中央断面示数は立切、広畑、大萩古墳人より大きく、旭台古墳人の平均値に近い。

表11 脛骨計測値(mm) (Table 11. Measurements and indices of male right tibiae)

	東二原 古墳人			立切 古墳人 (松下・他)			広畑 古墳人 (松下・他)			大萩 古墳人 (松下・他)			旭台 古墳人 (松下・他)			
	n	M	σ	n	M	σ	n	M	σ	n	M	σ	n	M	σ	
8.	中央最大径	4	29.50	1.29	11	29.69	1.45	4	27.75(左)	2.25	4	29.00	1.16	4	30.25	
8a.	栄養孔位最大径	4	33.25	3.50	5	34.20	1.79	4	32.25(左)	2.53	3	32.00		3	33.00	
9.	中央横径	6	21.00	1.41	11	20.27	1.10	4	19.76(左)	0.98	4	20.25	1.29	4	22.50	
9a.	栄養孔位横径	4	21.75	1.71	4	22.50	1.29	4	21.25(左)	1.50	3	22.23		3	24.00	
10.	骨体周	4	80.50	2.65	11	77.91	3.47	4	76.69(左)	5.80	4	78.25	0.98	4	83.00	
10a.	栄養孔位周	4	87.25	3.46	4	90.50	4.04	3	84.33(左)		3	87.33		3	92.00	
10b.	最小周	4	71.50	3.51	4	70.50	4.50	3	72.00(左)		3	74.00		2	74.00	
9/8	中央断面示数	4	73.85	4.79	11	69.76	3.83	4	71.36(左)	3.90	4	69.94	4.88	4	74.55	
9a/8a	栄養孔位断面示数	4	65.65	6.72	4	65.82	4.63	3	66.35(左)		3	65.96		3	72.90	

一方、女性の最大長は立切古墳人よりは短く、骨体周は大萩古墳人より小さく、他の古墳人とは大差ない(表12)。最小周は旭台古墳人より小さく、他の資料とは大差ない。中央断面示数は表12中最大値となり、骨体には扁平性はまったく認められない。

3. 推定身長値

表33に示しているように、男性は2体、女性は3体の推定身長値を算出することができた。男性はPearsonの式を用いて大腿骨から算出した値が161.58cmと158.20cmで、1体は高身長値、残りの1体は低身長値である。一方、女性の値は大腿骨からの値が147.14cm、149.87cmでいずれも150cm以下の低身長値である。また、藤井の式を用いて脛骨から算出した女性の推定値は

表12 脛骨計測値 (女性、右、mm)

(Table 12. Comparison of measurements and indices of female right tibiae)

	東二原 古墳人			立 初 古 墳 人 (松下・他)			広 畑 古墳人 (佐伯・他)		大 萩 古墳人 (松下)		黒 倉 古 墳 人 (松下・他)		
	n	M	σ	n	M	σ	n	M	n	M	n	M	σ
1a. 脛骨最大長	1	309		2	318.50(左)		—	—	—	—	—	—	—
2. 脛骨間距幅	1	237		2	297.50		—	—	—	—	—	—	—
3. 中央最大径	4	24.25	1.50	8	25.38	1.51	1	26	2	26.50	4	24.75(左)	1.89
3a. 栄養孔位最大径	4	16.75	2.99	5	20.00	2.74	1	27	2	30.00	3	21.00	
3. 中央径	4	19.00	0.82	8	18.89	1.31	1	20	2	18.00	4	17.50(左)	1.00
3a. 栄養孔位径	4	10.00	0.82	5	19.20	1.92	1	21	2	21.50	3	21.67	
10. 骨 体 周	4	68.75	3.50	8	68.63	4.75	1	72	2	73.00	4	67.50(左)	3.70
10a. 栄養孔位周	4	74.75	4.35	5	77.40	6.31	1	75	2	75.50	3	83.67	
10b. 最 小 周	4	63.00	3.74	4	63.25	4.79	1	64	1	64	2	65.50(左)	
3/2 中央断面指数	4	78.49	4.02	8	70.94	3.03	1	76.92	2	68.15	4	71.01(左)	6.51
3a/1a 栄養孔位断面指数	4	75.42	8.48	5	66.30	4.71	1	77.78	2	71.67	3	69.84	

145.85cmとなり、これも低身長値である。すなわち、男性では高身長と低身長の両者が存在し、女性は低身長値であった。

要 約

宮崎県小林市大字真方に所在する東二原地下式横穴墓群の発掘調査が1990年に行なわれ、21体の古墳時代人骨が発掘された。小林市からの保存良好な古墳時代人骨の出土例は初めてである。人骨の観察や計測を行ない、次の結果を得た。

1. 本遺跡から出土した古墳時代人骨は合計21体で、このうち成人骨は20体で、残り1体は小児骨である。成人骨のうち、男性骨は13体、女性骨は5体で、その他に性別を明らかにできなかったものが2体あった。
2. この21体の人骨は、考古学的所見より、古墳時代後期に属する人骨群である。
3. 男性の脳頭蓋の計測値は、頭蓋最大長が187.80mm (5例)、頭蓋最大幅の推定値は [139.33] mm (3例)、バジオン・プレグマ高は134.75mm (4例)で、頭蓋長幅示数は [73.27] (3例)、頭蓋長高示数は69.87 (2例)、頭蓋幅高示数は [96.75] (2例)となり、頭型は長頭型である。
4. 女性の脳頭蓋の計測値は、頭蓋最大長が175.33mm (3例)、頭蓋最大幅は142.50mm (2例)、バジオン・プレグマ高は133mm (1例)で、頭蓋長幅示数は79.66 (2例)、頭蓋長高示数は76.44 (1例)、頭蓋幅高示数は93.66 (1例)となり、頭型は中頭型に属している。
5. 男女とも顔面頭蓋には「低・広顔」傾向が認められる。
6. 男性の眼窩は中眼窩に、鼻部は低鼻に属しており、女性の眼窩は中眼窩に、鼻部は過低鼻に

属している。

7. 男性は歯槽性突顎の傾向は弱く、女性は歯槽性突顎の傾向が認められる。
8. 上腕骨体の扁平性は男女とも弱いが、大腿骨の粗線や骨体両側面の後方への発達も男女とも良好で、とくに男性では柱状性がみられる。大腿骨の骨体上部の扁平性は女性は強いが、男性は弱い。また、脛骨体は男女とも扁平ではない。
9. 男性の推定身長値は161.58cmと158.20cmで、高身長と低身長とが存在し、女性の値は147.14cm、149.87cmで、いずれも150cm以下の低身長値である。
10. 本古墳人の男性の頭型は長頭型に、女性では男性に比べると短頭に傾いており、顔面は男女ともに「低・広顔」傾向が認められた。身長は女性は低身長であるが、男性には高身長を示すものが1例存在した。

謝 辞

撰筆するにあたり、本研究と発表の機会を与えていただいた宮崎県教育庁文化課、小林市教育委員会社会教育課の諸先生方に感謝致します。

*Takayuki MATSUSHITA

The Diogahama Site Anthropological Museum [土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアム]

**Kazunobu SAIKI

Department of Anatomy, Nagasaki University School of Medicine

[長崎大学医学部解剖学第二教室]

【参考文献】

1. Howelle, W. W, 1974: Cranial Variation in Man. Peabody Museum Papers, vol. 67.
2. Martin-Saller, 1957: Lehrbuch der Anthropologie. Bd. 1. Gustav Fisher Verlag, Stuttgart: 429-597.
3. 松下孝幸, 1981a: 日守地下式古墳出土の人骨。日守地下式古墳群発掘調査 (55-1-4号) (宮崎県文化財調査報告書23): 169-178, 182-183
4. 松下孝幸, 1981b: 宮崎県上の原地下式古墳出土の人骨。上の原地下式古墳群発掘調査 (宮崎県文化財調査報告書24): 114-129.
5. 松下孝幸, 分部哲秋, 1982a: 宮崎県国富町本庄28号地下式古墳出土の人骨。宮崎考古, 8: 16-20.
6. 松下孝幸, 分部哲秋, 石田肇, 佐熊正史, 1982b: 鹿児島県諏訪野地下式土壇3号出土の人骨。諏訪野地下式土壇3号 (大口市埋蔵文化財調査報告書2): 11-15.
7. 松下孝幸, 石田肇, 佐熊正史, 1983a: 鹿児島県成川遺跡出土の古墳時代人骨。成川遺跡 (鹿児島県埋蔵文化財調査報告書24): 236-261.
8. 松下孝幸, 野田耕一, 1983b: 宮崎県高原町旭台地下式横穴出土の古墳時代人骨。宮崎県文化財調査報告書, 26: 78-107.
9. 松下孝幸, 分部哲秋, 石田肇, 1983c: 宮崎県都城市菓子野地下式横穴出土の古墳時代人骨。都城・中之城跡, 菓子野地下式横穴 (都城市文化財調査報告書3): 105-145.
10. 松下孝幸, 分部哲秋, 石田肇, 内藤芳篤, 永井昌文, 1983d: 山口県豊浦郡豊北町土井ヶ浜遺跡出土の人骨。土井ヶ浜遺跡第7号発掘調査概報 (豊北町埋蔵文化財調査報告書2): 19-30.
11. 松下孝幸, 1984a: 宮崎県野尻町大萩地下式横穴出土の古墳時代人骨。宮崎県文化財調査報告書, 第27集: 53-111.
12. 松下孝幸, 1984b: 宮崎市跡江横穴出土の古墳時代人骨。宮崎考古, 第9号: 34-48.
13. 松下孝幸, 1984c: 川内市横岡古墳Ⅶ号墳出土の古墳時代人骨。外川江遺跡・横岡古墳高城川河川改修工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 (鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書00): 142-146.
14. 松下孝幸, 1984d: 鹿児島県大隅半島の古墳時代人骨。鹿児島考古, 第18号: 171-181.
15. 松下孝幸, 1984e: 鹿児島県大口市諏訪野地下式土壇5号墳出土の古墳時代人骨。諏訪野地下式土壇5号 (鹿児島県大口市埋蔵文化財発掘調査報告書3): 15-28.
16. 松下孝幸, 中谷昭二, 1986a: 宮崎県国富町市の瀬地下式横穴墓群出土の古墳時代人骨。国富町文化財資料, 第4集: 145-185.
17. 松下孝幸, 1986b: 鹿児島県串良町岡崎古墳群1号地下式横穴墳出土の古墳時代人骨。岡崎

- 4号墳・1号地下式横穴（串良町埋蔵文化財発掘調査報告書(1)）付篇：1-16。
18. 松下孝幸, 1987: 鹿児島県高山町塚崎古墳群出土の古墳時代人骨。鹿児島考古。第21集: 57-70。
 19. 松下孝幸, 1988: 宮崎県高崎町出土の古墳時代人骨。高崎町文化財調査報告書、第1集: 57-158。
 20. 松下孝幸, 1989 a: 宮崎県高崎町の古墳時代人骨。宮崎考古 石川恒太郎先生米寿記念特集号上巻: 90-117。
 21. 松下孝幸, 分部哲秋, 1989 b: 宮崎市柿木原地下式横穴墓出土の古墳時代人骨。柿木原地下式横穴墓56-1号・江田原第1遺跡（宮崎市文化財調査報告書）: 13-30。
 22. 松下孝幸, 1990 a: 鹿児島県宮の上地下式横穴墓出土の古墳時代人骨。宮崎考古24: 49-67。
 23. 松下孝幸, 1990 b: 南九州地域における古墳時代人骨の人類学的研究。長崎医学雑誌, 65(4): 781-804。
 24. 内藤芳篤, 1973: 灰塚地下式横穴人骨。灰塚遺跡(九州縦貫自動車道埋蔵文化財調査報告(2)): 72-77。
 25. 内藤芳篤, 1974: 人骨とその埋葬方法。大萩遺跡(1) (瀬戸ノロ地区特殊農地保全整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告): 55-62。
 26. 小片丘彦, 川路則友, 峰和治, 山本美代子, 岡本満子, 1986: 宮崎県菓子野地下式横穴出土の人骨。都城市文化財調査報告書、第4集: 47-66。
 27. 佐伯和信, 松下孝幸, 折原義行, 小山田常一, 1991: 宮崎県えびの市広畑遺跡出土の古墳時代人骨。広畑遺跡（えびの市文化財調査報告書第7集）: 1-66
 28. 鈴木尚, 1963: 日本人の骨。岩波書店、東京。

表13 頭頂骨計測値 (mm) (Calvaria)

	東二原	東二原	東二原	東二原	東二原	東二原
	2-1	6-3	8-2	8-3	11-1	11-3
	男性	男性	男性	男性	男性	男性
1. 頭蓋最大長	177	199	186	186	-	-
8. 頭蓋最大幅	-	[140]	[138]	[140]	-	-
17. バジオン・プレグマ高	-	139	130	-	140	-
8/1 頭蓋長幅率数	-	[70.35]	[74.19]	[75.27]	-	-
17/1 頭蓋長高率数	-	69.85	69.89	-	-	-
17/8 頭蓋幅高率数	-	[99.29]	[94.20]	-	-	-
頭蓋モズルス	-	[160.33]	[151.33]	-	-	-
5. 頭蓋底長	-	101	102	109	99	-
9. 最小前頭幅	-	-	83	-	100	-
10 最大前頭幅	-	-	111	-	-	124
11. 両耳幅	-	-	-	181	-	-
12. 最大後頭幅	-	115	-	115	-	-
13. 乳突幅	-	-	-	-	-	-
7. 大後頭孔長	-	34	38	36	-	-
16. 大後頭孔幅	-	31	30	30	-	-
16/7 大後頭示数	-	91.18	78.95	83.33	-	-
23. 頭蓋水平度	-	-	-	-	-	-
24. 横弧長	-	-	-	-	-	-
25. 正中矢状弧長	-	404	364	-	-	-
26. 正中矢状前額弧長	-	135	121	-	132	133
27. 正中矢状頭頂弧長	-	130	123	-	-	-
28. 正中矢状後額弧長	-	138	120	119	-	-
29. 正中矢状前額弦長	-	117	110	-	113	114
30. 正中矢状頭頂弦長	-	120	112	-	-	-
31. 正中矢状後額弦長	-	110	96	100	-	-
29/25 矢状前額示数	-	86.67	90.91	-	85.61	85.71
30/27 矢状頭頂示数	-	92.31	91.06	-	-	-
31/28 矢状後額示数	-	79.14	80.00	84.03	-	-
Vertex Rad.	-	-	-	-	-	-
Nasion Rad.	-	-	-	95	-	-
Subsp. Rad.	-	-	-	93	-	-
Proath. Rad.	-	-	-	99	-	-

〔 〕=片側×2

表13 続き (Continued)

	東二原	東二原	東二原	東二原			東二原	
	11-4	11-5	16-2	平均			平均	
	男性	男性	男性	n	M	σ	n	[M] σ
1. 頭蓋最大長	—	—	191	5	137.80	8.04		
8. 頭蓋最大幅	—	—	—	—	—	—	3	(139.33)
17. バジオン・プレグマ高	130	—	—	4	134.75	5.50		
3/1 頭蓋長幅示数	—	—	—	—	—	—	3	(73.37)
17/1 頭蓋長高示数	—	—	—	2	69.87	—		
17/8 頭蓋高示数	—	—	—	—	—	—	2	(96.75)
頭蓋モズルス	—	—	—	—	—	—	2	(155.33)
5. 頭蓋蓋長	103	—	—	5	102.80	3.77		
9. 最小前頭幅	99	91	—	4	95.75	4.43		
10 最大前頭幅	118	—	—	3	117.67	—		
11. 両耳幅	—	—	—	1	131	—		
12. 最大後頭幅	—	—	—	2	115.00	—		
13. 乳突幅	—	—	—	—	—	—		
7. 大後頭孔長	—	—	—	3	36.00	—		
16. 大後頭孔幅	—	—	—	3	30.33	—		
16/7 大後頭示数	—	—	—	3	84.49	—		
23. 頭蓋水平周	—	—	—	—	—	—		
24. 横弧長	—	—	—	—	—	—		
25. 正中矢状弧長	—	—	—	2	394.00	—		
26. 正中矢状前頭弧長	122	—	—	5	128.50	6.58		
27. 正中矢状頭頂弧長	—	—	—	2	126.50	—		
28. 正中矢状後頭弧長	—	—	—	3	126.00	—		
29. 正中矢状前頭弧長	107	—	—	5	112.20	3.83		
30. 正中矢状頭頂弧長	—	—	—	2	116.00	—		
31. 正中矢状後頭弧長	—	—	—	3	102.00	—		
29/26 矢状前頭示数	87.70	—	—	5	87.32	2.18		
30/27 矢状頭頂示数	—	—	—	2	91.68	—		
31/28 矢状後頭示数	—	—	—	3	81.06	—		
Vortex Rad.	—	—	—	—	—	—		
Nasion Rad.	—	—	—	1	95	—		
Subsp. Rad.	—	—	—	1	93	—		
Prosth. Rad.	—	—	—	1	99	—		

[M] = []を含めた平均値

表14 脳頭蓋計測値 (mm) (Calvaria)

	東二原	東二原	東二原	東二原
	2-2	2-4	8-1	平均
	女性	女性	女性	女性
			n	M
1. 頭蓋最大長	168	174	164	3 175.33
2. 頭蓋最大幅	—	142	145	2 142.50
17. バジオン・プレグマ高	—	133	—	1 133
8/1 頭蓋長幅示数	—	81.81	77.72	2 79.66
17/1 頭蓋長高示数	—	76.44	—	1 76.44
17/8 頭蓋幅高示数	—	93.66	—	1 93.66
頭蓋モズルス	—	149.67	—	1 149.67
5. 頭蓋底長	—	99	—	1 99
9. 最小前頭幅	—	95	102	2 98.50
10 最大前頭幅	—	114	118	2 116.00
11. 両耳幅	—	127	135	2 131.00
12. 最大後頭幅	—	—	—	—
13. 乳突幅	—	—	—	—
7. 大後頭孔長	—	—	—	—
16. 大後頭孔幅	—	—	—	—
16/7 大後頭示数	—	—	—	—
23. 頭蓋水平周	—	—	535	1 535
24. 横頸長	—	304	307	2 305.50
25. 正中矢状弧長	—	—	—	—
26. 正中矢状前頭弧長	114	110	128	3 120.67
27. 正中矢状頭頂弧長	—	131	129	2 130.00
28. 正中矢状後頭弧長	—	—	—	—
29. 正中矢状前頭隆長	101	107	112	3 106.67
30. 正中矢状頭頂隆長	—	117	116	2 116.50
31. 正中矢状後頭隆長	—	—	—	—
29/26 矢状前頭示数	88.60	89.17	87.50	3 88.43
30/27 矢状頭頂示数	—	89.31	89.92	2 89.62
31/28 矢状後頭示数	—	—	—	—
Vertex Rad.	—	—	126	1 126
asion Rad.	—	—	95	1 95
Subsp. Rad.	—	—	93	1 93
Prosth. Rad.	—	—	99	1 99

表15 顔面測量計測値 (mm, 度) (Facial skeleton)

	東二原	東二原	東二原	東二原	東二原	東二原
	2-1	6-1	6-2	6-3	8-2	8-3
	男性	男性	男性	男性	男性	男性
40. 顔長	—	—	—	102	—	104
41. 側顔長	(73)	—	(72)	70	73	76
42. 下顔長	—	—	—	108	112	110
43. 上顎幅	—	—	—	—	101	104
45. 頬骨弓幅	[142]	—	—	[134]	[138]	[140]
46. 中顔幅	[100]	—	—	[96]	[100]	97
47. 顔高	—	—	—	105	125	116
48. 上顔高	(69)	—	—	62	(72)	65
47/45 顔示数(K)	—	—	—	[81.34]	[90.58]	[82.86]
48/45 上顔示数(K)	[46.48]	—	—	[46.27]	[52.17]	[46.43]
47/46 顔示数(V)	—	—	—	[112.54]	[125.00]	119.58
48/46 上顔示数(V)	[66.00]	—	—	[64.56]	[72.00]	67.01
顔面モズルス	—	—	—	[115.00]	—	[120.00]
50. 前眼窩間幅	20	19	—	17	19	22
44. 内眼窩幅	—	—	—	—	—	96
50/44 眼窩間示数	—	—	—	—	—	22.92
51. 眼窩幅(右)	42	41	46	—	—	38
(左)	—	—	—	44	42	39
52. 眼窩高(右)	32	—	31	—	—	33
(左)	—	—	—	31	34	32
52/51 眼窩示数(右)	76.19	—	67.39	—	—	86.84
(左)	—	—	—	70.45	80.95	82.05
54. 鼻幅	27	30	—	27	27	27
55. 鼻高	48	48	—	47	51	49
54/55 鼻示数	56.25	62.50	—	57.45	52.94	55.10
55(1). 梨状口高	—	—	—	30	—	31
56. 鼻骨長	—	—	—	18	—	22
57. 鼻骨最小幅	8	10	—	7	10	14
57(1). 鼻骨最大幅	—	—	—	18	—	20
60. 上顎歯槽長	—	—	—	57	—	53
61. 上顎歯槽幅	—	—	—	65	—	66
62. 口蓋長	46	—	—	48	47	43
63. 口蓋幅	—	—	—	37	—	39
64. 口蓋高	—	—	—	9	—	12
61/60 上顎歯槽示数	—	—	—	114.04	—	124.53
63/62 口蓋示数	—	—	—	77.08	—	90.70
64/63 口蓋高示数	—	—	—	24.32	—	30.77
72. 全側面角	82	—	—	80	—	86
73. 鼻側面角	84	—	—	82	—	90
74. 齒槽側面角	76	—	—	73	—	74

[] = 片側×2, () = 確定値

表15 続表 (Continued)

	東二原		東二原		東二原		東二原		東二原	
	11-1		11-3		11-4		11-5		平均	
	男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性	女性	n	σ
40. 顔長	93	—	103	—	4	100.50	5.07			
41. 側顔長	73	72	72	(74)	6	72.67	1.97	8	(72.78)	1.64
42. 下顔長	109	—	111	—	5	110.00	1.58			
43. 上顎幅	107	—	109	—	4	105.25	3.50			
45. 頬骨弓幅	[140]	[140]	[140]	[138]		—		8	[139.00]	2.39
46. 中顔幅	103	[100]	101	[100]	3	100.33		8	[99.63]	2.20
47. 顔高	119	110	119	117	7	116.43	5.53			
48. 上顔高	68	62	68	66	6	65.17	2.71	8	(66.13)	3.31
47/45 顔示数(K)	[85.00]	[76.57]	[85.00]	[84.78]		—		7	[84.02]	3.74
48/45 上顔示数(K)	[48.57]	[44.29]	[48.57]	[47.63]		—		8	[47.58]	2.34
47/46 顔示数(V)	115.53	[110.00]	117.82	[117.00]	3	117.65		7	[116.93]	4.73
48/46 上顔示数(V)	66.02	[62.00]	67.33	[66.00]	3	66.79		8	[66.37]	2.82
顔面モズルス	[117.33]	—	[120.67]	—		—		4	[118.25]	2.80
50. 前歯間幅	18	20	21	18	9	19.33	1.53			
44. 両眼間幅	95	103	104	—	4	100.25	3.86			
50/44 眼窩間示数	18.37	19.42	20.19	—	4	20.22	1.95			
51. 眼窩幅(右)	42	44	45	42	8	42.50	2.51			
(左)	42	43	44	—	6	42.33	1.86			
52. 眼窩高(右)	34	32	34	33	7	32.71	1.11			
(左)	34		35	—	5	33.20	1.64			
52/51 眼窩示数(右)	80.95	72.73	75.56	78.57	7	76.89	6.17			
(左)	80.95	—	79.55	—	5	78.79	4.74			
54. 鼻幅	26	24	28	26	9	26.89	1.62			
55. 鼻高	48	45	48	53	9	48.67	2.29			
54/55 鼻示数	53.06	53.33	58.33	49.08	9	55.34	3.87			
55(1). 梨状口高	—	—	—	—	2	30.50				
56. 鼻骨長	—	—	—	—	2	20.00				
57. 鼻骨最小幅	8	5	—	—	7	8.86	2.85			
57(1). 鼻骨最大幅	—	—	—	—	2	19.00				
60. 上顎歯槽長	50	53	57	—	5	54.00	3.00			
61. 上顎歯槽幅	66	65	66	69	6	66.17	1.47			
62. 口蓋長	42	48	50	40	8	45.50	3.46			
63. 口蓋幅	38	40	38	39	6	38.50	1.05			
64. 口蓋高	13	11	16	11	6	12.00	2.37			
61/60 上顎歯槽示数	132.00	122.64	115.79	—	5	121.80	7.22			
63/62 口蓋示数	50.48	53.33	76.00	97.50	6	65.85	8.50			
64/63 口蓋高示数	34.21	27.50	42.11	28.21	6	31.19	6.29			
72. 全側面角	86	81	87	—	6	83.67	3.01			
73. 鼻側面角	92	83	92	—	6	87.17	4.67			
74. 齒槽側面角	68	73	72	—	6	72.67	2.66			

[M]=[], ()を含めた平均値

表16 顔面頭蓋計測値 (mm, 度) (Facial skeleton)

	東二原		東二原		東二原		東二原		東二原	
	2-2		2-4		8-1		平均		平均	
	女性	女性	女性	女性	女性	女性	n	M	n	[M]
40. 顔長	—	97	—	—	1	97				
41. 側顔長	(72)	71	76	2	73.50	3	(73.00)			
42. 下顔長	—	101	—	1	101					
43. 上顔幅	107	107	112	3	108.67					
45. 頬骨弓幅	[130]	[136]	144	1	144	3	[136.67]			
46. 中顔幅	100	103	104	3	102.33					
47. 顔高	101	109	105	3	105.00					
48. 上顔高	61	64	60	3	61.67					
47/45 顔示数(K)	[77.69]	[80.15]	72.92	1	72.92	3	[76.92]			
48/45 上顔示数(K)	[46.92]	[47.06]	41.67	1	41.67	3	[45.22]			
47/46 顔示数(V)	101.00	105.83	100.96	3	102.60					
48/46 上顔示数(V)	81.00	82.14	57.69	3	60.28					
顔面モズルス	—	[114.00]	—	—	—	1	[114.00]			
50. 前眼窩間幅	21	22	24	3	22.33					
44. 内眼窩幅	100	101	105	3	102.00					
50/44 眼窩間示数	21.00	21.78	23.86	3	21.88					
51. 眼窩幅(右)	41	42	43	3	42.00					
(左)	43	41	42	3	42.00					
52. 眼窩高(右)	34	34	33	3	33.67					
(左)	34	34	32	3	33.33					
52/51 眼窩示数(右)	82.93	80.95	76.74	3	80.21					
(左)	79.07	82.92	76.19	3	79.46					
54. 鼻幅	28	29	30	3	29.00					
55. 鼻高	50	50	48	3	49.33					
54/55 鼻示数	56.00	58.00	62.50	3	58.83					
55(1). 梨状口高	28	—	31	2	29.50					
58. 鼻骨長	25	—	21	2	23.00					
57. 鼻骨最小幅	11	11	10	3	12.67					
57(1). 鼻骨最大幅	19	—	22	2	20.50					
60. 上顎歯槽長	66	52	50	3	56.00					
61. 上顎歯槽幅	—	—	61	1	61					
62. 口蓋長	—	—	46	1	46					
63. 口蓋幅	—	42	—	1	42					
64. 口蓋高	—	—	8	1	8					
61/60 上顎歯槽示数	—	—	122.00	1	122.00					
63/62 口蓋示数	—	—	—	—	—					
64/63 口蓋高示数	—	—	—	—	—					
72. 全側面角	76	83	85	3	81.33					
73. 鼻側面角	78	87	90	3	85.00					
74. 齒槽側面角	69	70	67	3	68.67					

[] = 片側×2, () = 推定値

[M] = [], () を含めた平均値

表17 鼻根距計測值(mm, 度) (Nasal root)

	東二原	東二原	東二原	東二原	東二原	東二原
	2-1	6-1	6-3	8-2	8-3	11-1
	男性	男性	男性	男性	男性	男性
50. 前額寬度	20	19	17	19	22	18
鼻根橫弧長	24	24	21	23	27	22
鼻根彎曲示數	83.33	79.17	80.95	82.61	81.48	81.82
57. 鼻骨最小幅	8	10	7	10	14	8
44. 眼眶寬度	—	—	—	—	36	38
50/44 眼眶開示數	—	—	—	—	22.92	18.37
a. 前額突起上幅(右)	11	10	12	9	8	9
(左)	12	10	12	10	7	9
b. 前額突起水平傾斜角	—	—	—	—	84	—
c. G-N投影距離	2	—	4	3	2	6
d. 鼻根角	—	—	134	—	138	—
e. G-R距離	—	—	28	—	29	—
f. 垂線高	—	—	5	—	5	—
f/e 鼻根輪回示數	—	—	21.43	—	17.24	—

表17 續查 (Continued)

	東二原	東二原	東二原	東二原		
	11-3	11-4	11-5	平均		
	男性	男性	男性	男性		
				n	M	σ
50. 前額寬度	20	21	18	9	19.33	1.58
鼻根橫弧長	23	—	—	7	23.43	1.90
鼻根彎曲示數	85.96	—	—	7	82.33	2.43
57. 鼻骨最小幅	5	—	—	7	8.86	2.85
44. 眼眶寬度	103	104	—	4	100.25	3.86
50/44 眼眶開示數	19.42	20.19	—	4	20.22	1.95
a. 前額突起上幅(右)	14	—	—	7	10.43	2.07
(左)	15	—	—	7	10.71	2.66
b. 前額突起水平傾斜角	—	—	—	1	84	—
c. G-N投影距離	5	5	—	7	3.85	1.57
d. 鼻根角	—	—	—	2	136.00	—
e. G-R距離	—	—	—	2	28.50	—
f. 垂線高	—	—	—	2	5.50	—
f/e 鼻根輪回示數	—	—	—	2	19.33	—

表18 鼻根部計測值(mm、度) (Nasal root)

	東二原	東二原	東二原	東二原
	2-2	2-4	8-1	平均
	女性	女性	女性	女性
			n M	
50. 前眼窩間幅	21	22	24	3 22.33
鼻根橫鄂長	24	25	28	3 25.67
鼻根彎曲示數	87.50	88.00	85.71	3 87.07
57. 鼻背最小幅	11	11	16	3 12.67
44. 眼眶窩幅	106	101	105	3 102.00
50/44 眼眶間示數	21.00	21.78	22.86	3 21.88
a. 前額突起上幅(右)	11	10	8	3 9.67
(左)	11	10	8	3 9.67
b. 前額突起水平傾斜角	—	81	78	2 79.50
c. G-N投影距離	-1	0	0	3 -0.33
d. 鼻傾角	155	—	142	2 148.50
e. G-R距離	32	—	35	2 33.50
f. 垂線高	2	—	6	2 4.00
f/e 鼻根輪凹示數	6.25	—	17.14	2 11.70

表19 下顎骨計測値 (mm, 度) (Mandible)

		東二原	東二原	東二原	東二原	東二原	東二原
		2-1	6-2	6-3	8-2	8-3	11-1
		男 性	男 性	男 性	男 性	男 性	男 性
65.	下顎關節突起幅	—	—	—	—	—	—
65(1).	下顎前突起幅	—	—	—	—	—	—
66.	下顎角幅	—	—	—	—	—	—
67.	前下顎幅	—	—	—	48	45	47
68.	下顎長	—	—	—	—	—	—
68(1).	下顎長	—	—	—	—	—	—
69.	オトガイ高	—	—	—	35	32	32
69(1).	下顎体高(右)	—	32	—	32	—	32
	(左)	—	—	28	32	29	33
69(2).	下顎体高(右)	—	28	—	—	—	—
	(左)	—	—	26	31	28	27
70.	枝 高(右)	—	—	—	—	—	—
	(左)	—	—	50	—	61	—
70(1).	前 枝 高(右)	—	—	—	—	—	—
	(左)	—	—	66	—	63	—
70(2).	最小枝高(右)	56	—	—	—	—	—
	(左)	—	—	55	52	51	48
70(3).	下顎切痕高(右)	—	15	—	—	—	—
	(左)	—	—	12	—	13	15
71.	枝 幅(右)	37	—	—	—	—	—
	(左)	—	—	33	36	41	—
71a.	最小枝幅(右)	37	—	—	—	—	—
	(左)	—	—	33	36	41	—
71(1).	下顎切痕幅(右)	—	35	—	—	—	—
	(左)	—	—	36	—	42	37
79.	下顎枝角(右)	—	—	—	—	—	—
	(左)	—	—	124	120	114	—
66/65	下顎幅示数	—	—	—	—	—	—
68/65	枝長示数	—	—	—	—	—	—
69(1)/65	枝長示数	—	—	—	—	—	—
69(2)/69	下顎高示数(右)	—	—	—	—	—	—
	(左)	—	—	—	88.57	87.50	84.38
71/70	下顎枝示数(右)	—	—	—	—	—	—
	(左)	—	—	55.00	—	67.21	—
71a/70(2)	下顎枝示数(右)	66.07	—	—	—	—	—
	(左)	—	—	60.00	69.23	60.39	—
70(3)/71(1)	下顎切痕示数(右)	—	42.86	—	—	—	—
	(左)	—	—	33.33	—	30.95	40.94
	下顎体厚(右)	—	11	—	13	—	15
	(左)	—	—	15	12	11	14

表19 続き (Continued)

		東二原	東二原	東二原	東二原			
		11-8	11-4	11-5	平均			
		男性	男性	男性	男 性			
						n	M	σ
65.	下顎関節突起幅	—	—	—	—			
65(1).	下顎筋突起幅	—	—	—	—			
66.	下顎角幅	—	—	—	—			
67.	前下顎幅	47	47	47	5	46.83	0.96	
68.	下顎長	—	—	—	—			
68(1).	下顎長	—	—	—	—			
69.	オトガイ高	32	37	33	5	33.50	2.07	
69(1).	下顎体高(右)	32	—	30	5	31.60	0.89	
	(左)	—	37	30	5	31.50	3.27	
69(2).	下顎体高(右)	25	—	—	2	26.50		
	(左)	—	28	—	5	28.00	1.87	
70.	枝 高(右)	—	—	—	—			
	(左)	—	59	—	3	60.00		
70(1).	前 枝 高(右)	—	—	—	—			
	(左)	—	63	—	3	64.00		
70(2).	最小枝高(右)	—	—	—	1	56		
	(左)	—	49	—	5	51.00	2.74	
70(3).	下顎切痕高(右)	14	—	—	2	14.50		
	(左)	—	14	—	4	13.50	1.29	
71.	枝 幅(右)	37	—	—	2	37.00		
	(左)	—	34	—	4	36.00	3.56	
71a.	最小枝幅(右)	37	—	—	2	37.00		
	(左)	—	34	—	4	36.00	3.56	
71(1).	下顎切痕幅(右)	37	—	—	2	36.00		
	(左)	—	37	—	4	38.00	2.71	
79.	下顎枝角(右)	—	—	—	—			
	(左)	—	126	—	4	121.00	5.29	
66/65	下顎幅示数	—	—	—	—			
68/65	幅長示数	—	—	—	—			
68(1)/65	幅長示数	—	—	—	—			
69(2)/69	下顎高示数(右)	78.13	—	—	1	78.13		
	(左)	—	75.68	—	4	84.03	5.85	
71/70	下顎枝示数(右)	—	—	—	—			
	(左)	—	57.63	—	3	59.95		
71a/70(2)	下顎枝示数(右)	—	—	—	1	66.97		
	(左)	—	69.33	—	4	69.75	8.34	
70(3)/71(1)	下顎切痕示数(右)	37.84	—	—	2	40.35		
	(左)	—	37.84	—	4	35.67	4.33	
	下顎体厚(右)	14	—	13	5	13.20	1.48	
	(左)	12	13	14	7	13.00	1.41	

表20 下顎骨計測値 (mm, 度) (Mandible)

	東二原 2-2		東二原 2-4		東二原 8-1		東二原 平均		東二原 平均	
	女性		女性		女性		女性		女性	
	n	M	n	M	n	M	n	M	n	(M)
65.	下顎前部突起幅	—	—	—	135	1	135			
65(1).	下顎前突起幅	—	102	—	96	2	99.00			
66.	下顎角幅	—	—	—	—	—	—			
67.	前下顎幅	45	47	—	43	3	46.67			
68.	下顎長	—	—	—	—	—	—			
68(1).	下顎長	—	—	—	—	—	—			
69.	オトガイ高	26	28	—	29	3	27.67			
69(1).	下顎体高(右)	27	—	—	29	2	28.00			
	(左)	—	30	—	28	2	29.00			
69(2).	下顎体高(右)	26	—	—	—	1	26			
	(左)	—	(26)	—	25	1	25	2	(25.50)	
70.	枝 高(右)	—	—	—	—	—	—			
	(左)	—	—	—	—	—	—			
70(1).	前 枝 高(右)	55	—	—	—	1	55			
	(左)	—	—	—	—	—	—			
70(2).	最小枝高(右)	48	—	—	—	1	48			
	(左)	—	47	—	45	2	46.00			
70(3).	下顎切痕高(右)	11	—	—	13	2	12.00			
	(左)	—	—	—	12	1	12			
71.	枝 幅(右)	34	—	—	—	1	34			
	(左)	—	34	—	45	2	40.00			
71a.	最小枝幅(右)	34	—	—	—	1	34			
	(左)	—	34	—	45	2	40.00			
71(1).	下顎切痕幅(右)	35	—	—	45	2	40.00			
	(左)	—	—	—	45	1	45			
79.	下顎枝角(右)	—	—	—	—	—	—			
	(左)	—	—	—	—	—	—			
66/65	下顎幅示数	—	—	—	—	—	—			
68/65	幅長示数	—	—	—	—	—	—			
68(1)/65	幅長示数	—	—	—	—	—	—			
69(2)/69	下顎高示数(右)	100.00	—	—	—	1	100.00			
	(左)	—	—	—	86.21	1	86.21	2	(89.53)	
71/70	下顎枝示数(右)	—	—	—	—	—	—			
	(左)	—	—	—	—	—	—			
71a/70(2)	下顎枝示数(右)	70.83	—	—	—	1	70.83			
	(左)	—	72.34	—	109.22	2	87.28			
70(3)/71(1)	下顎切痕示数(右)	31.43	—	—	28.89	2	30.16			
	(左)	—	—	—	26.09	1	26.09			
	下顎体厚(右)	13	—	—	13	2	13.00			
	(左)	13	14	—	15	3	14.00			

() = 推定値

(M) = () を含む平均値

表21 鎖骨計測値 (mm)(Clavicula)

		東二原	東二原	東二原	東二原	東二原	東二原	東二原		
		6-2	6-3	8-2	8-3	11-1	11-4	平均		
		男性	男性	男性	男性	男性	男性	男性		
								n	M	σ
1.	鎖骨最大長 (右)	—	143	—	—	—	—	1	143	—
	(左)	—	—	—	—	—	—	—	—	—
2.	骨体彎曲高 (右)	—	6	—	—	—	8	2	7.00	—
	(左)	—	5	—	—	7	—	2	6.00	—
2a.	骨体彎曲高 (右)	—	28	—	—	—	—	1	28	—
	(左)	—	—	—	—	29	—	1	29	—
2(1).	肩峰端彎曲高(右)	—	31	—	—	—	—	1	31	—
	(左)	—	—	—	—	—	—	—	—	—
3.	骨体彎曲弦長(右)	—	97	—	—	—	104	2	100.50	—
	(左)	—	101	—	—	104	—	2	102.50	—
4.	中央楕圓徑 (右)	11	9	10	—	—	9	4	9.75	0.96
	(左)	—	9	—	10	11	—	3	10.00	—
5.	中央矢狀徑 (右)	14	13	12	—	—	12	4	12.75	0.96
	(左)	—	13	—	12	14	—	3	13.00	—
6.	中央 周 (右)	41	37	36	—	—	35	4	37.25	2.62
	(左)	—	37	—	36	41	—	3	38.00	—
6/1	長厚示數 (右)	—	25.87	—	—	—	—	1	25.87	—
	(左)	—	—	—	—	—	—	—	—	—
2a/1	彎曲示數 (右)	—	19.58	—	—	—	—	1	19.58	—
	(左)	—	—	—	—	—	—	—	—	—
4/5	鎖骨断面示數(右)	78.57	69.23	83.33	—	—	—	3	77.06	—
	(左)	—	69.23	—	83.33	78.57	—	3	77.06	—
2(1)/1	肩峰端彎曲示數(右)	—	21.68	—	—	—	—	1	21.68	—
	(左)	—	—	—	—	—	—	—	—	—

表22 鎖骨計測値 (mm) (Clavicula)

	東二原	東二原	東二原
	2-2	8-1	平均
	女 性	女 性	女 性
			n M
1. 鎖骨最大長 (右)	-	-	-
(左)	-	-	-
2. 骨体彎曲高 (右)	-	-	-
(左)	-	10	1 10
2a. 骨体彎曲高 (右)	-	-	-
(左)	-	-	-
2(1). 肩峰端彎曲高(右)	-	-	-
(左)	-	-	-
3. 骨体彎曲弦長(右)	-	-	-
(左)	-	111	1 111
4. 中央垂直徑 (右)	7	9	2 8.00
(左)	-	9	1 9
5. 中央矢状徑 (右)	10	10	2 10.00
(左)	-	11	1 11
6. 中 央 周 (右)	29	31	2 30.00
(左)	-	34	1 34
6/1 長厚示數 (右)	-	-	-
(左)	-	-	-
2a/1 彎曲示數 (右)	-	-	-
(左)	-	-	-
4/5 鎖骨断面示數(右)	70.00	90.00	2 80.00
(左)	-	81.82	1 81.82
2(1)/1 肩峰端彎曲示數(右)	-	-	-
(左)	-	-	-

表23 肩甲骨計測値 (mm) (Scapula)

		東二原	東二原	東二原	東二原	東二原	東二原	
		6-3	8-3	11-1	11-4	平均	8-1	
		男性	男性	男性	男性	男性	女性	
						n	M	
11.	鳥口突起最大長(右)	43	-	-	43	2	43.00	-
	(左)	-	-	-	-	-	-	43
12.	關節窩長(右)	34	-	-	36	2	35.00	-
	(左)	-	35	35	-	2	35.00	32
13.	關節窩幅(右)	26	-	-	-	1	26	-
	(左)	25	-	27	-	2	26.00	23
14.	關節窩深(右)	4	-	-	4	2	4.00	-
	(左)	-	4	5	-	2	4.50	4
13/12	關節窩長幅示数(右)	76.47	-	-	-	1	76.47	-
	(左)	-	-	77.14	-	1	77.14	71.68
14/12	關節窩彎曲示数(右)	11.76	-	-	11.11	2	11.44	-
	(左)	-	11.43	14.29	-	2	12.86	12.50

表24 上腕骨計測値 (mm) (Humerus)

	東二原	東二原	東二原	東二原	東二原	東二原
	6-2 男性	6-3 男性	8-2 男性	8-3 男性	11-1 男性	11-4 男性
1. 上腕骨最大長(右)	—	—	—	—	—	—
(左)	—	—	—	—	—	—
2. 上腕骨全長(右)	—	180	—	—	—	—
(左)	—	—	—	—	—	—
3. 上端幅(右)	—	—	—	—	—	—
(左)	—	—	—	—	—	—
3(1). 横上径(右)	—	—	—	—	—	—
(左)	—	—	—	—	—	—
4. 下端幅(右)	—	—	—	—	—	—
(左)	56	—	—	—	—	—
5. 中央最大径(右)	21	22	19	22	22	21
(左)	—	21	—	—	23	—
6. 中央最小径(右)	18	16	15	16	19	15
(左)	—	15	—	—	18	—
7. 骨体最小径(右)	59	57	66	—	—	60
(左)	—	56	—	—	63	—
7(a). 中央径(右)	63	62	60	63	67	61
(左)	—	60	—	—	68	—
8. 頭径(右)	—	—	—	—	—	—
(左)	—	—	—	—	—	—
9. 頭最大径径(右)	—	—	—	—	—	—
(左)	—	—	—	—	—	—
10. 頭最大矢状径(右)	—	—	—	—	—	—
(左)	—	—	—	—	—	—
11. 槽車幅(右)	—	—	—	21	—	—
(左)	—	—	—	—	—	—
12. 小頭幅(右)	17	17	—	—	—	—
(左)	—	—	—	—	—	—
12(a). 槽車幅および小頭幅(右)	—	—	—	—	—	—
(左)	—	—	—	—	—	—
12(b). 小頭幅(右)	—	—	—	—	—	—
(左)	—	—	—	—	—	—
13. 槽車深(右)	—	—	—	—	—	—
(左)	—	—	—	—	—	—
14. 尺骨頭高幅(右)	—	—	—	25	—	—
(左)	27	—	—	—	—	—
15. 尺骨頭高深(右)	—	—	—	13	—	—
(左)	11	—	—	—	—	—
6/5 骨体断面示数(右)	85.71	72.73	78.95	72.73	82.61	71.43
(左)	—	71.43	—	—	78.16	—
7/1 長厚示数(右)	—	—	—	—	—	—
(左)	—	—	—	—	—	—
9/10 頭断面示数(右)	—	—	—	—	—	—
(左)	—	—	—	—	—	—
11/4 槽車上縁示数(右)	—	—	—	—	—	—
(左)	—	—	—	—	—	—

表24 續き (Continued)

	東二原			東二原
	平均			8-1
	男 性			女 性
	n	M	σ	
1. 上腕骨最大長(右)	-	-	-	-
(左)	-	-	-	272
2. 上腕骨全長(右)	1	280	-	-
(左)	-	-	-	270
3. 上 端 幅(右)	-	-	-	-
(左)	-	-	-	-
3(1). 横 上 径(右)	-	-	-	-
(左)	-	-	-	-
4. 下 端 幅(右)	-	-	-	-
(左)	1	56	-	-
5. 中央最大径(右)	6	21.33	1.37	-
(左)	2	22.00	-	30
6. 中央最小径(右)	6	16.50	1.64	-
(左)	2	16.50	-	15
7. 骨体最小径(右)	4	58.00	1.83	-
(左)	2	59.50	-	54
7(a). 中 央 洞(右)	6	62.67	2.42	-
(左)	2	64.00	-	58
8. 頸 洞(右)	-	-	-	-
(左)	-	-	-	-
9. 頸最大横径(右)	-	-	-	-
(左)	-	-	-	40
10. 頸最大矢状径(右)	-	-	-	-
(左)	-	-	-	-
11. 滑 車 幅(右)	1	21	-	-
(左)	-	-	-	18
12. 小 頸 幅(右)	2	17.00	-	-
(左)	-	-	-	-
12(a). 滑車幅および小頸幅(右)	-	-	-	-
(左)	-	-	-	-
12(b). 小 頸 幅(右)	-	-	-	-
(左)	-	-	-	-
13. 滑 車 径(右)	-	-	-	-
(左)	-	-	-	23
14. 尺骨頭窩幅(右)	1	25	-	-
(左)	1	27	-	-
15. 尺骨頭窩深(右)	1	13	-	-
(左)	1	11	-	-
6/5 骨体断面径(右)	5	77.36	5.97	-
(左)	2	74.85	-	75.00
7/1 長厚示数(右)	-	-	-	-
(左)	-	-	-	19.85
9/10 型断面示数(右)	-	-	-	-
(左)	-	-	-	-
11/4 滑車上径示数(右)	-	-	-	-
(左)	-	-	-	-

表25 桡骨計測値 (mm) (Radius)

		東二原	東二原	東二原	東二原	東二原	東二原	東二原		
		6-2	6-3	8-2	8-8	11-1	11-5	平均		
		男性	男性	男性	男性	男性	男性	n	M	<i>s</i>
1.	最大長 (右)	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	(左)	—	—	—	—	—	—	—	—	—
1b.	平行長 (右)	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	(左)	—	—	—	—	—	—	—	—	—
2.	横径長 (右)	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	(左)	—	—	—	—	—	—	—	—	—
3.	最小周 (右)	43	—	39	40	—	43	4	41.25	2.06
	(左)	—	—	—	—	41	—	1	41	—
4.	骨体横径 (右)	16	13	17	16	—	17	5	15.80	1.64
	(左)	—	—	—	—	18	—	1	18	—
4a.	骨体中央横径 (右)	16	13	16	14	—	17	5	15.20	1.64
	(左)	—	—	—	—	16	—	1	16	—
4(1).	小頭横径 (右)	23	—	—	—	—	—	1	23	—
	(左)	—	—	—	—	—	—	—	—	—
4(2).	頸横径 (右)	14	13	—	13	—	—	3	13.33	—
	(左)	—	—	—	—	—	—	—	—	—
5.	骨体矢状径 (右)	12	—	13	12	—	12	4	12.25	0.50
	(左)	—	—	—	—	12	—	1	12	—
5a.	骨体中央矢状径 (右)	12	11	13	12	—	12	5	12.00	0.71
	(左)	—	—	—	—	12	—	1	12	—
5(1).	小頭矢状径 (右)	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	(左)	—	—	—	—	—	—	—	—	—
5(2).	頸矢状径 (右)	15	12	—	15	—	—	3	14.33	—
	(左)	—	—	—	—	—	—	—	—	—
5(3).	小頭周 (右)	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	(左)	—	—	—	—	—	—	—	—	—
5(4).	頸周 (右)	46	43	45	47	—	—	4	45.25	1.71
	(左)	—	—	—	—	—	—	—	—	—
5(5).	骨体中央周 (右)	44	38	32	42	—	45	5	40.20	5.31
	(左)	—	—	—	—	45	—	1	45	—
5(6).	骨下端幅 (右)	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	(左)	—	—	—	—	—	—	—	—	—
3/2	長厚示数 (右)	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	(左)	—	—	—	—	—	—	—	—	—
5/4	骨体断面示数 (右)	75.00	—	76.47	75.00	—	70.59	4	74.26	2.56
	(左)	—	—	—	—	66.67	—	1	66.67	—
5a/4a	中央断面示数 (右)	75.00	84.62	81.25	85.71	—	70.59	5	79.43	6.47
	(左)	—	—	—	—	—	—	—	—	—

表26 桡骨計測値 (mm) (Radius)

		東二原	東二原	東二原
		2-4	8-1	平均
		女性	女性	女性
				n M
1.	最大長 (右)	—	—	—
	(左)	—	—	—
1b.	平行長 (右)	—	—	—
	(左)	—	—	—
2.	機能長 (右)	—	—	—
	(左)	—	—	—
3.	最小周 (右)	—	—	—
	(左)	33	38	2 35.50
4.	骨体横径(右)	—	—	—
	(左)	—	15	1 15
4a.	骨体中央横径(右)	—	—	—
	(左)	—	15	1 15
4(1).	小頭横径(右)	—	—	—
	(左)	—	—	—
4(2).	頸横径 (右)	—	—	—
	(左)	—	—	—
5.	骨体矢状径(右)	—	—	—
	(左)	—	12	1 12
5a.	骨体中央矢状径(右)	—	—	—
	(左)	—	11	1 11
5(1).	小頭矢状径(右)	—	—	—
	(左)	—	—	—
5(2).	頸矢状径(右)	—	—	—
	(左)	—	—	—
5(3).	小頭周 (右)	—	—	—
	(左)	—	—	—
5(4).	頸 周 (右)	—	—	—
	(左)	—	—	—
5(5).	骨体中央周(右)	—	—	—
	(左)	—	42	1 42
5(6).	骨下端幅(右)	—	—	—
	(左)	—	30	1 30
3/2	長厚示数(右)	—	—	—
	(左)	—	—	—
5/4	骨体断面示数(右)	—	—	—
	(左)	—	75.00	1 75.00
5a/4a	中央断面示数(右)	—	—	—
	(左)	—	73.33	1 73.33

表27 尺骨計測値 (mm) (Ulna)

		東二原	東二原	東二原	東二原	東二原
		6-2	8-2	11-3	平均	8-1
		男性	男性	男性	男性	女性
				n M		
1.	最大長 (右)	—	—	—	—	—
	(左)	—	—	—	—	—
2.	機能長 (右)	—	—	—	—	—
	(左)	—	—	—	—	193
3.	最小周 (右)	38	—	35	2 36.50	—
	(左)	—	—	—	—	34
11.	尺骨矢状径(右)	13	13	12	3 12.67	—
	(左)	—	—	—	—	12
12.	尺骨横径(右)	17	17	17	3 17.00	—
	(左)	—	—	—	—	15
S	中央最小径(右)	13	12	11	3 12.00	—
	(左)	—	—	—	—	10
L	中央最大径(右)	17	17	16	3 16.67	—
	(左)	—	—	—	—	16
C	中央周(右)	51	48	46	3 48.33	—
	(左)	—	—	—	—	42
3/2	長厚示数 (右)	—	—	—	—	—
	(左)	—	—	—	—	17.62
11/12	骨体断面示数(右)	76.47	76.47	70.59	3 74.51	—
	(左)	—	—	—	—	80.00
S/L	中央断面示数(右)	76.47	70.59	68.75	3 71.94	—
	(左)	—	—	—	—	62.50

表28 大腦骨計測値 (mm) (Fesur)

	東二原	東二原	東二原	東二原	東二原	東二原
	2-1	6-1	6-2	6-3	8-2	8-3
	男 性	男 性	男 性	男 性	男 性	男 性
1. 最大長(右)	—	—	427	408	—	409
(左)	—	—	—	—	—	—
2. 自然位全長(右)	—	—	—	—	—	—
(左)	—	—	—	—	—	—
3. 最大軀子長(右)	—	—	—	—	—	—
(左)	—	—	—	—	—	—
4. 自然位軀子長(右)	—	—	—	—	—	—
(左)	—	—	—	—	—	—
5. 骨体中央矢状径(右)	—	—	29	25	28	—
(左)	33	28	29	28	29	26
7. 骨体中央横径(右)	—	—	25	22	24	—
(左)	25	25	25	22	25	23
8. 骨体中央周(右)	—	—	85	77	81	—
(左)	93	85	85	80	87	76
9. 骨体上横径(右)	—	—	31	—	28	28
(左)	28	31	—	—	29	—
10. 骨体上矢状径(右)	—	—	25	—	24	25
(左)	—	—	—	—	25	—
15. 頸垂直径(右)	—	—	32	—	—	32
(左)	—	—	35	—	32	—
16. 頸矢状径(右)	—	—	—	—	—	25
(左)	—	—	—	—	—	—
17. 頸 周(右)	—	—	—	—	—	92
(左)	—	—	—	—	—	—
18. 頸垂直径(右)	—	—	—	—	44	43
(左)	—	—	43	—	—	—
19. 頸 横 径(右)	—	—	—	42	—	—
(左)	—	—	42	—	—	—
20. 頸 周(右)	—	—	—	—	—	—
(左)	—	—	136	—	—	—
21. 上 頸 幅(右)	—	—	—	—	—	—
(左)	—	—	—	—	—	—
8/2 長厚示数(右)	—	—	—	—	—	—
(左)	—	—	—	—	—	—
6/7 骨体中央断面示数(右)	—	—	111.54	118.18	116.67	—
(左)	126.92	112.00	111.54	127.27	116.66	113.04
10/9 上骨体断面示数(右)	—	—	80.65	—	85.71	89.29
(左)	—	—	—	—	86.21	—
16/15 頸断面示数(右)	—	—	—	—	—	78.13
(左)	—	—	—	—	—	—
15/18 頸断面示数(右)	—	—	—	—	—	—
(左)	—	—	97.67	—	—	—

表28 続々 (Continued)

	東二原	東二原	東二原	東二原	東二原		
	11-1	11-3	11-4	11-5	平均		
	男性	男性	男性	男性	n	M	s
1. 最大長(右)	—	—	—	—	3	415.00	
(左)	—	—	—	—		—	
2. 自然位金長(右)	—	—	—	—		—	
(左)	—	—	—	—		—	
3. 最大鞍子長(右)	—	—	—	—		—	
(左)	—	—	—	—		—	
4. 自然位鞍子長(右)	—	—	—	—		—	
(左)	—	—	—	—		—	
6. 骨体中央矢状径(右)	—	25	27	25	6	26.83	1.47
(左)	29	27	—	—	8	28.63	2.07
7. 骨体中央横径(右)	—	22	24	25	6	29.93	1.60
(左)	25	22	24	—	9	24.22	1.56
8. 骨体中央周(右)	—	77	80	81	6	80.33	3.33
(左)	84	77	—	—	8	83.38	5.58
9. 骨体上横径(右)	29	25	—	—	5	28.40	1.82
(左)	28	—	—	—	4	29.00	1.41
10. 骨体上矢状径(右)	24	21	—	—	5	23.80	1.64
(左)	24	—	—	—	2	24.50	
15. 頸造直径(右)	33	31	28	32	6	31.33	1.76
(左)	—	—	—	—	2	33.50	
16. 頸矢状径(右)	28	24	—	—	3	25.67	
(左)	—	—	—	—		—	
17. 頸 周(右)	98	91	—	—	3	93.67	
(左)	—	—	—	—		—	
18. 頸造直径(右)	44	41	43	47	6	43.67	1.97
(左)	—	—	—	—	1	43	
19. 頸 横 径(右)	43	—	—	—	2	42.50	
(左)	—	—	—	—	1	42	
20. 頸 周(右)	—	—	—	—		—	
(左)	—	—	—	—	1	136	
21. 上 頸 幅(右)	—	—	—	—		—	
(左)	—	—	—	—		—	
8/2 長厚示数(右)	—	—	—	—		—	
(左)	—	—	—	—		—	
6/7 骨体中央断面示数(右)	—	113.54	112.50	104.00	6	112.75	4.97
(左)	116.00	122.73	—	—	8	118.19	6.62
10/9 上骨体断面示数(右)	82.76	80.77	—	—	5	83.83	3.67
(左)	85.71	—	—	—	2	85.96	
16/15 頸断面示数(右)	84.85	77.42	—	—	3	80.13	
(左)	—	—	—	—		—	
19/18 頸断面示数(右)	97.73	—	—	—	1	97.73	
(左)	—	—	—	—	1	97.67	

表25 大腸骨計測値 (mm) (Femur)

	東二原	東二原	東二原	東二原	東二原		
	2-2	2-3	2-4	8-1	平均		
	女性	女性	女性	女性	n	M	σ
1. 最大長(右)	—	382	—	396	2	389.00	
(左)	—	—	—	—		—	
2. 自然位全長(右)	—	—	—	—		—	
(左)	—	—	—	—		—	
3. 最大軀子長(右)	—	—	—	—		—	
(左)	—	—	—	—		—	
4. 自然位軀子長(右)	—	—	—	—		—	
(左)	—	—	—	—		—	
6. 骨体中央矢状径(右)	22	25	25	27	4	24.75	2.06
(左)	22	—	24	26	3	24.00	
7. 骨体中央横径(右)	21	22	23	24	4	22.50	1.29
(左)	21	—	22	25	3	22.67	
8. 骨体中央周(右)	69	73	74	80	4	74.00	4.55
(左)	68	—	72	79	3	73.00	
9. 骨体上横径(右)	25	—	—	—	1	25	
(左)	25	—	27	30	3	27.33	
10. 骨体上矢状径(右)	20	—	—	—	1	20	
(左)	19	—	20	23	3	20.67	
15. 頸垂直径(右)	—	—	26	—	1	26	
(左)	—	—	—	29	1	29	
16. 頸矢状径(右)	—	—	20	—	1	20	
(左)	—	—	—	23	1	23	
17. 頸周(右)	—	—	78	—	1	78	
(左)	—	—	—	86	1	86	
18. 頸垂直径(右)	—	—	—	42	1	42	
(左)	—	—	—	42	1	42	
19. 頸横径(右)	—	38	—	41	2	39.50	
(左)	—	—	—	42	1	42	
20. 頸周(右)	—	—	—	132	1	132	
(左)	—	—	—	133	1	133	
21. 上頸幅(右)	—	—	—	—		—	
(左)	—	—	—	—		—	
8/2 長厚示数(右)	—	—	—	—		—	
(左)	—	—	—	—		—	
6/7 骨体中央断面示数(右)	104.76	113.64	108.70	112.50	4	109.90	4.02
(左)	104.76	—	109.09	104.00	3	105.95	
10/9 上骨体断面示数(右)	80.00	—	—	—	1	80.00	
(左)	76.00	—	74.07	78.67	3	75.58	
16/15 頸断面示数(右)	—	—	76.92	—	1	76.92	
(左)	—	—	—	79.31	1	79.31	
19/18 頸断面示数(右)	—	—	—	97.62	1	97.62	
(左)	—	—	—	100.00	1	100.00	

表30 胫骨計測値 (mm) (Tibia)

		東二原	東二原	東二原	東二原	東二原	東二原
		6-2	6-3	8-2	8-3	11-1	11-3
		男性	男性	男性	男性	男性	男性
8.	中央最大径 (右)	31	—	—	—	33	28
	(左)	30	29	27	27	30	—
8a.	栄養孔位最大径(右)	37	—	—	—	32	31
	(左)	35	31	31	30	32	—
9.	中央横径 (右)	21	19	—	20	22	21
	(左)	19	20	22	20	23	—
9a.	栄養孔位横径(右)	22	—	—	—	21	24
	(左)	20	21	23	21	24	—
10.	骨体周 (右)	83	—	—	—	80	77
	(左)	80	78	75	75	82	—
10a.	栄養孔位周 (右)	91	—	—	—	85	83
	(左)	88	81	83	81	89	—
10b.	最小周 (右)	74	69	—	68	75	—
	(左)	—	—	—	—	75	—
9/S	中央断面示数(右)	67.74	—	—	—	73.33	75.00
	(左)	63.33	68.97	81.48	74.07	76.67	—
9a/8a	栄養孔位断面示数(右)	59.46	—	—	65.63	75.00	62.50
	(左)	57.14	67.74	74.19	70.00	75.00	—

表30 続き (Continued)

		東二原	東二原		
		11-5	平均		
		男性	男性		
		n	M	σ	
8.	中央最大径 (右)	23	4	29.50	1.28
	(左)	—	5	28.60	1.52
8a.	栄養孔位最大径(右)	—	4	33.25	2.50
	(左)	—	5	31.80	1.92
9.	中央横径 (右)	23	6	21.00	1.41
	(左)	—	5	20.80	1.64
9a.	栄養孔位横径(右)	—	4	21.75	1.71
	(左)	—	5	21.80	1.64
10.	骨体周 (右)	82	4	80.50	2.65
	(左)	—	5	78.00	3.08
10a.	栄養孔位周 (右)	—	4	87.25	3.86
	(左)	—	5	84.40	3.85
10b.	最小周 (右)	—	4	71.50	3.51
	(左)	—	1	75	—
9/S	中央断面示数(右)	79.31	4	73.65	4.79
	(左)	—	5	72.90	7.00
9a/8a	栄養孔位断面示数(右)	—	4	65.65	6.72
	(左)	—	5	68.82	7.18

表31 胫骨計測值 (mm) (Tibia)

	東二原	東二原	東二原	東二原	東二原		
	2-2	2-3	2-4	8-1	平均		
	女性	女性	女性	女性	n	M	σ
1. 胫骨全長 (右)	—	—	—	—	—	—	—
(左)	—	—	—	—	—	—	—
1a. 胫骨最大長(右)	—	—	309	—	1	309	—
(左)	—	—	—	—	—	—	—
1b. 胫骨長(右)	—	—	301	—	1	301	—
(左)	—	—	—	—	—	—	—
2. 顆距間距離(右)	—	—	287	—	1	287	—
(左)	—	—	—	—	—	—	—
3. 最大上端幅(右)	—	—	—	—	—	—	—
(左)	—	—	—	—	—	—	—
3a. 上內關節面幅(右)	—	—	27	27	2	27.00	—
(左)	—	—	—	—	—	—	—
3b. 上外關節面幅(右)	—	—	—	—	—	—	—
(左)	—	—	—	—	—	—	—
8. 中央最大徑 (右)	23	23	25	26	4	24.25	1.50
(左)	23	—	24	27	3	24.67	—
8a. 榮養孔位最大徑(右)	24	26	26	31	4	26.75	2.99
(左)	24	—	28	32	3	28.00	—
9. 中央橫徑 (右)	18	19	20	19	4	19.00	0.82
(左)	18	—	20	20	3	19.33	—
9a. 榮養孔位橫徑(右)	20	19	21	20	4	20.00	0.82
(左)	20	—	20	23	3	21.00	—
10. 骨體闊 (右)	65	67	70	73	4	68.75	3.50
(左)	65	—	68	75	3	68.67	—
10a. 榮養孔位闊 (右)	71	73	74	81	4	74.75	4.35
(左)	70	—	77	86	3	77.67	—
10b. 最 小 闊 (右)	62	59	63	68	4	63.00	3.74
(左)	60	58	63	69	4	62.50	4.80
9/8 中央断面示數(右)	78.26	82.61	80.00	73.08	4	78.49	4.02
(左)	78.26	—	83.33	74.07	3	78.56	—
9a/8a 榮養孔位断面示數(右)	83.33	73.08	80.77	64.55	4	75.42	8.48
(左)	83.33	—	71.43	71.88	3	75.55	—

表32 膝蓋骨計測値 (mm) (Patella)

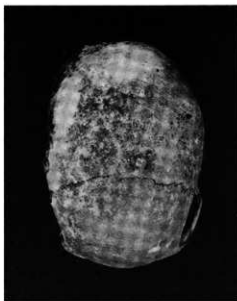
	東二原	東二原	東二原	東二原	東二原
	11-3	11-4	11-5	平均	8-1
	男性	男性	男性	男 性	女 性
				n M	
1. 最大高 (右)	39	-	42	2 40.50	-
(左)	38	42	-	2 40.00	-
2. 最大幅 (右)	-	-	43	1 43	-
(左)	-	45	-	1 45	38
3. 最大厚 (右)	18	19	20	3 19.00	-
(左)	18	21	-	2 19.50	18
4. 關節面高 (右)	30	-	32	2 31.00	-
(左)	29	34	-	2 31.50	-
5. 内切面幅 (右)	-	-	20	1 20	-
(左)	-	20	-	1 20	20
6. 外切面幅 (右)	25	28	26	3 26.33	-
(左)	22	26	-	2 24.00	23
1/2. 膝蓋骨高幅示数 (右)	-	-	97.67	1 97.67	-
(左)	-	93.33	-	1 93.33	-

表33 推定身長値 (cm) (Estimated stature)

		東二原	東二原	東二原	東二原	東二原
		6-2	6-3	2-3	2-4	8-1
		男性	男性	女性	女性	女性
Pearsonの式	上腕骨(右)	-	-	-	-	-
	(左)	-	-	-	-	-
	橈骨(右)	-	-	-	-	-
	(左)	-	-	-	-	-
	大腿骨(右)	161.58	158.20	147.14	-	149.87
	(左)	-	-	-	-	-
藤井の式	上腕骨(右)	-	-	-	-	-
	(左)	-	-	-	-	-
	橈骨(右)	-	-	-	-	-
	(左)	-	-	-	-	-
	大腿骨(右)	160.37	155.92	146.61	-	149.75
	(左)	-	-	-	-	-
	脛骨(右)	-	-	-	145.85	-
	(左)	-	-	-	-	-



東二原6-3 (男性、熟年)
(Higashinihara 6-3, mature male)

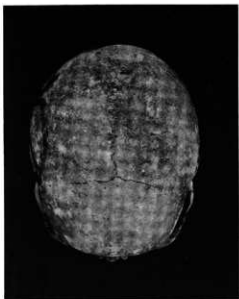


東二原8-2 (男性、熟年)
(Higashinihara 8-2, mature male)

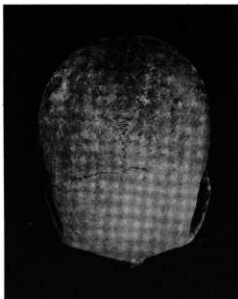


東二原8-3 (男性、熟年)
(Higashinihara 8-3, mature male)

頭蓋上面(Superior view of the skull)



東二原 2-4 (女性、熟年)
(Higashinihara 2-4, mature female)



東二原 8-1 (女性、熟年)
(Higashinihara 8-1, mature female)

頭蓋上面(Superior view of the skull)

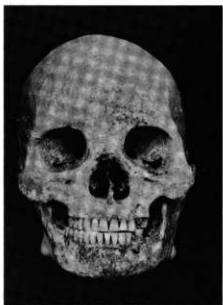


頭蓋前面(Frontal view of the skull)

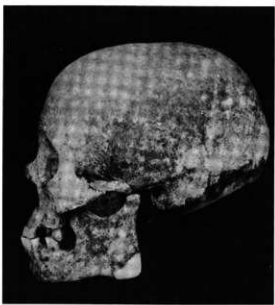


頭蓋側面(Lateral view of the skull)

東二原 2-4 (女性、熟年)
(Higashinihara 2-4, mature female)



頭蓋前面(Frontal view of the skull)



頭蓋側面(Lateral view of the skull)

東二原 8-1 (女性、熟年)
(Higashinihara 8-1, mature female)

小林市文化財調査報告書 第6集

東二原地下式横穴墓群

下の平地地下式横穴墓群

平成5年3月

発行：小林市教育委員会

印刷：ゆ金子印刷